
超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

なめ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

【Nコード】

N2514X

【作者名】

なめ猫

【あらすじ】

真王さん公認の、「超次元学園へようこそ！」のアナザーストーリーです。主に、カイト達やネプ姉妹などの視点多めです。一応、本家に合わせていければいいかなと。

なお、18禁要素も入るかもしれませんので、ご注意ください。

『書ける作品』

オリジナル、超次元ゲーム Neptune (mk2)、ファイナルファンタジータクティクスFFT、テイルズオブシンフォニア(ラタトスクモ)・ヴェスペリア・マイソロ123、ひぐらしのなく頃に、らきすた、銀魂、リリカルなのは、まどかマギカ、マリオ、スマブラX・DX、キングダムハーツ、ファイナルファンタジー(ディシディアが主)、ネタのみスクールデイズ、ポーボ、アイドルマスター、ロックマンX

1話「パティシエ・ロイド」(前書き)

まずは、真王さんのリクエストからで、アンドロイドの話です。戦争も希望されましたが、あまり書けませんでした；

1話「パティシエ・ロイド」

真王が理事長として存在しているこの学園。そこには、幾多の特殊すぎる学生達がいて、ある意味最大に特別な学園である。ここに入学した俺達は、そこで知りたいことを知ろうと、日々を過ごしていた。

これから語るのは、俺達の視点から見る学園の物語である。

……

かつて嫌な現実を知らしめられ、腐りきった学園から離別した俺達は、あの日…ネプテューヌ達の言葉をきっかけに、超次元学園へ入学した。

もう1度、学園というものを信じて…俺達はやり直すことにした。

きっと…理想がそこにあるんじゃないかって…

……

そして今日も、楽しくなりそうだ。

銀八「よし、今日はお前らに伝えとく話がある」

カイト達の担当、銀八がホームルームの時間にこんな話をした。横には、何やら人っぽい物が立っている。

銀八「今日は、こいつのテストをすることになった」
ミリア「それは…ロボット、ううん…アンドロイドですか？」
銀八「ああ、その通りだ。前日できたばかりの新型アンドロイドだ」
「はじめまして、カロンと申しますの。よろしく願いますの」

アンドロイドと呼ばれた人が、生徒達に挨拶をした。特徴は、紫髪にピンクの衣装とゴーグルを装備した少女だ。

銀八「スカリエッティ先生作で、とあるマジカルパティシエを真似たらしい。後から他のアンドロイドも動かすかもしれねえから、そこんところよろしく。絶対に壊したりしないよーにー」

そんなわけで、アンドロイドのテストが行われるらしい。

マリオ「テストって、何をするんですか？」

銀八「それは、これからの家庭の時間にやる。まあすぐにどんなアンドロイドなのか、すぐにわかるさ」

……

家庭科の時間

(ちなみに、こちらではお妙さんが担当になりました)

お妙「はい、というわけで今日はアンドロイドと一緒に調理をします。レシピは魚介類であれば何でもいいですよ」

ギルシア「そいつが調理を？」
スカリエッティ「その通りだ」

アンドロイドを観察するため、スカリエッティもいる。

スカリエツティ「その記念すべき1号であるカロンは、どんな材料でもあらゆる豪華料理を作ることができるのだよ。どんな材料でも…ね」

リユカ「本当？じゃあ、あのシャブスキーも作れるの？」

カロン「はい、余裕ですの」

カロンは自信ありげに答える。

スネーク「じゃあ、あのミラクルパフェとか、ヨツシークッキーもできるつての？」

スバル「特上サーロインも!？」

ビビ「1UPプディングも作れるのー!？」

カロン「はい、ほんとこいのですの」

カロンはそう答え、これから証明することを約束した。

カイト「まじかよ…そりゃすげえな」

ミリア「じゃあ早速見せてくれるかな？」

カロン「わかりましたの。では、これからマグロとアワビ料理を「ちそうさせますの!」

調理する机から、まず下ごしらえされていないアワビと野菜を取り出しました。

カロン「まずは、アワビのステーキとサラダを作りますの。よく洗った材料を…」

ぶんっ!

カロン「さて、次はマグロですよ」

じゃきん！

セイラ「またツメで切るのか…！？」

ジャンヌ「さつきみたいなのに、スパッと…？」

そう予想しながら見守っていると、カロンの様子が変わった。

カロン「…ぐちゃぐちゃのミンチにしてやんよ……」

生徒達「…！！？」

ザスッ！！

黒い表情をし、ツメをマグロにつき刺す。

カロン「つぶれる…！！」

ずががががががががががががががが！！！！（連打）

カロン「とどめやあああっ…！！！！」

ずがああああん！！！！

結果、ミンチになったマグロの身が皿の上にできました。

カロン「はい、マグロもこれで下ごしらえしましたの」
銀時「机粉碎したんですけどおおおおお…！！？」

調理台の机を犠牲にして。

スカリエツティ「カロンは1秒につき16連打もできてね、さらにツメの威力と合わさってあらゆる物を砕くことができるのだよ。冷凍していても問題はない」

新八「いや問題あるよ!!?どう考えても戦闘向けでしょ!!!」

ラム「ていうか、今黒くなっただけど!」

スカリエツティ「仕様だ、問題ない」

マリオ「だから問題ありすぎだろう!!?」

ルイージ「もはや兵器だよね...」

生徒達は、カロンのバトル向けな仕様に引き気味だ。

カロン「では、あとは材料をまとめて...!」

ぶんっ（上に投げる）

カロン「クッキングしちゃうのです」

しゅばっ！（ジャンプ）

スネーク「まさか、また切りまくる気か？」

ぴかーっ！（光りだす）

零斗「うおっ、まぶしっ!?!」

いきなり光りでしたが、それはすぐにおさまった。
すると...

何故だ…

で、肝心の料理の出来はどうなのか？

気になったカイトとミリアが味見を試してみた。

ぱくっ

カイト「！？……うまい……だと！？」

ミリア「すごい……本当によくできてる……！」

ティアナ「えっ、嘘！？」

本当なのか疑うティアナ達も、料理を口にした。

ぱくっ

ティアナ「……本当だ……おいしい！」

スバル「すごい！これ豪華料理そのものだよ！」

なんと、料理の出来は本物だったようだ。他の生徒達も料理を口にしてみた。そして、みんな料理に花丸の評価を下したのだった。

カイト「まさか、まじて作ったまうとは……恐るべし、カロン……！」

スカリエツティ「ははは、どうやらテストは成功のようだな。これならば、2号達も……」

ピーーッ！

全員「？」

ところが、その時カロンの目が赤く光り出し、さらにアラームまで

鳴り出した。

カロン「使徒接近！ネコツタ共が来ましたの！！カロン、出撃しますのー！！」

ダッ、ガシャーン！！

突然カロンは、ロケットブースターを作動させ、窓ガラスを割りながら飛んでいった。

近藤「なな、何だ！？」

土方「勝手に飛んで行きやがったぞー！？」

スカリエッティ「ううむ…どうやら、宿敵のアンドロイド・ネコツタ軍団が来たようだな」

ネス「え、何それ！？」

スカリエッティ「私の宿敵ドーンが作ったというネコバージョンアンドロイドだ。奴はカロンとよく似ているが、ムチと電気で調理をするという。ドーンめ…私のアンドロイドを破壊するべく、量産してきたか」

銀時「何だそりゃ…」

スカリエッティ「だが心配はいらん。カロンには対ネコツタ用に、特殊エネルギーによる攻撃も搭載している。また、能力も大きく上昇するため、天下無双のパーティシエアンドロイドという呼び名もつく予定だ」

ノワール「あの、それもはやパーティシエじゃないでしょ…」

ユニ「どう考えても戦闘用アンドロイドじゃない…」

スカリエッティ「ふっ、今の時代は戦闘もできて当たり前なのだよ」
ビビ「どんだけ…」

アンドロイドも、何でもありなのだろう。何というか、ツッコミ所

がありすぎるとしか言えないだろう。

スカリエツティ「ちなみに、衣装を剥ぐこともできる上、羞恥システムも搭載してるので嫁がほしい人にもオススメだ」

ラム「どうでもいいシステムばかりじゃない…」

ロム「こくこく…」

ちなみに、カロンはスターライトパワーをもって、100体のネコツタを撃墜したらしい。

そして、やや全裸だったそうなの。

……

カイト「…ドーン……どっかで聞いたような…？」

こうして、今日も時間は流れていく。

1話「パティシエ・ロイド」(後書き)

アンドロイドやロボットも、世紀末なんだろうなあ。

2話「仲よくケンカしな」(前書き)

ネプテューヌ達4女神の競争話です。見てると、なんかトムとジェリーみたいです。

2話「仲よくケンカしな」

11:00 休み時間

カイト「そういえば、気になったんだけどさ…」

ネプテューヌ「なあに？」

カイト「ネプテューヌ達って、ネプギア達より上の女神なんだよな？」

ノワール「ええ、そうよ」

カイト「じゃあさ…」

『現在、4人中で誰がトップ人気なんだ？』

4女神「!!!!」

びしゅーん!!

4人に電撃走る。

ミリア「…?」

カイト「どうなんだ？」

ベール「決まってるじゃないですか。1番人気といえば、全面的に私ですわよ」

まず、ベールが笑顔で言う。

カイト「そうなのか？てことは、勉強も運動も？」

ベール「ええ、抜かりはありませんわ」

どや顔でそう答えた。

しかし、3人は黙っていなかった。

ノワール「何を言ってるの？勉強と運動だけよくても、他の行動も大事よ。早解きのテストで私がいとも勝ってるのを忘れたのかしら？」

ぎくっ

ベール「うっ…わ、私だって遅くなんてありませんわよっ」

ノワール「ふふっ、素早くかつてきばきにこなす私に、死角はないわ」

ブラン「…でも、以前早く終わらせた割に、間違いが多かったはず」
ぎくっ

ノワール「そ、それは…ちよこつと公式とかを勘違いしてただけよっ！それがなければ、パーフェクトだったわ！」

ブラン「そのちよつとした勘違いが命取り……正確さなら、私が上」
ネプテューヌ「そうかな？体育の時、サッカーとかバスケットで、力を入れすぎて変な所にまで飛んで行くことが多い気がするよ？かけっこも速くないし」

ぎくっ

ブラン「む…でも、手は抜いてない…っ」

ネプテューヌ「ふふんっ、それでも体育は私がよく勝ってるよんやっぱり主人公には敵わないと思うな」

ベール「いつ貴方が主人公になったんですの!? 大体、貴方は実技がよくても、学科はほとんど私達より下でしょう?」

ぎくっ

ネプテューヌ「ううっ…でもでも、ちゃんと黒点は取ってるよおっ！ーすんの長時間説教とか嫌だし…」

ベール「でも、ほとんど理解できてないのでしょうか? テストだけよければいいわけじゃありませんわよ」

ネプテューヌ「むうう…でも、でもっ!」

カイト「…あ、あのー…」

ノワール「とにかく、トップは私よ!」

ベール「いいえ、私ですわっ!」

ブラン「私だっつってんだろっ!」

ネプテューヌ「絶対私だよーっ!」

ワイワイギャーギャー!

女神達がケンカを始めました。

ミリア「ケンカしちゃってる…」

カイト「…俺、なんかマズったか?」

ネプギア「あはは…気にしないでください。いつものことですから」

ミリア「そ、そうなんだ…」

ネプギアいわく、いつものことであるという言葉に、ミリア達は意外な気持ちになった。

とはいえ、いきなりバトルになったりしないあたり、ただのライバル同士なのだろうと、カイトは思うのだった。

ユニ「はあ…全く、4人共いつもこれなんだから」

キャロ「ビビちゃんは、誰が1番だと思う？」

ビビ「んー…ちょっとわかんないなあ。皆魅力的だから（f^_^）」

銀時「変態淑女でもわからねえか」

ビビ「うっさいパーマ野郎」

他の人から見ても、どうも判断しにくいようだ。ところが、そこにチフユがやって来る。

チフユ「そんなに白黒つけたいのなら、とっておきの奴があるぞ」

4女神「！！」

チフユ「どうせこの後は体育なんだ。そこで私が見てやろう」

………

体育の時間
運動場にて

チフユ「というわけで、種目はこれだ」

チフユが用意したのは、いろんな障害物が配置された400m走だった。

チフユ「この400m走には、運動だけでなく勉強や雑務などが必要とする障害物もある。全面的に優れた者でなければ、容易に突破できん。お前達にはちょうどいいだろう」

カイト「なるほど、これなら白黒つけやすいかもな」
チフユ「なお、ゴールには豪華料理としてお妙作の4等分済みシヨ
ートケーキを用意している。もちろん先に食べた者の勝ちだ。わか
ったな？」

説明を受けた4女神はというと…

ノワール「悪くない種目ね。いいわ、これで白黒つけましょ」
ベール「ええ…私達の中で誰が1番になれるのか…」

ブラン「決着をつけてやるぜ！」

ネプテューヌ「恨みっこはなしだからねっ！」

燃えているようだった。

白黒つけようと、皆やる気満々だ。

というわけで…

チフユ「ではトップランナーいくぞ。よーい、はじめー！」

ピーッ！

トップランナーの女神達は、一斉にスタートした。

障害物は文字通り、いろいろ存在していた。女神達を苦しめる物も
あれば、容易に突破される物もある。

他の生徒達は、ただじっと見守るのだった。

ノワール「こうしてああして…よしー！」

書類の処理だったり、

ブラン「こんな重さ、容易…！」

重たいボールを投げる的当てだったり、

ボール「余裕ですわ！」

全学科のテストだったり、

ネプテューヌ「ほいなっ！それぞれそれーっ！」

テグ人形を相手にしたり…

だが、勝負は互角だった。

それぞれ得意不得意が綺麗に分かれていて、ほとんど同位に並ぶことが多かったのだ。

そして、ラストスパートにさしかかった。

ノワール「後は、ケーキを食べるだけね！」

ネプテューヌ「とりゃー！一番は私がいただきー！」

ベール「そうはさせませんわよ！」

ブラン「どけやああああっ！！！！！」

4人同時にケーキへ手が伸びる。

カイト「おっ、決着か！？」

ミリア「誰が勝つのかな！？」

4女神「もらったあー！！！！！」

誰が勝利を手にするのか？

新八「いますよね、空気読まない馬鹿って…」

桂「うむ…馬鹿と言うしかあるまい」

カイト「ちなみに、全部食われたってことは…」

レーティア「もうこの400m走は、できないことになるわね…」

ユニ「絶対馬鹿でしょ、あいつ…」

セイタ「馬鹿だな…」

零斗「馬鹿だ…」

ティアナ「信じられないくらいに馬鹿…」

当然、冷たい目で見るだろう。それほどのことをしたのだから。

ハタ「んぐっ…！な、ころそこっ、馬鹿馬鹿言うな…！馬鹿じゃないぞ！いいだろうが、たかがケーキごときで…」

「oooooooooooooooooooooo…！！」

ハタ「ん…！？」

さらに、女神達にもケンカを売った。

ベール「ひどいですわ…せっかく、決着がつきそうでしたのに…（グングニル装備）」

ノワール「ほんとよ…最悪だわ…（カリバーン装備）」

ネプテューヌ「ひどいよお…空気ぶち壊されて、私すっごくイラッてきちゃったよ…？（レーヴァテイン装備）」

ブラン「覚悟…できてんだろうな…？（ハードクラッシャー装備）」

4女神達の怒りを買ったハタ王子は、びびるしかなかった。

ハタ「ひ、ひいいいいっ…！！？じ、じい何とかせい…！！」

じい「はっ」

何とか逃れようと、そばにいたじいに助けを求めた。

じい「あの一…」

ばっ！（土下座）

じい「すみません！！私の注意を無視して食べられましたので、私だけは助けてください！！！」

だが、無駄だった。

じいは命ごいをしたのだ。

ブラン「…いいだろう…ただし、後で私らにケーキ買ってきてもらうからな…」

じい「私が助かるのであれば何なりとー！！！」

ハタ「え…？」

望みは、たやすく絶たれたのだ。もう逃げられまい。

ノワール「さあて…覚悟はいいかしら…？」

ブラン「徹底的にぶちのめしてやる…！！」

ベール「保険には入られてますか？私達の前では、それが必要になりますわよ…」

ハタ「ひいひい…！！？」

ネプテューヌ「大事な勝負を邪魔されたんだもん…私、すつごく怒ったからね…！！」

ハタ「ままま、待て待て！わわ、悪かった！ビックリマンシール全部やるから助け…」

だっ！（突撃）

4女神「天誅！……！！！」

ずどがばぎどばぎしゅばぎずどがががががががが！！！！

ハタ「ぎゃああああああああああああああああ！！！！！！」

あわれ、いや…愚かなり…ハタ王子。

ギルシア「あーあ…」

ジャンヌ「勝手なことするから…」

レオン「しかも、かなりの怒りを買ったようだな…」

ラム「うわっ…お姉ちゃんったら変身しちゃったよ…」

ロム「がくがく…（震）」

ユニ「私のお姉ちゃんまで…あんな馬鹿相手に変身しないでいいのに…」

ネプギア「私のお姉ちゃんは変身しないけど、奥義連発しちゃってるよ…ベールさんは変身してスレッドスパ連発…」

ミリア「…まあ、ネプちゃん達には同情するよ…」

カイト「そうだな…」

結局、また決着がつかないまま終わってしまったネプテューヌ達。やる気を全てなくした女神達は、昼食の時にやけ食いをしたとか何とか。

まだまだ決着がつくことはないのかもしれない。

2話「仲よくケンカしな」(後書き)

勝負の邪魔をした者って、ほぼぶちのめされることがパターンなんだよ…きつとね。

3話「恐竜保護作戦」(前書き)

真王さんリクで、恐竜の話です。恐竜ネタははじめてです；

3話「恐竜保護作戦」

登校中のこと。

カイト「いやあ、この前のワリオマンとやらには困ったなあ」

ミリア「確かにまいつちやったね…でも、耐性ついたからもう大丈夫だよな」

カイト「そうだな。とりあえず、また来ても…」

「グルル…」

カイト・ミリア「？」

突然、学園入口からのどをならすような声が聞こえた。何なのか二人は見てみたら…いた。

カイト・ミリア「!!!？」

恐竜が。

カイト「な、何だこいつ!？何で恐竜がここに!？」

ミリア「しかも首長竜!？」

首長竜「グルルル…グオーン」

その恐竜は、学園を平然と歩き回っていた。カイト達から見ると、エサを探してるのだろうか。

カイト「…殺気はないみたいだが、どうなってんだ…？」

たつたつ…（来）

ギルシア「おい、どうしたんだお前ら？」

レーティア「何かあった…の……………」

……………。

ギルレー「えええええ……………！！！？？」

ギルシアとレーティアも、たまげてしまったようだ。

リル「あうー？」

レーティア「ど、どうして首長竜が…？しかもこの学園に…？」

カイト「俺達が来た時に、すでにいたつぽいんだ」

ギルシア「まじかよ……………」

ミリア「と、とにかく理事長に伝えなきゃ！」

……………

かくして、カイト達はこのことを理事長に伝えるのだった。

9：00

銀時「で、どうだったんだ？なんかわかったのか？」

カイト「ああ、あの恐竜は原始の森に住んでる奴らしくて、動物園に連れて来られたんだってさ」

神楽「動物園？どこのサファリパークアルネ？」

ミリア「それが、王魔時動物園って言ってたよ」

ネプギア「…あの動物園ですか…」

カイト「？知ってるのか、ネプギア？」

ネプギア「はい、バイトしたことあります…」

ネプギアは、その動物園でアルバイトをしていたらしいが、ちょっとわけありな顔をしている。

え？こつちじゃその話はない？気にしないでいい、問題ない。

マリオ「問題ありだ！」

ちなみに外を見ると、首長竜はネプテューヌやラム、ロムと遊んでいた。

ネプテューヌ「わぁーい！」

ラム「すつごく滑るうー！」

ロム「ふふふつ（ここにこ）」

首長竜も、嫌がるどころか懐いているようだ。

ベール「なんか、すつかり懐いてますわね…」

ジャンヌ「しかも楽しそう…」

ソラ「それで、どうするんだ？森に帰すのか？」

カイト「んー…まだ決めようがないんで、恐竜の心に語りかけてみようと思っ」

生徒達「??？」

……

休み時間

ミリア「じゃ、語りかけるよ」

全員集まったことを確認し、ミリアは首長竜に手をあてて目を閉じた。

生徒達全員は息を飲み、カイトはただじつと見守る。

しばらくして、ミリアは目を開けて手を離れた。

ミリア「終わったよ。ここにいる理由も教えてくれたよ」

カイト「それは？」

ミリア「この子や仲間のトレックス、トリケラ、ラプトル、ヴェロキラプトルは動物園で園長の世話を受けていたらしいの。ところが、犯罪組織らしき者達の襲撃を受けて、それで逃げてたらはぐれてしまったんだって……」

ユニ「迷子ってこと？」

ミリア「そうなるね……」

カイト「犯罪組織については、何か言ったか？」

ミリア「あまり情報はもらえなかったけど、目的だけははっきりしてた。犯罪組織が襲撃したのは、金目当てだよ」

アリス「何だと……！」

ネプギア「！（まさか、以前の悪い人達……？）」

カイト「そうか………まずいな……なら、事は一刻を争うぞ」

生徒達「？」

カイトは重く真剣な表情で話す。

カイト「金目当てということとは、恐竜や動物を売り飛ばすつもりなんだろうな。動物園がどうなってるのかわからないが、少なくとも追手を出してるはずだ。つまり……」

レオン「…恐竜を全て捕まえられる前に保護をしなければ、動物園の運営にも大打撃…そして、恐竜も無事では済まない…そういうこ

とか？」

カイト「ああ……」

話を聞き、全員は危機感を抱いた。

他の恐竜も保護しなければならぬ、その判断はすぐにされた。

ネプギア「大変……！なら、すぐに保護しに行かないと！」

マリオ「わかってる、手分けして恐竜を全匹保護するぞ！」

銀時「んじゃ、さつさと理事長に居場所を見つけてもらおうぜ」

カイト「俺達は動物園に向かう。動物園に何かあってもアウトだ！
行くぞミリア！」

ミリア「うんっ！」

ギルシア「俺達も行くぜ！」

レーティア「ええ！ジャンヌも来なさい！」

ジャンヌ「もちろん！」

かくして、カイト達による保護作戦が始まった。

……

生徒達の行動は順調に進み、トレックスも……

銀時「よし、見つけた！ロープと網をよこせ！俺がちゅっちゅと……

……」

神楽「ホオオオアアアああああっ……！！！！」

ずどがあっ……！！！！

トレックス「ギャオオオオ！！！！？」

カイト達は園長シナの元へ向った。
すると…

……

シナ「ちい…！」

シナは、緑髪のフード女に追いつめられていた。体力の限界がきてるのだろつ。

「へへ…園長さんよお、そろそろ限界みたいだな？死にたくなきゃ、動物と恐竜をよこしなよ」

シナ「ふんっ…お主らなんぞに渡しては、こっちがつまらぬわ！」

「そうかい……なら、死にな！！（カマを振り上げる）」

ぶんっ！

カイト「待てやあああああああああ！！！！！」

ずどごおおおっ！！！！（木刀命中）

「ぐばあああっ！！！！？」

フード女は不意打ちをモロにくらい、壁に張りつけられた。

カイト「園長シナっ、大丈夫か！？」

シナ「お…お主らは…？」

カイト「超次元学園の生徒だ！あと、ネプギアからも話は聞いている！」

ギルシア「よく持ちこたえてたな。だがもう大丈夫だ」

ジャンヌ「危なかったね…さて、あとは…」

壁から復帰したフード女に目を向ける。

「つてて…ごほっ、ごほっ…！やりやがったな…くそっ！」

カイト「犯罪組織の者だろ？よくもこんな騒動を起こしてくれたな。ただでは済まさねえぜ」

ミリア「貴方は何者？名を乗って！」

「ケツ…よく聞きやがれ！犯罪組織マジエコンのマジパネエ構成員、リンダ様だ…！」

……………。

カイト「…下っ端か」

ミリア「下っ端だね」

ギルシア「下っ端だな」

レーティア「下っ端ね」

ジャンヌ「下っ端じゃん」

下っ端「なっ…だ、誰が下っ端だあ…！なめてると…」

ばっ！ずどがあっ！！！！（木刀）

下っ端「ぐぼおっ！！！！？」

カイト「隙だけだ。どうやら口ほどにもないって言ってよさそうだな」

下っ端「げほっ…て、てめえ…！！人がしゃべってる時に…卑怯だぞ…！！」

カイト「知るかよ。言っとくが、恐竜はすでに保護した。さっさとここから手を引け」

カイトの不意打ちに、下っ端は焦りだしてきている。

さらに、作戦もつぶされていることを伝えられ、歯ぎしりもする。

下っ端「っ……くそっ……こんなはずじゃなかったのに……！覚えてやがれ……！」

しゅばっ！

下っ端はやむを得ず、逃げ出した。しかし……

ぴしゅーん！

ネプテューヌ「やつほ……い！」

下っ端の上空から、保護した恐竜達が落ちてきた。ワープしてきたのだ。

さらに、ネプテューヌとネプギアも乗ってきていた。

ひゅ……

下っ端「いつ!?!」

どしいい……ん……!!

下っ端「ぎいやああああああああ……?!?!」

で、落下して下っ端はプレスされた。

ネプギア「あれ？何か聞こえたような……」

ネプテューヌ「おい、カイト……ミリアー……！」

ミリア「ネプちゃん！来てくれたんだね！」
ネプテューヌ「恐竜はみんな無事に保護したよー！これでもう安心だね！」

こうして、恐竜は無事に返すことができ、さらに対策もつたれて解決したのであった。

シナ「お、お主…」

ネプギア「くすっ、これでお返ししましたよ、園長さん（笑顔）」
シナ「…ふっ、かたじけないのう」

ネプギアとシナも、安心して帰るようだ。

後に、恐竜達も再び動物園の生活に戻り、観客からも人気者になったという噂だ。

3話「恐竜保護作戦」(後書き)

あ……あの恐竜出してなかった。

………まあいいか、いつでも出せる奴だし。

4話「変態」(前書き)

カイトとミリアについて、題名の通りのことが明かされます。微裏あり

4話「変態」

更衣室で、こんなことがあったらしい。というか、公開2度目？

……

男性更衣室にて

この日、水泳があるのだが、この学園にもいるのだ。
変態が。

カイト「あれ？銀さん達、着替え早いんだな…もう出て行ったぞ」

エリオ「あー…それ、覗きをするためですよ」

カイト「え、覗きだと？…まさか、食べる気で…？」

桂「心配はいらん。奴らはそこまで野蠻ではない。それよりも、女子達が過激だ」

カイト「どういうことだ？」

土方「ま…どうせすぐわかるだろうさ」

カイト「…？」

カイトは真相が気になっているのだが、桂達の言葉を信じることにした。

マリオ「ところで、ミアはどうなんだ？」

カイト「何が？」

零斗「…変態なのかい？（ぼそっ）」

カイト「っ！！？」

カイトの顔に赤が宿った。蒸気が出そうなくらい。

零斗「おやあ？どうしたのかねカイト君w」

カイト「い、いいいきなり何を…！？／／／」

ソラ「いやなに、ミリアはお前の彼女なんだろう？お前らが入学してから、まだそんなに経ってないから知りたくてな。ミリアはどんな奴なんだろう…ってな」

カイト「なな、何でわかつたんだ！？」

カイル「何となくそんな気がしてた…という所だな」

桂「うむ」

零斗「ひゅーひゅー！いけない双子だな、このこのっ！」

カイト「ちよちよっ、からかうなよっ！」

ミリアのことをネタに、カイトはからかわれて赤くなっている。

零斗「で、どうなんだ？」

カイト「…えと、その…皆からしたら普通のいい性格だよ。あまり目立ちすぎる特徴とかもないんだし」

零斗「本当か？本当は銀時ラバーみたいに、かなりの変態じゃないのか？お前の下着とかを狙ったり、クンカクンカしたりしないのか！？」

セイタ「いやいや、それよりもカイトはやってるかもしれないけど、しかも淫乱だったりして！」

カイト「ちよっ、ミリアはそんなんじゃないやねえってーの…！！！」

零斗「くくく…真っ赤になっただけだぞ！」

桂「カイト、下手に隠すとかえって墓穴を掘るだけだぞ？」

カイト「うっ…！」

何とか反論しようと思えば、桂のその言葉にしづらくなる。

桂「…ま、愛し合っていることを堂々としてもよいのだがな」
カイト「…あんた、味方なのか敵なのかどっちなんだよ…」
桂「さあな」

そう返されたカイトは、どうやってこの話を変えようか考えた。これ以上いろいろ聞かれてはまずい。
と、その時…

ばんっ！（ドア開く）

咲夜「ユーくうくんっ、もう待ちきれないよお」

カイト「へっ!？」

ユーノ「うわっ!？」

男達「ちよっ!？」

なんと、咲夜が更衣室に突入してきた。
さらに…

アリス「いるんだろう、ソラ！」

ソラ「ぶっ!？」

アリスまで入って来た。

マリオ「おいまたか！」

桂「今さら言っても変わるまい。行って来い」

ユーノ「またそのパターン!？って、うわあああー!?!？」

咲夜「うふふ、ユーくうん」

アリス「ほら、早く行こうじゃいか！」

ソラ「お、おいおい！引っぱるなって!？」

シュタタタタ…

で、二人は連れて行かれた。

カイト「……………おい、いいのか…?」
スネーク「好きにさせとけ」

皆にとつてはいつものことだ。気にしても意味はあるまい。

セイタ「んで、どうなんだよカイト? ミリアとどんなことしてんだ? 言ってみ、言ってみ? お兄さんに言ってみ?」

カイト「あー…わかったよ…; つつても、大差ないと思うぞ? 一緒に修行したり、遊んだり、散歩したり…あとは…; ミリアにチカンしてあげたり」

他一同「チカン!!?!?」

チカン…その言葉が出た。

カイト以外の男達は、その言葉を疑わずにはいられない。

マリオ「お、おいおい…チカンって…?」

カイト「たまに、ミリアがいろんなシチュエーションや方法で誘惑してくるんだよ。それで、ちょっとチカンしたら喜ぶんだ。はじめは抵抗があつたけど、ミリアの恋人として生きていくうちに慣れちまったよ」

新八「ま、マジで…?」

エリオ「変わってる…って、言ってるいいの…」
ネス「ていうか、それチカンなの…?」

どうやら、カイトも変態なのだろうか?

そう予想する一同であった。

……

女子更衣室はというと…

ネプテューヌ「へえー…カイトって、すごくいい人なんだね」

ミリア「うん カイト君は優しいし、まっすぐだし、いつも前へ進もうと努力するし、思いやりもあって、考えも深いし…：ボク、もうカイト君の全てが大好きだよ」

ネプギア「そうなんですか。カイトさんとミリアさんの絆、うらやましいです」

はやて「せやなあ。双子とか関係なしに、ラブラブでいいことや」
ミリア「えへへ…」

こちらも、ミリアはカイトのことについて聞かれていた。

ミリアはカイトのように下手に隠さず、ありのままに話している。恋愛についてはカイトよりも積極的なため、ミリアは話しているうちに楽しそうになっているようだ。

カイトのことや、彼とのエピソードを聞いている女達は、ミリアが魅力的に見えていた。

ビビ「そっかあ…：悔しいけど、ミリアがそこまで深く語れるほど、カイトの器はでかいんだろうなあ。世の中にはいい男もいるってわけか…：・v・」

それは、自称淑女の百合ハーレムを目指すビビでさえも、認めるほどである。

ベール「それで、デートもされてるんでしょう？普段カイトから、

どんなことをされてるのか気になりますわ」

ミリア「普段されてることですか？んー…いろいろしてくれていますよ」

ネプテューヌ「じゃあ、とびっきりのことを上げてよ。これはすごく嬉しかったとか、されて一番嬉しいこととか！」

ミリア「とびっきり…そうだなあ。変わってるっていえば…」

ネプテューヌ・ビビ「いえば!？」

ミリア「…チカン…かな／／／」

一同「チカン!?!?!？」

こちらでも、チカンという言葉が出た。

当然、驚愕しないわけがない。

フエイト「え、あの…ち、チカンって…？」

ミリア「えへへ、たまにしてくれるんだ…ボクがしてほしくなった時に、カイト君がそっとしてくれて…／／／」

ネプギア「ぐ、具体的に何を…!？」

ミリア「チカンはチカンだよ…ボクのお尻とか、胸を触ってくれたり…たまに、そのまましてくれたり…もちろん、ちゃんとお返ししてあげたりもするよ。コスプレしたり、誘惑したり…／／／」

何故か、ミリアは頬を赤くしてるのに、うっとりとした微笑みで話している。

照れているのだろうか？

ネプテューヌ「み、ミリアって大胆なんだね…」

ネプギア「…あの、これって…」

ユニ「…変態だったのね…」

やはり、変態なのだろうか？こちらも、カイト同様の流れであった。

………
体育の水泳の後

カイトとミリアは、ベンチに座って話をしていた。

カイト「今日は絶好調だったじゃん。いいタイム出たんじゃないか？」

ミリア「うん、調子よかったよ。この調子を保っていききたいなあ」

水泳でも、ぬかりはない二人。

ミリア「あ、ところでカイト君。私達の関係についてなんだけど……」
カイト「ん？……ああ、こつちじゃもうばれちゃったよ。やっぱり隠せないなあ……」

ミリア「くすっ、別にいいんだよ。隠すより、ありのままにしていた方がいいよ？」

カイト「ありのまま……か。まあ、それがいいのかもな」

ミリア「だから、こつちはもう自分から語ったよ。いろんなことを……あと……このことも／＼」

ミリアは照れながら、両足をすりすりし出した。

カイトはその意味を、すぐに理解する。

カイト「はは……話しすぎだよ。ミリアったら、いけない娘だなあ」

そう言いながら、カイトはやった。

むに……（お尻触わる）

ミリア「ひゃんっ…v／／／」

チカンを。

ミリア「あ…くすぐったいよお……やんっv／／／」

カイト「どうする？このままするか？」

ミリア「んんっ…まだだめえ……放課後にしようよ…ね？／／／」
カイト「わかった…」

むにゅ、むに…

ミリア「あん…もっとお…v／／／」

……

この二人の様子を見て、皆は言う。

ビビ「うわあ…あんなにやらしい顔してる…」（ ） 「（ ）

銀時「…おい、あいつらって…」

スネーク「…第2のギルシアとレーティアってか？…」

ルイージ「…ねえ、若いから…上いくんじゃない？…」

ノワール「変態カップルがまた一組…；、」

もう変態としか言いようがないだろう。

何にしろ、カイトとミリアはラブラブであることが判明したのであった。

4話「変態」(後書き)

人はみな変態なのさ…

5話「宇宙へいざなう者」(前書き)

本家からのリク、UFOネタです。しかし、それらしくない話やス
ケールになってしまったという…。次は、ちゃんとできる。はず。

どうしてこうなった？

5話「宇宙へいざなう者」

入学してから、どれくらい経過したのだろうか？

カイトもミリアも、すっかり学園に慣れていて、今ではもう学園で楽しくやるのが日課になっていた。

そんなまたある日のこと。

……

寮にて

カイト「す…すげえ…！」

ミリア「うん…本当によくできてる…！」

ネプギア「えへへ…（笑）」

ネプテューヌ「でしょでしょ？ 私達、頑張って作ったんだよ」

今夜。

カイトとミリアは、ネプ姉妹が昨日完成したてでアップロードしたPVを見せてもらっている。

その出来は予想をはるかに超えるほどに素晴らしく、カイト達も見とれてしまっていた。

ミリア「しかも、再生数もコメントもいっぱいある…しかも批判なしで、まだまだ伸び続けているよ！」

カイト「納得の傑作だな。流石じゃん」

ネプテューヌ「ありがとう」

ネプギア「あ、ありがとうございます」

ネプテューヌは満面の笑顔、ネプギアは照れ顔でありがとうと言った。

カイト「いい物を見せてもらった。また新しいPVとかできたら、見に来るよ」

ネプテューヌ「うんっ 頑張っつて作るから、楽しみにしててね」

そんな会話の後、カイト達は「また明日」と言っつて部屋を出た。

ネプギア「よかつたあ…本当に頑張つた甲斐があつた」

ネプテューヌ「今度はどんなのにしようかなー？ネプギアは、何かやってみたいものとかある？」

ネプギア「んー…何がいいかなあ…」

今も楽しげに会話する姉妹。

そんな時だつた…

どおおおおん！！！！

ネプ姉妹「？」

ネプテューヌ「何の音…？」

ネプギア「外からしたよね？行つてみようよ！」

………

寮にいる生徒達のほぼ全員は、音をたどつて学園から離れた場所に行つてみた。すると、そこにはUFOが墜落していた。

セレナ「これは…UFO？」

銀時「なんか嫌な予感がするな……エイリアンとか出るんじゃない？
零斗「そんなお約束が来るかねえ。案外、バカ王子とかがいるんじ
やねえか？」

ギルシア「いや……もしかしたら、幼女かもしれねえぜ！」

新八「いや、それはないんじゃない？」

ラム「犬とか出ないかな！？犬惑星からやって来た、宇宙犬とか！」

ロム「私は、猫がいい……」

レーティア「人間って可能性もあるんじゃない？」

ガーシエ「ドラゴンかもしれんぞ……」

ジャンヌ「触手な奴かも」

ネス「案外カービィだったりして」

リユカ「キュウベエとか？」

新八「いやいや、ネタになってるよ!？」

銀時「…もしや、長門か!？」

新八「言うと思ったよ!!!この平団員!!!」

とかいろいろ言っていると、UFOから何者かが出て来た。

カイト「何か来るぞ!」

ミリア「あれは…?」

現れたのは、長い赤髪のツインテールで、スカートの短いメイド衣
装を着た少女だった。

銀時・近藤・ギルシア「ちよっ、メイド!!!???」

はやて「UFOからメイドさんやて!!!?どんな斬新なネタやねん
!？」

ステラ「予想すらできないでしょ!？」

ミリア「…?待って、様子がおかしいよ!」

何かに気付き、警戒をつながすミア。
そしてメイドは…

「…っ…っ…」

どきっ（倒れる）

スバル「あ、倒れちゃったよ!？」
ネプテューヌ「えと、大丈夫!？」

そこにネプテューヌが近付いて、メイドへ気遣う。しかし、今にも
気絶しそうだ。

カイト「まずは話をしなきゃ始まらない。誰か手当てしてやってくれ！」

コンパ「私がするです!」

コンパが名乗り出て、メイドの治療にあたった。
しばらく待つと、メイドは無事回復したようだ。

コンパ「はい、もう大丈夫ですよ」

「…あ、ありがとうございます…」

メイドは弱々しく礼を言った。

アイエフ「…さて…どうするの？話を聞くにしても、何を話すのかしら？」

カイト「まあその前に…ミア」
ミア「うん、わかった」

ミリアはメイドに近付き、じつとメイドの瞳を見た。メイドは、少しミリアに警戒か戸惑いどちらかわからないような表情をしている。

ミリア「……………うん、大丈夫だよ。殺気はないし、目論みの様子もないよ」

カイト「そつか、じゃあ普通に話せるな」

「…貴方達は、一体…?」

銀時「俺達は、超次元学園の生徒だ。いきなりUFOが墜落してきたんで、何なのか見にきたただけだ」

「超次元学園…??」

ネプギア「ん…やつぱり、わかりませんよね。とにかく、私達は敵じゃないですよ」

ネプテューヌ「だから、貴方も何者なのか話してくれるかな?もしかしたら、助けになれるかもしれないよ」

「……………信じて、よさそうですわね…」

メイドは深呼吸をして、カイト達にお辞儀をしながら話し始めた。

「私は宇宙からやって来たエネルギー生命体。名はアイリと申しますわ」

ミリア「アイリちゃん…だね?」

桂「宇宙からやって来たとな…?」

アイリ「はい。私は、とあるお方の召使いとして生み出されたエネルギー生命体で、様々な活動をしていますの」

カイト「具体的には?」

アイリ「全てお話することはできませんが、様々な惑星へ赴いてエネルギーとなる物の補充、または未知のエネルギーの採取が主ですわ」

マリオ「ふーん…」

アイリと名乗ったメイドは、どうやらエネルギー生命体…カイト達からすれば宇宙人であるらしい。活動を聞くあたり、極悪というわけではないようだ。

カイト「で、そのUFOは自分用ってわけか。けど、何で墜落したんだ？」

アイリ「それが…惑星へ降りる時に、何者かによる不意打ちを受けてしまい、この有様ですの…」

レオン「ふむ…そして、ここに墜落したということか」

アイリ「はい…ですから、一刻も早くUFOを修理して帰らなければいけません。もし、ご主人様に何かあったら…！」

アイリは不安な表情で言った。

話を聞く限りだと、カイト達と敵対はしないだろう。

カイト「……話はわかった。じゃあ早く帰りたいってことなら、修理を手伝うよ」

ネプテューヌ「うんっ、悪い人じゃないんだし、助けてもいいよね」
ミア「ボクも賛成」

銀時「おいおい、いいのかカイト？修理が終わった後に、裏切りとか襲撃ってパターンも考えられるぞ。よくあるだろ？」

カイト「確かに否定はできないけど、もしそうなら瞳から少しくらい殺意や目論みを感じれるはず。でもそれがなかったんだから、信じてみようや」

ネプギア「そうですね。カイトさん達がそう言うのなら…」

アイリ「……皆さん…」

アイリは少し啞然としながらカイト達を見ていたが、話がまとまった所で我に返り、嬉しそうに礼をした。

アイリ「…ありがとうございます。そこまで言うてくださるのでしたら、どうぞこのメイドのお手伝いをしてください」
ミリア「うんっ、任せて！」

これで、やるべきことは決まった。

銀時「はあ…やっぱりいつも通りか」
アイエフ「全く…まあいいわ。それで、私達は何をすればいいのかしら？」

アイリ「皆様には、UFOの部分の調達をお願いいたしますわ。詳しくは、UFOの欠陥部分を見せてからになりますけど」
なのは「じゃあ、私達がUFOの修理にあたるうか。こっちは専門もいるから、すぐに事を運べるかも」
ネプテューヌ「私達は調達だね？任されたー！」

……

フェイト「ところで、ビビは？」
はやて「部屋で寝込んでるみたいだよ。風邪引いちゃったのかもしれへん」
なのは「そっか。でも珍しいね？あんなに元気な娘なのに」
はやて「ま、大丈夫やる」

……

そんなこんなで、カイト達はUFO修理のために材料を調達するのであった。
いろいろ必要だったのだが、中でも…

銀時「だぁー！ー！ー！！いい加減、さっさとレアメタル出て来い

ああああ！！！！！」
ザック「いや、俺はただ鎮魂錠って奴を聞きに来ただけで……ぶは
あっ！！！！？」

これらの材料については、時間がかかったらしい。
というか、ヴェイグさんおっ！。

………

そして材料も揃い、何事も問題なく修理できた。
UFOはすっかり元通りだ。

はやて「ふうー。やっと終わったなあ」

アイリ「これでやっと帰ることが出来ますわ。皆様には何とお礼を
申せばいいのか……」

カイト「いいって。好きでやっただけなんだからさ。それより、主
人に連絡しときなよ」

アイリ「ええ、そうしますわ」

アイリはUFOのコンピュータを操作し、通信を試してみた。

アイリ「ご主人様、聞こえますか？アイリです」

繋がったのを確認し、アイリがしゃべる。
しかし、返答がない。

アイリ「……あら……？ご主人様？聞こえますか？」

『主人はもういない』

全員「!!!?」

突然、謎の声と共にモニターが映る。
黒い影が現れた。

『すでに私が滅ぼしたばかりでな…もはや、帰っても意味はない』
アイリ「なっ…!?!」

カイト「殺しただと!?!」

影は、アイリの主人はもういないこと、そして自分が殺したことを告げた。

アイリ「そんな…嘘ですわっ!!!ご主人様が死んだなんて…っ!」
『嘘ではない。奴は我々の邪魔をしたからな…徹底的に滅ぼしてやった。…話にならん強さだったがな。よほど、つまらんご主人だったな?』

アイリ「…そ、そんな……」

アイリはショックのあまり、膝をついて座りこんでしまった。

カイト「てめえ…!!」

ミア「何てことを…!!」

銀時「…てめえ、何者だ?」

『…デニー、とだけ言っておこう』

プツン!(モニター切)

全員「……………」

アイリ「……そんな……どうして……っ」

ミア「アイリちゃん……」

アイリ「……もう……おしまいですわ……私も、何もかも……っ！」

涙をぼろぼろ流しながら、悲嘆するアイリ。

ようやく帰れるようになったのに、アイリの主人がデニーと名乗った男に殺されてしまった。

悲嘆せずにはいられないだろう。

カイト「……デニー……許せねえ……！！」

ミア「うん……目的や理由はわからないけど、許しちゃいけないよ……！」

ベール「……それで、これからどうしましょう……？」

ネプギア「……アイリさん」

ネプギアが、アイリにそつと声をかけてあげた。

ネプギア「もし、行くあてがないのであれば、私達と一緒にいませんか？」

アイリ「……いいえ……無理ですわ……ひぐっ……私は、魔力に近いエネルギーで生み出された存在……エネルギーがなくなれば、私はこの世から消えてしまう……うっ……っ……もう、どうしようもありませんわ……っ」

絶望するアイリは、涙を止められない。

しかし、カイト達はアイリを見捨てはしない。

レーティア「……確かに、ご主人さんが殺されたことは、どうしようもないけど……生きることにはできるわ」

アイリ「…え…？」

レーティア「これから、ビビっていう娘のメイドになりなさい？あの子なら、貴方に必要なエネルギーを永続的に与えてくれるわ。ビビは特殊だからね」

ネプテューヌ「なるほど…よくわからないけど、助かるんだね？」

レーティア「ええ。後は…アイリ次第ね」

アイリ「……………」

その後、ミリアはアイリのそばに座ってこんな言葉をかけてあげた。

ミリア「アイリちゃんの心にできた傷は、ボク達が治してあげられるかはわからない…でも、絶対にアイリちゃんを見捨てないよ。

ご主人のことも、このままで終わらせはしない…だから、一緒に生きよう…ね？」

カイト「大丈夫、デニーとやらもたたきのめして、絶対土下座させる。アイリ…俺達はお前の味方になるぜ」

アイリ「…ミリアさん…カイトさん…っ」

アイリは、自分を気遣うカイト達を見て、別の意味をこめた涙を流しながらミリアの右肩に顔をやって泣くのだった。

カイト「……………デニー…絶対に見つけ出してやるからな…!!」

こうして、悲しみの時間を過ごしたアイリは、ビビを新しいご主人として暮らすことにした。

5話「宇宙へいざなう者」（後書き）

というわけで、オリジナル設定のアイリちゃん追加です。

ご主人は、百合好きのビビがピッタリかなと。

ちなみにアナザーですから、本家がどうするのかはお任せいたします。

もし使うのでしたら、エロティックな活躍と出番を期待してます（え）

6話「触手は消し飛ばす」(前書き)

本家からリク、触手エイリアンネタです。普通にバトルっぽい話です。

6話「触手は消し飛ばす」

またまたある日のこと。

……パターン化してます。

……

銀八「突然だが、理事長公認の特別テストを行う」

新八「いきなりだなおい！！！」

いきなりテストだそうだ。

銀八「新聞とか読んだ奴ならわかるだろうが、今日の7時に触手モンスター共がどっからか出て来たらしい」

ザック「つまり、そいつを退治しろと？」

銀八「その通り。だが、そいつは変態らしいから手強いぞ」

ノワール「…何？フラグとでも言いたいの？」

カイト「そんなにやばいのか？」

銀八「でかいつて聞いているからな。まあとにかく、そいつを退治し、かつ活躍した奴には理事長から報酬があるから頑張れよー」

というわけで、カイト達は触手モンスター退治をすることになった。

……

カイト「…とは言われたものの…」
ユニ「どこにいるのかわかんないわよ…」

しかし、居場所は聞かされてないので、どこにいるのかわからない。

ミリア「テストだから、自分で探せっていうことだろうね」

スネーク「けどよ、でかいんだろ？ならすぐに見つかるんじゃないかねえのか？」

マリオ「だと思っただがなあ…」

カイト「…まあ仕方ないか」

ネプテューヌ「む…こういう探索は面倒くさいなあ。どうせならパツていきなり現れれば、すっごく楽なのに」

ベール「わからなくはないですけど、テストなんですから文句は言えませんかよ？それに、そう簡単に出て来られたら苦労がないというか…」

しゅるしゅる……ばしっ！

ステラ「きゃあああっ！？」

全員「！？」

叫ぶステラの声を頼りに向くと…

女達「で、出たあああー！ー！！？」

ターゲットがいた。

特徴は赤色で、触手がたくさんあるのはもちろん、その内3本には牙がついてる口があった。

見れば、その3本が本体のようだ。

フウ「あわわわわ!?」

クツパ「ほ、本当に出て来やがったぞ!?」

ノワール「ちよつと、ネプテューヌが言ったこと実現したわよ!?」

ブラン「…フラグだった…」

ネプテューヌ「わ、私は悪くないよっ!」

カイト「言ってる場合かよ!!!大丈夫かステラー!!!?」

ステラは触手につかまってしまい、動けない。

ステラ「は、離してよー!嫌あ!」

ミリア「待ってて!今助けに行くから!!!」

だっ!(カイトとミリア突撃)

スネーク「急いで片付けるぞ!!! (グレネードランチャー)」

レーティア「ええ!」

ギルシア「いくぜええー!!!」

全員が攻撃開始しようとした時…

しゅるるるる、ばしっ!!!

ジャンヌ「きゃあっ!?!」

レーティア「やんっ!?!」

ノワール「きゃああっ!?!」

ユニ「お姉ちゃん!?!きゃあっ!?!」

アリス「なっ、うあっ!?!しまった!?!」

アリア「このっ…ひゃああっ!?!」

なんと、女の半分近くが触手につかまってしまった。

レオン「くそっ、やはりこの展開か！」

なのは「早く助けなきゃ！」

フェイト「うんっ！」

すぐに助けなければ、18禁まがいの展開になってしまう。

仲間のため、そして話や表現の都合のためにも全力で奮闘する。

ざしゅっ、ばしゅっ、ばばばばばば！！！

カイト「くそっ、こいつらいくら斬ってもすぐに再生しやがる！」

ミリア「長引かせてたら不利になってしまう！早く弱点をたたかなきゃ！」

銀時「つつても、どこにあるってんだよ！？」

フェイト「あの3本の頭はどうか？そこを攻撃していけば……！」

カイト「よし、考える時間もない！行くぞ……！」

特に奮闘してるカイト達は、頭らしき部分へ向かって斬りこんで行く。

その頃……

アリア「らめえっ……私を犯していいのはネプテューヌさんだけなの
おおっ！v」

ジャンヌ「んあっ……vいいっ、そこがいいのおおv」

レーティア「もう……よほど好きなのね……あんっv」

シャリアローゼ「あはあああああっv」

その他サキュバスなどの変態女

「ああん……v」

ギルシア・ザック・近藤・その他変態男

「ハアハアハア……w」

そして、大攻撃の準備またはチャージに入った。

カイト「よし、俺達はミリア達に触手が行かないように死守!!!あと、俺は奴の守りを少しでも崩しやすいように攻撃してみる!!!」
銀時「わかった、へますんなよ!!!」

カイトはエイリアンの頭へ突っこみ、残りのメンバーはミリア、なのは、ネプテューヌの死守にまわった。

ちなみに…

ヤルオ「ちょっ、僕は男なのにくそみそは嫌だおー!!! W W W」
こいつもつかまっていた。

ずばばばばばっ!!!!!

銀時「おらああああっ!!! (殺陣)」
ネプギア「ええいつ!!! (スラッシュウエーブ)」
フェイト「トライデントスマッシュャー!!!」
レオン・ガレーナ「でやあああああ!!! (突撃型の剣技)」
ヴィヴィオ「やああああっ!!! (無双乱舞)」

どばばばばばばばああああん!!!!!

激戦を背に、カイトは3頭の攻撃をかわし反撃ながら弱点を探す。

カイト「!そうかつ、こいつは………そこか!!!うりゃああああ

あっ！！！！（気功爆裂波）」

ずだだだだだあああん！！！！

エイリアン「ガアアアアア！！！！??」

カイトは3頭の根本を見抜き、そこに無数の気の斬撃をたたきこんだ。

すると、命中して剥げた部分から黒いオーブラしきものが見えた。

カイト「やっぱりだ！あのコアが再生能力の核だな！！」

カイトは急いでその場から離れ、ミリア達に大声で伝える。

カイト「3人共！！3頭の首根にコアがあつた！！！！首根を狙うんだ！！！！」

ミリア「首根だね！？了解っ！！」

なのは「よし…ミリア、ネプちゃん、いくよ！！」

ネプテューヌ「私の新技、どーんっっておみまいするよ！！」

3人の攻撃準備が終わり、勝負の決着に出た。

キュピン！！（カットイン・必殺の光）

なのは「フルバースト・ストライクスタああーズ！！！！！！」

ミリア「切りさけ風よっ、修羅強風波！！！！」（サイクロンに匹

敵する風の波動を撃つ槍技）」

ネプテューヌ「いっつけえっ！！ブレイドバスタあああー！！！！

！！！！（力をこめ、すさまじい闘気の剣風を、デイベインバスタ

「のごとく飛ばす一振りの技」

どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!!!!!!!!!

3人それぞれの技が炸裂。

とてつもなく強力な波動、かまいたち、そして剣風がエイリアンの首根へと飛んでいく。

そして……………クリーンヒットした。

ずどがあああああああああん!!!!!!!!!!!!!!

エイリアン「ギギヤアアアアアアアア……………!!!!!!」

コアは木っ端みじんになり、それによって触手が次々と朽ち果てていく。

やがて、エイリアンは完全に消滅した。

ネプギア「やった……………!!!!!!」

ネプテューヌ「わーい!ばっちり決まったよー!」

ミリア「ふう……………これでもう安心だね」

なのは「うん、皆も無事でよかった」

フェイト「3人共、すごくかつこよかったよ」

銀時「お手柄だな。カイトも、よくやりやがったじゃねえか」

カイト「へへ、ありがとう」

がしっ!(手をつかみ合う)

かくして、無事エイリアンは討伐されたのであった。
変態共をよそにして……

ジャンヌ「はああ…快・感…v」

レーティア「あーあ…もつと楽しみたかったのに…v」

シャリアローゼ「ほんと、ねえ…v」

ヤルオ「と、トラウマ…だお…ww」

………

あの後、エイリアンについての情報が入った。

あのエイリアンは、どうやらハタ王子がペットとしてドーンに作ってもらったものだったのだ。本来なら、かなり小さくして世話するつもりだったらしいのだが、ドーンからの注意をよく聞かずに与えてはいけないエサを与えたために、ハタ王子が不注意で逃がしてしまった後、巨大化してしまったらしい。

で……あとはもう想像できるであろう。

ハタ王子には、またもや厳罰がくだされたのは言うまでもない。内容は理事長に聞くといいだろう。

テストについては、真面目に戦っていたカイト達MVPメンバーと他多数が合格だそうだ。

ここで、アイリから一言。

アイリ「ペットの不始末は、時として大惨事につながります。皆様も、よく注意しましょう。では、「ごきげんよう」

6話「触手は消し飛ばす」(後書き)

バトルを書くのいつぶりかな？

今じゃすっかり、触手・イコール・ムフフ…なんだよね。

次のリク話は、ソラさんからのリクを書きます。

7話「食事の時間」(前書き)

鳴神ソラさんからのリクで、ほんの昼食の話です。特に、マリオについてネタがあります。

7話「食事の時間」

キーンコーンカーンコーン！

昼食の時間

生徒達は食堂に行き、昼食を取る。中には弁当を食べる者もいるため、ここも自由である。

カイトとミリアは、前の学園ではいつも二人だけで食事をしていたが、今はネプテューヌ達をはじめとする皆とも食事をするようになった。二人共、皆で食べるのはとても楽しくて、気がつけば本当に笑顔になることが多くなっていた。今日も、楽しい時間になるだろう。

……

カイト「もぐもぐ……うん、これもおいしいな！」

ミリア「ほんとだねっ。どれもこれも豪華料理みたいで、すごくおいしいよ」

ベール「ふふふ、二人共すっかり気に入ったみたいですね」

ネプテューヌ「よかったね二人共。これからも、ここで豪華料理をいっぱい食べられるよ」

カイト「ああ、ほんとに嬉しい限りだよ」

ネプギア「ふふふっ」

やはり今日も、カイト達は楽しそうに食事をしている。ちなみに、食べているメニューはとんかつ定食。

定食は日変わりで、種類もたくさんある。

ベール「それで、お二人にとってどんなメニューが一番なのかしら？」

カイト「どれもすごく美味しいからなあ…選びにくいけど、俺はやっぱサーロインステーキ定食が一番かな。デザートならバナナケーキ」

ミリア「ボクはクリームスパゲティだね。デザートの方はフルーツパフェ。特に、ここの特製パフェは一番気に入ってるよ。あの味が、とても癖になっちゃって」

ネプテューヌ「でしょでしょ？私もネプギアも、あのパフェが大好きだよ」

ネプギア「うんっ」

ベール「確かに、絶対になくはないメニューですわね。けど、ティラミスプリンも捨て難いですわよ」

ノワール「ああ、3日前にあった奴でしょ？あれも悪くないわね」

ユニ「うん、私も同意見ね」

ブラン「…オレンジパイも、イチ押し…」

ラム「あと、ストロベリージュースも」

ロム「こくこく…」

わいわいがやがやと話しながら、食べる一同。

そんな時だ。

「んぬぐおおおああああつ！！？」

カイト達「？」

謎の絶叫があがった方を見てみると、新八が顔を真っ青にして倒れ

ていた。
何事だろうか？

銀時「新八いいいいいい！！！！」

ザック「おいおいおい！？やっぱやべえじゃねえのかよ、この料理は！？」

ドーン「問題ないのである！まずいものほど、栄養もいいものである！」

ディケイト「…もはや料理の概念から離れてるな…」

カイト「何だ？ドーンの奴もいるが…」

ノワール「…またなのね…この学園に入ってからだけど、ああやってドーンが料理に開発した栄養剤や調味料を入れて、味見させてくるのよ…」

ミリア「え、そうなんだ…？」

ユニ「まず自分がしろって話よ…全く」

ドーン「さあ、遠慮はいらないのである！味見してみるといいのである！」

銀時「誰がなんの食つかあああああ！！！！」

レオン「そもそも、食べそうな外見ですらないと思うが…」

ドーンが味つけしたであろうコーンポタージュスープは、青色に変色していた。

おいしくなったとは、思い難いはずだ。近くにいる誰もが、青コーンポタージュから引いている中……

マリオ「どうした？いらなら俺にくれよ」

銀時・ザック・レオン

「マリオ！？」

ドーン「おお、ぜひ食べてほしいのである。あと、ライスもある
のである」

マリオ「おう、どうも」

なんと、マリオが味つけした2つの料理を受け取ったのだ。

銀時「よせマリオ！！死ぬぞ！！？」

レオン「考え直すのだ！！」

マリオ「？よくわかんねうけど、問題ないだろ？さてと…」

ザック「ああああああ！！？また犠牲者が…！」

3人の警告を聞かず、マリオは躊躇いなく青いライスと青いコーン
ポタージユを口にした。

すると…

ぱくっ

マリオ「んぐんぐ…少し苦味がある気がするけど、ちゃんと食べる

じゃん

レオン「何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！？」

信じられないことに、マリオは平気だった。けるっ、とした顔で料
理を食べていく。

銀時「おいマリオっ、マジで大丈夫なのか！？後から来るんじゃね
えのかよ！？」

マリオ「何言ってるんだ？普通に食べるぞ」

ザック「何…だと…？」

マリオ「んぐんぐ…それより、なんか力がみなぎってきたんだけど…どんな味つけしたんだろう？」

ラム「…へ、平気に食べてる…」

ロム「…」

カイト「マリオって…実はとんでもなくすごい奴なのか…？それとも、鈍感なだけ？」

スネーク「気にしない方がいいぞ。あいつはそういう奴らしい」

ミリア「そ、そうなんですか…」

マリオの胃袋はどうなっているのだろうか？それは謎でしかなかった。

とにかく、昼食もこんな感じで楽しい時間なのだ。

7話「食事の時間」(後書き)

このマリオは、テイルズオブエターニアのリッドみたいな気がしますね。

短いですが、これでよかったですでしょうか？

カイトとミリア紹介（前書き）

主人公とヒロインについて

カイトとミリア紹介

カイト・ネイラード 16歳

グラニデ生まれの少年で、自称不良。

熱血で表情豊かな性格で仲間思いであり、剣技を得意とする。他にも優れた洞察力と読心術を持ち、さまざまな人々の心理を読みとることができる。神や王などの身分も関係なく、いつも私語で話す。ただ、仲間を大切にしようとする気持ちは強いがゆえに、たまに深く考えてしまうことがある。

『力であって力じゃない』という能力があるためなのか、無双できるほどの実力を持つ。カイトとミリアは『心』が根本であると説明しているが、現在ではまだ謎が多い。ちなみに、ミリアとは双子で恋人同士。

ミリア・ネイラード 16歳

カイトと同じ生まれで、よく一緒にいる少女。

明るくて大胆だが心優しい性格で、槍の使い手。魔法も使える。また、カイトと同じく読心術も持ち合わせており、洞察力もかなりのもの。育ちによるものなのか、自分のことをボクと呼び、味方を呼び捨てしない。胸は中クラス。

カイトと同じ能力を持つらしいが、カイトと同じく詳しいことはまだ明らかにされていない。とはいえ、カイトと実力は互角のようだ。カイトとは双子で恋人同士。

むふふな話をする、たまにカイトとHする時があるが、その時は性格が一変して性欲が強すぎるDMとなる。その淫乱さはサキユバ

スの様らしいが、冷静さはいつでも戻すことができるようだ。かつて一度だけスケベな男達にレイプされそうになったことがあったが、男達がミアリアに触れた瞬間たちまち全身の骨が勝手に折れて動けなくなったらしい。後に、助けに来たカイトに木刀で滅多打ちにされて再起不能になったとか。(死んではいけない) 百合についても例外じゃないらしく、『ミアリアを抱くことができるのはカイトだけ』のようだ。

8話「模擬戦1(前)」(前書き)

今回はソラさんのリクからで、ソロ対リユウケンダー。
次にミリア対レーティアをやります。

8話「模擬戦1(前)」

キーンコーンカーンコーン!

昼休みの時間

この日、カイトとミリアは運動場に複数の仲間を呼び集めた。模擬戦をやるためで、多くの仲間達が集った。

ちなみに、この日からカイトは鉢巻をつけるようになった。わかりやすく言うと、RPGツクール2000のデフォキャラ・アレックスの黒髪バージョンのように。今後、顔とかをイメージするならば、黒髪アレックスでイメージするといいかもしれない(何の話だ)さて、そろそろ模擬戦を見るところでしょう。

.....

1回戦

ソロVSリュウケンドー

ソロ「せっかくの機会だ。全力でいくぜ?」
リュウケンドー「手加減はなしだ!」

のら猫『戦闘開始iiiiiiii!!--!』

ソロ・リュウケンドー「変身!--!!--!」

ぴかぁーん!!

ソロ・リュウケンダー「いくぜ!!」

……

レオン「早速変身か」

ガレーナ「さて、どんな姿を見れるかな?じっくり見るとしよう」
カイト「変身能力か……」

……

(ここからは実況も入ります)

現在、ソロはライダーゼロイドに、リュウケンダーはゴッドリュウケンダーに変身し、互いに剣をもってぶつかり合っている。

ガンツギンツガツ!!

ソロ「ちい…前よりも動きが速くなってやがるな……!!」

リュウケンダー「おらおらぁぁぁっ!!」

ソロ「だが!!」

がきいん!!(弾く)

ソロ「こつちも負けてねえぜ!!!!」

ずがぁぁぁっ!!!!(薙ぎ)

リュウケンドー「ぐっ!!」

のら猫『ソロが落ち着いて先制を取ったああ!そのままリュウケンドーへ連続攻撃を仕掛けていくうう!!』

リュウケンドー「負けるかっ!!」

がきいんっ!!(出だしを相殺)

ソロ「止めたか…!」

リュウケンドー「俺も伊達に戦ってきたわけじゃないぞ…!!」

ぶんっ、ずがああっ!!(剣を投げる)

ソロ「ぐはっ!!?な、何を…」

ずだああ!!(後ろから戻る)

ソロ「いてっ!!」

のら猫『これはああっ!!?リュウケンドー、まさかのリベンジレイド!!剣を投げ、2連撃を当てたああっ!!』

リュウケンドー「まだまだ!!ソニックレイヴ!!」

ずだだだだだ!!

ソロ「ぐおおおっ!!」

のら猫『さらに連続ダッシュ突きだああ!!これは効いてるぞおおっ!!』

ソロ「くそおおっ!!!」

ギンツガンツガンツガッ!!!

.....

レオン「負けじと相殺するか。互角だな」

ガレーナ「どちらにも引かずに攻撃…うむ、悪くない」

マリオ「あいつら、ほんとよくやるよなあ」

ルイージ「あ、二人同時に後ずさったよ!」

.....

ずきゅきゅきゅー!!!

ソロ「やるな…っ!」

リュウケンドー「そっちこそ…!」

ソロ「そろそろ本気でいこうか!」

リュウケンドー「望むところだ!」

ソロ・リュウケンドー「変身!!!」

キュピーン!!

リュウケンドー「インペリアル・リュウケンドー!!!」

ソロ「ライダーゼロ・ウルトラフォーム!!!」

ソロ・リュウケンドー「勝負!!!」

.....

ガレーナ「互いの全力がぶつかり合ったのだ。当然のこと」
ネプギア「勝敗は!？」
ミリア「…!見えた!」

……

爆風がおさまり、そこにあっただのは……

ソロ「うげあゝ……(ピヨリ)」
リュウケンドー「ふああゝ……(ピヨリ)」

ピヨってる二人だった。

のら猫『勝負引き分けええええ!!!!!!』

……

カイト「引き分けだったか…でも、どっちもすごかったな」
マリオ「ああ、後でキノコ奢ってやるか」
ミリア「変身…か」
シグナム「…さて、次に行こうか」
シャマル「じゃ、治療しに行つて来るわね」

……

2回戦

ミリアVSレーティア

レーティア「さてと…貴方の戦いぶり、じっくり見せてもらおうかしら」

ミア「レーティアさん、よろしくお願いします！」

……

ギルシア「レーティアは強いぜ？あの少女に倒せるかな？」

カイト「ミアは、今までずっと一緒に戦ってきたパートナー。きっと勝ってくれるさ」

ビビ「ミアちゃん頑張ってる！」

……

構えるミアとレーティア。

レーティア「ファスシニムとハートローズ、どちらが好みになるか…大丈夫、たっぷりサービスして、あ・げ・る」

ミア「ボクも是非知りたいですね。ならボクは…」

ひゅんひゅん…ぱっ！（構え）

ミア「この木槍で…全力でいきます！」

レーティア「うふふ、燃やしちゃったらごめんなさいね」

ミア「大丈夫です、これを燃やすことはできませんから！」

のら猫『いくぜ！！戦闘開始iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！』

だっ！！！（ミア突撃）

ずだったのに…!)

ミリア「逃がさない!!! (瞬連刃、風牙突)」

どばばばばっ!…!」

レーティア「ぐうううっ、ああっ! (逃げられない…カウンターもできない…!!)」

ミリア「流星竜撃!! (気の槍を左手に作る)」

ずがあっ!…! (ぶん投げ)

レーティア「きゃあっ!…!」

ひゅうんっ、どがあああああん!…!」

のら猫『おおおおっ!…!? 気の槍をレーティアにぶつけ、そのまま地面へ落下!! そして爆発したあああああっ!…!』

……

銀時・桂「!？」

レオン「カウンターをさらに返しただと…?」

ジャンヌ「う、嘘…!？」

ギルシア「へえ…? ちょっとびっくりしたぜ。まさか、接近戦でレーティアが不利だとはな…」
カイト「……」

……

すたっ! (着地)

ミリア「……（構え）」

ひどくダメージを受けたようだが、何とか立ち上がるレーティア。

レーティア「……ちょっと油断したわね……やるじゃない?」

ミリア「……まだ、本気を出してはいませんか?ボクにはわかります。こんなものじゃない……」

レーティア「くすっ、真面目な子ね……ええ、これなら遠慮はいらないみたいね!」

ばっ!（ハートローズ装備）

レーティア「次はどうかしら?ハートローズ、セットアップ!」

キュピイーン!!

……

ビビ「キターーーーー!!!」（鼻血）

ギルシア「さあ、ミリアは勝てるかな?」

カイト「……（頼むぜ、ミリア……!）」

……

ミリア「それが……ハートローズの姿……!」

レーティア「さあ、いくわよ!」

ずだだだだだだだだ!!!（銃連射）

のら猫『出たああああ！！！レーティアのハートローズが火を吹くうううう！！！！ミリア、全速力でよけて突撃いくうううう！！！！』

ミリア（スピードが速くなった…！そして、この弾幕攻撃…！！）

ミリアは銃弾の雨をよけながら、レーティアのまわりを回りながら近付こうとする。下手に攻撃せず、隙をうかがうように。しばらくそうしていると、一旦攻撃が止んだ。ミリアはその直後に突撃。

レーティア「んもっ…ミリアちゃんも、おませちゃんね」

ミリア「風牙突…！！」

ぶううんっ！！！！（かわす）

レーティア「今度は見切ったわよ！！」

ミリア「と、思う…!?」

ずぞぞっ！！！！（急ブレーキして返り風牙突）

ずがああっ！！！！（右胸の下あたりが破ける）

レーティア「やんっ!?!」

ミリア「そこっ！！！！（火炎槍）」

ごおおおおっ！！！！（炎の円閃牙）

レーティア「危ない危ない…！！（バックステップ後、胸から弾丸をリロード）」

のら猫『ミリア、全速力で走るもよけきれなああい！！！このま
までは体力を削られる一方だぞおお！！！』

ミリア「くっ…受けてたらずい…！！」（180度反対の方へワン
ステップ）

レーティア「…見えた！もらっわよ…！」

ビシュンッ、ズダッ！！（ピンクの閃光の弾が命中）

ミリア「きゃあっ！！？（しまった…動きを読まれた！？）

レーティア「サービスよ、受け取りなさい！（さらに2発）

ズダダッ！！！（命中）

ミリア「きゃううっ！！？」

レーティア「フィニッシュ・相愛の十字砲…！」

ずがががあああああああん！！！！（爆発と同時、ピンクの
十字が三重で具現）

ミリア「きゃあああああーっ！！！！！」

のら猫『決まったあああああああ！！！！！ハートローズの象
徴が、ミリアに炸裂っうううう！！！！！！』

………

カイト「ミリアああっ！！！！！」

ギルシア「ひゅっ！クリーンヒット！こりゃ勝ったな」

ネプギア「よけられなかった…！」

ネプテューヌ「…ん？あれ…！？」

……

レーティア「いかがだったかしら？私の…愛の舞は…」

爆風が止んでいき、ミアの姿が見えた。

レーティア「…あら…？」

ミア「っ…まだ、やれる…！」

なんと、ミアは大ダメージを受け、姿もあられないようになってきているのに、立ち上がったのだ。

のら猫「なんとおおおー！ー！ー！？まだミアはやられていなかったああー！ー！ー！ー！ー！」

レーティア「…嘘…貴方…？」

ミア「あきらめない…絶対につ…！！！」

槍を回しながら、全速力でレーティアへ突撃するミア。

レーティア「ま…まずい！？切り札なしじゃ、あの子を止められない…！！！」

ミア「修羅風神破ああっ…！！！！！」

強大な風をまとい、牙となりてレーティアへダツシュ突きをはなつた。

その速さと風牙の大きさは別格で、逃げようがない。

レーティア「ごめんなさいね、ミリアちゃん！（ある弾をリロード）
」
ミリア「やあああああああああああつ！……！……！」
レーティア「ローズストリーム！……！」

ずどおおおおおん！……！……！（ピンクで宇宙戦艦ヤマト並の
波動砲）

……

カイト「……！」
ギルシア「どうなった！？」
ガレーナ「ミリアは波動に飲まれたようだが……！？」

……

レーティア「はあ……はあ……」

急ぎで撃つたため、息遣いが荒いレーティア。
その目前には、波動に流されはしなかったものの、体力とダメージ
の限界がきたために倒れたミリアの姿があった。

のら猫『し、勝負ありいいいいいい！……！』

レーティアの勝ちだ。

たつたつたつ！

カイト「ミリアあ……！」
ギルシア「大丈夫かレーティアあ……！」

勝負がついたことを確信し、恋人の元へかけつけたカイトとギルシア。

すぐにカイトは、治癒功でミリアを回復して意識を取り戻させた。

ミリア「……あ……カイト君……」

カイト「ミリア……」

ミリア「えへへ……ごめんね、負けちゃった……」

カイト「……いいって、気にすんな。いい戦いぶりだったぜ、よく頑張ったよ」

そう言いながら、カイトはミリアを抱き起こしてあげた。

ミリア「ありがとう、カイト君……そう言ってくれて嬉しい……ボク、また頑張るよ」

カイト「ミリア……」

そして、二人は微笑み合うのだった。

レーティアはというと……

レーティア「ギルシアあゝ！私い、怖かったあゝ！」

甘えた声で、ギルシアに抱き着いていた。

ギルシア「よしよし、もう大丈夫だからな。後でいっぱい慰めてやるから」

レーティア「嬉しい……ギルシア……」

ギルシア「レーティア……」

こちらはこちらで、愛モードに突入していた。

銀時「うがああああああ！！！！お前ら4人共爆発しろおおお
おーーーー！！！！！！」

ルイージ「やっぱりカイト君とミアちゃん、レーティアさんとギ
ルシアさんの後輩にぴったりなんじゃ……」

模擬戦は、後編へ続く！

8話「模擬戦1(前)」「(後書き)」

ミリアとレーティアがメインすぎたかも；

後編では、カイト対レオンをやる予定です。

8話「模擬戦1(後)」(前書き)

ノワールVS冥王
カイトVSレオン

以上をやります。

8話「模擬戦1（後）」

前回の結果

ソロ対リュウケンドー

（引き分け）

ミリア対レーティア

（勝者レーティア）

……

3回戦

ノワールVS冥王

冥王「私の実力、目に焼きつけるがいいなの！」

ノワール「好きに言っただけ？私とその自信をくじいてあげる」

……

ネプギア「冥王ちゃんが相手みたいだけど、どうなるかな？」

ユニ「ふんっ、お姉ちゃんが勝つに決まってるわ！」

ベール「ええ、ここで負けるようじゃ女神の名が廃るといふものですわ」

ブラン「……ライバルとして張り合うんだから、勝って当然……」

ネプテューヌ「ノワール頑張っ……あと、ポロリ期待してるよー」

」

.....

ノワール「みつ、見せないわよっ!」

のら猫『戦闘開始いいいいいいいい!!!!!!!!』

冥王「いくなのっ!! アクセルシュート!!!!」

どばばばば!!!! (魔力弾)

ノワール「その攻撃はすでに把握してるわ。追尾能力のある魔力弾でしょ?」

冥王「逃げられはしないの!」

ノワール「ふうん? だったら...」

ずばばばばばっ!!!

のら猫『おおーっ!!?! 魔力弾を全て斬り捨てたあああああ
っ!!!!!!』

ノワール「こうするまでよ(カリバーン装備)」

冥王「まだまだこれからなのっ!!」

ノワール「悪いけど、すぐに終わらせてあげるわ!(突撃)」

のら猫『ノワールが勇ましく突っこんで行く!! 短期で決着をつける気だあああっ!!!!!!』

冥王「だったらこれはどうなの!!!!!!」

ずがががががががががががががががが！！！！（マシンガンのごとく連射）

ノワール「ふふん、まだ甘いわよ！（斬って相殺しながら突っこむ）

「

冥王「っ！」

ノワール「今度はこっちの番よ！そらそらそら！！！」

しゅばばばばばばばがががががが！！！！（攻防）

のら猫「これは激しいiiiiiiii！！！！ノワールがどんどん攻めるううう！！！！」

冥王「くっ…調子に乗るな、なのっ！！！」

ばしっ！！！！

ノワール「！！！」

なんと、冥王がノワールにバインドをかけ、身動きできないようにした。

冥王「これで、ジ・エンドなの！」

のら猫「これはああああ！！！！冥王の定番が来るかああああ！！！！？」

ノワール（この後に来る攻撃といえば…あれしかない！）

バインドをかけられ、動きを止められているノワールだが、何やら

冷静だ。

冥王「冥王の力、受けるがいいなのっ！ディバイン……」
ノワール（……まだよ。まだ……）

冥王「バズーカあああああああ！……！」
ノワール（今っ……！）

どおおおおおー……ん……！！！！

……

カイト「ん！？」

ミリア「あれ、ノワールちゃん……！？」

ベール「……フラグ、ですわね」

……

ディバインバズーカは、ノワールをあっという間に飲みこんだ。しかし、ノワールは微動もしなかった。

冥王「ふう、勝ったなの」

「……私がね」

冥王「え……？」

ずだあああああん……！！！！

冥王「きゃっ……！？」

それは一瞬のことだった。

波動は何かに真っ二つに裂かれ、しかもその何かは冥王に直撃した。

冥王は逃げることもよけることもできず、ダメージによってひどく重く感じる体で斬撃を受けるしかなかった。

ブラックハート「これが、ハードの剣よ!!!」

ざしゅ、ずばあああああつ!!! (斬り上げ)

冥王「きゃああああああつ!!!」

のら猫「決まったあああああああ!!!」

どざっ (落下)

ブラックハート「はい、終わりね」

ブラックハートは、倒れている冥王を背にして勝利したと確信した。
すると...

冥王「……ま……まだ負けてないの!!!」

ブラックハート「あら？立てたのね」

ふらふらと立ち上がる冥王を見て、ほんの少しびっくりするブラックハート。

冥王「私を怒らせたなの……!!!全力全開で、そのキレイな顔をぶつとばしてやるなの!!!冥王をなめるなの!!!」

冥王は魔力をチャージし、フルパワーで波動を撃とうとする。プライドが強いのだろうか。

ブラックハート「あら、それは嫌だわ。……でも、忘れ物があるのよねー」

冥王「そんなの関係ないのー!!」

ブラックハート「それが……関係あるのよ」

パチン、と指を鳴らした。

スバツ!! (斬)

冥王「!?!」

ズバババババババツ!!!

すると、どういふことなのか無数の見えない斬撃が発生した。それは冥王の攻撃を阻止し、冥王にとどめのダメージを与えた。

冥王「きゃあああああああ!!?!」

ブラックハート「これが、インフィニットスラッシュよ。堪能したかしら?」

どさっ (倒れた)

のら猫『勝負ありいいいい!!!!』

結果、ノワールの勝利は絶対のものとなった。

ブラックハートは元の姿に戻り、自信ありげに冥王に言う。

ノワール「侮ったわね冥王ちゃん。昔から最強みただけど、時代は進化してるのよ。もちろん私もまだまだ、こ・れ・か・ら (笑顔)

……

ミリア「す、すごい……！」

ベール「ふふ、そうではなくては面白くありませんわ」

ユニ「ま、当然よね」

ネプテューヌ「さっすがノワールー！かっこいいーっ！あと、ナイ
スパンチラー！」

ネプギア「…え？」

……

ノワール「くすっ、これくらい当然………え？パンチラ??何言っ
て……」

ふと言葉につられて、下半身を見てみると……

ノワール「……っ！……!!??ちちよ、きやあああっ！……？」

スカートがひどく破けていた。当然、下着も見えているので、慌て
てしゃがんで隠そうとする。しかし、それでもギリギリにしかなら
ない。

……

カイト「………。(目をそらす)」

ミリア「あちゃあ…さっきの波動で破けちゃったんだね…。」

ビビ「ナイスパンチラ…(*、*、*）」

ユニ「あーあ…。」

変態男達「ハアハアハア…w」

アイリ「……皆様、鼻血の出すぎで倒れますわよ？（ジト目）」
ネプテューヌ「大丈夫ー！これでノワールの人気も上がるよー！」

……

ノワール「こんなんで人気者になりたくないわよっ！もう嫌あああー！ー！！」（涙目）」

どんまい、ノワール……

……

4 戦目

カイトVSレオン

今度は、カイトが今日一番にやりたがっていた模擬戦だ。レオンは学園屈指の強者で、カイトはその強者と戦って力をつけようと考えたのだ。

レオンも、その意思を聞いて喜んで受けてくれた。

レオン「いよいよ出番だな……」

カイト「……」

レオン「緊張してるな？」

カイト「……お見通し、か」

レオン「顔にもそう書いてあるぞ。そんな様子で、私に勝てるつもりか？」

カイト「……勝ち負けは気にする所じゃないさ」

落ち着くように言うカイト。

レオン「…妙なことを言うものだな？勝つことが、1つの目標とも言えるのだぞ。あきらめているのか？」

カイト「いや、あきらめてない」

レオン「なら何だ？」

その答えとして、カイトは構えた。

カイト「誰であろうと本気でやる…それだけだよ」

レオン「……そうか」

対して、レオンも構えた。

……

ガレーナ「それにしても、カイトも思いきった奴だな。レオンとタイマンでやり合うなど」

シグナム「ふむ…若いから、か？」

ギルシア「かもな。挑戦したいお年頃か」

レーティア「ふふっ」

ミリア「カイト君…頑張って…」

……

のら猫『戦闘開始いいいいー！！！！！』

ばっ！

がんっぎんっがんっがんっ！！！がががががががが！！！

始まると同時、カイトとレオンが剣劇を繰り広げる。
見る人からだと、カイトがレオンへほとんど攻撃していき、レオンがうまくかわし続けては反撃するという感じに見える。

カイト「そこか!! (至近距離から魔神剣)」

レオン「甘い! (カウンター)」

きいいいん!!! (ガード)

カイト「くっ!! (攻撃が止まる)」

レオン「はあああっ!!! (無影衝)」

ずががががっ!!! (多段命中)

カイト「がっ!!!？」

レオン「まだまだ攻撃も守りもぬるいな! 獅子戦吼!!」

どおおおん!!!

カイト「ぐあああっ!!! (ふつとぶ)」

ずぞぞぞびびー!!! (後ずさりながら立て直す)

カイト「くっ…強い…!!」

レオン「そんなものか? それで私とやり合うとは…物足りないぞ!!」

今度はレオンが突撃して来る。すぐにまた剣劇になるだろう。

カイト（まだ本気になってない…なのにあの強さ、やっぱりただ者じゃない…！）

がががががががが！！！！（剣劇）

レオン「どうしたカイトお！！！！そんなものかあああつ！！！！（攻撃）」

カイト（守り）「ちいっ…！！（こんな奴は久しぶりだ…あのバウンサーよりも強い。ただ攻撃するだけじゃ、すぐにやられる…！！）」

がきいいん！！！！

剣撃の衝撃で、カイトが後ずさった。レオンはもらったと言わんばかりに、大技を繰り出す。

レオン「弱者と長く戦うつもりはない！これで頭を冷やすのだな！」

剣に冷気を宿し、全長50mほどの大きな氷の刃を作り出した。

カイト「！（力のチャージも早い…！！）」

レオンの実力は予想以上。今のままじゃ、勝ち目はない。

カイト（…仕方ない、どれくらい持つか…耐えられるか、博打に出るしかない…！！！！）

レオン「奥義つ、絶氷巨人斬…！！！！」

ずがしゃああああああん！！！！！！（振り降ろす）

カイト「ぐわああああああつ！！！！！！」

……

ミリア「!?!?カイト君!?!」

ガレーナ「直撃か…終わったな」

ギルシア「まあ、相手が悪すぎたんだ。仕方ないさ」

ネプテューヌ「ううん…違うと思うよ」

レーティア「？」

ネプテューヌ「まだカイトは負けてない…そんな気がするよ」

……

レオン「……まあ、壁を知れてよかったな。強くなったら、またいつでも……ん?」

ぐらっ…(立ち上がる)

カイト「……ぐっ…まだ、いけるな…!」

レオン「何…だと?」

カイトが再び立ち上がり、構えてレオンを睨む。まだ戦えるようだ。

カイト「レオン…俺はまだやれる…!!まだ戦うぞっ…!」

レオン「…ふっ、体力はあるようだな。間違いなく雑魚ではないと言おうか。だが、容赦はしない!!!(突撃)」

カイト「うおおおおっ!!!(攻撃)」

ががががががががががががっ!!!(剣劇)

レオン(こいつ…少し強くなったか…?力が上がっているような気

がするな…だが！

きいいんっ！！（カイトが弾かれる）

カイト「うあっ！？」

レオン「天地属性乱舞！！！」

レオンは闘気とオーラを7割展開し、属性技をたたきこむ。

レオン「紅蓮！！！！烈風！！！！地裂！！！！氷牙！！！！閃光！！！！暗黒！！！！」

炎の薙ぎ、風の斬り上げ、地のメテオ攻撃、氷の斬り、光の払い、闇の突きが、全てカイトにクリーンヒットする。そして…

レオン「これで終わりだ！！！！神雷斬！！！！！！」

ずぎゃああああああああん！！！！！！（神の雷をまとうジャンプ斬り）

カイト「ぐあああああああー！！！！！！！！」

……

レーティア「また直撃…しかもクリティカル…」
ガレーナ「連続で奥義をまともに受けては…な」

ミリア「…！（これは…まさか…？）」

……

レオン「この技は本気の時に使うつもりだったが、少し熱くなつてしまつてな……これなら、無事では……」

ざすっ！（剣を大地に刺す）

カイト「……はあ……はあ……ぐっ……まだ、だ……！！」

レオン「なっ！？」

なんと、カイトがまた立ち上がったのだ。すでに体力もわずかしかないのに、まだ戦おうとしている。

……

ギルシア・ユニ「はああっ！！？」

ノワール「まだ立ち上がったの！？」

ネプテューヌ「やっぱり……！カイトはただ者じゃない、絶対にそうだよっ！」

ネプギア「でも、このままじゃ……」

……

レオン「馬鹿な……まだ倒れないだと！？」

カイト「……言つただろ……本気で、戦うつて……！俺は……諦めが悪いからさ……最後の最後まで……やらなきゃ、気が済まないんだ……！」

不屈で立ち上がるカイトに、レオンは驚きと呆れが混じつた表情で言う。

レオン「愚かな……まだわからないのか！？すでに実力はの差は一目瞭然、勝ちも見えたのにまだやるといふのか！？」

カイト「…そりゃ、実力もはつきり…わかってるさ……」
レオン「なら、いい加減あきらめて眠れ!!!」

全速力でとどめをさしに行くレオン。カイトは、それでもまっすぐにレオンを見る。

レオン「抜刀・獣破斬!!!」

カイト「…でもな……」

がきいん!!! (弾く)

レオン「なっ!?!」

カイト「全力で戦うことぐらい…できるだろうがっ!!!」

ずどがああっ!!! (ぶん殴る)

レオン「ぶほっ!?!? (ふつとぶ)」

ずどぞむむむーっ!!! (後ずさる)

レオン「ぐっ…何だ…見うなかつ…!?!?」

言葉の終わりを言わせる前に、カイトが全速力で近付いてレオンに必殺技をはなった。

カイト「でりああああああああああっ!!!…!?!」

ずどがあああっ!!! (薙ぎ)

レオン「がっ…!?!?!?」

ざしゅっ！！！ばぎいっ！！！どしゅっ！！！ずどおおお！
！！ずばあああっ！！！！！

薙ぎから払い、振り上げ、振り降ろし、横払い、振り上げと、全力
で一撃一撃をレオンに重くたたこみ……

ずどばあああああっ！！！！！

レオン「ぐおおおおあああっ！！！！？？」

カイト「魔王七連衝……っ！！！！！」

ひゅううー、どがあああああん！！！！！

とどめの大振りの斬撃で、レオンを思いっきりふつとばし、壁に張
りつけた。

レオン「がっ……はあ……っ！！私と、したことが……」

どさっ（倒）

のら猫『勝負ありいいいい……！！……！！……！！』

カイト「はあ……はあ……ぐっ！……よく、耐れられたよな……俺……」

くたっ（力が抜けて倒れる）

たっ たっ たっ！

ミア「カイトくうー……んっ！……！」

そこに、ミリアが駆け付けてきて、カイトの回復にあたるのだった。

.....

ガレーナ「れ、レオンが……敗れただと……!?!」

ユニ「嘘……!?!」

ギルシア「まじ、かよ……?」

ネプテューヌ「やったー!カイトが勝ったー!」

ネプギア「すごい……カイトさん、すごいです!」

銀時「カイトが勝ちやがった……?でも、どうなってんだこりゃ……」

桂「……肉を斬らせて骨を断つ……それで勝ったというのか」

ソロ「?どういうことだ?」

桂「あの実戦的戦法、どこかで聞いたことがある。あえて攻撃を受けて痛みを溜めることで能力を高め、そして相手に攻撃を当てて倒す。痛撃剣という剣技だったか……」

銀時「じゃああれか?レオンの攻撃をあえてくらって、倍返して反撃したつてののか?」

桂「間違いあるまい。さらに、カイトやミリアには心の力なる素質があるというに聞いている。カイトの場合、痛みだけでなく闘気も高めたのではなからうか」

銀時「……妙な力だなあおい」

桂「カイト達には謎が多い……我々とは違う所を見ている上、何かはまだあるのだからな」

かくして、カイト達や観客達はそれぞれの感想を持ち、模擬戦は終わったのだった。

戦いに終わりはない。

8話「模擬戦1（後）」（後書き）

カイトはレオン達よりも実力は平均的に下、されど絶対に勝てないわけじゃない。

そんな感じに書いてしまいました。

もちろん、これで終わりはしないでしょう。

9 話「ホラーケーキ騒動」(前書き)

本家からリク、サチコ達のホラーネタです。またやらかしました。

9話「ホラーケーキ騒動」

時刻はすでに22:00。

もうすぐ寝る時間だ。

普通ならば休まる時間になることが多いが、時として恐怖の時間にもなりえる時がある。

そう、ホラーもその1つだ。

で、今夜はそのホラーが待っているのだった……。

……

銀時の部屋にて

銀時「……………ZZZ」

ぐぐっ……

銀時「ん……………うーん……………重てえ……………」

寝ている銀時に、重みか加わった。

銀時「……………ん……………何だぁ……………？寝かせるよ……………」

そう言いながら、目を開くと……………

なのはを探し歩いているフェイトとはやて。すると…

『ふふふ…』

フェイト「!?？」

はやて「フェイトちゃん？どないしたん？」

フェイト「い、今…あの声が……」

『あはは…』

はやて「っ…？……っ…」これはまさか…!?？」

フェイト「ど、どこにいるの…!?？」

かつて、声の主によって恐怖したことがあるフェイトとはやては、あたりを見回す。どこを見ても主らしき姿は見えない、と思っていると……

ぽんっ

フェイト・はやて「ひっ!?!?？」

肩に誰かの手が乗る。フェイトとはやての顔が青ざめた。
恐る恐る振り向くと…

時子・雪「ううううなあああ………」

血とホラーとややグロな顔があった。

ミリア「あれ？ヴィヴィオちゃんが入口にいる…でも、何で震えて…？」

サチコ「あ、あそこにいるのって……ミリアお姉ちゃん？」

雪「…ねえねえ、ミリアお姉ちゃんにもやってみようよ！」

遼「いいねいいね！どんな風に怖がるのか楽しみ」

時子「じゃあ早速……」

サチコ達は、後ろからゆっくりミリアに近付く。ある程度近付き、不気味な笑い声をかけ……

ヴィヴィオ「なのはママなんかっ、大っ嫌い！！！！！！」

サチコ達「え？」

ミリア「あ、ヴィヴィオちゃん待って！」

…ようとしたら、いきなり部屋の入口にいたヴィヴィオが叫び、泣きながら走り去って行った。

一体何事だろうか？

ミリアが心配しながらも部屋に入ったので、サチコ達も入口に行ってみた。

そこには、ヴィヴィオから突然嫌われたであろう言葉をかけられてショックを受けたなのはと、悪戯をしていたからか何なのか、なのはにお話をされてガクブルしているラムとロムの姿があった。

サチコ「え…何？何何??？」

なのは「あ……あ……！！？」

ミリア「な、なのはさん……？」

がくっ（膝ついて座りこむ）

なのは「……私……間違ってたんだ……私、どうして……こんな……っ」

ミリアの呼びかけは耳に入らず、なのははただ自分を責めることばかり言い続けている。混乱しているのだろうか。

ミリア「なのはさん、落ち着いてください！自分を責める前に、まず落ち着かないと！」

壊れたレコードのようにつぶやくのはと、とにかく落ち着かせようと必死になっているミリア。

何この突然なシリアスは？

たっ たっ たっ！

ネプギア「ミリアさん！どうかしましたか！？さっきヴィヴィオちゃん、泣きながら走ってましたよ！？」

ミリア「ネプギアちゃんっ、なのはさんが混乱してるの！ちよっと落ち着かせてあげて！ボクはネプちゃんと一緒に、ヴィヴィオちゃんに話を聞いてくるから！」

ネプギア「はい、わかりました！」

たっ たっ たっ……！（行）

ミリアは行ってしまい、サチコ達は影のように残されたのだった。

サチコ「……ど、どうしよう……？」

雪「…空気読んで、別の人の所に行こっか」

何だか怖がらせてはまずいとも思い、部屋を後にした。

……

あれからも、サチコ達は獲物を探し続けているが、さっきの場面を見たせいか気乗りしない。

雪「ねえ…今日はもうやめにする？なんかやる気出ないよ…」

サチコ「……なんか、私達…悪いことしたのかな…」

時子「わかんない…ただ、からかってるだけだし…」

そう言いながら歩いてると…

「おい、その4人！」

サチコ達「!?!」

なんと、カイトと出会ってしまった。

カイト「やっと見つけたぜ…お前達だろ？皆に迷惑かけてるのは」

カイトは怒った顔で、サチコ達に言った。反射的にホラーの顔もしたのだが、カイトには通じない。

サチコ「な、何のこと？私達は何も…」

カイト「嘘言っな！さっきフェイトさん達からも聞いたぞ。サチコ達がそうやって皆を怖がらせて、トラウマを植え付けてるって。あちこちで絶叫がして眠れない人達もいるんだぞ」

雪「ううっ…」

カイト「まさかとは思うが、さつきヴィヴィオを泣かすきっかけを作ったのもお前達じゃないだろうな…?」

怒りをさらにこめたように言うカイトに、サチコ達は必死で自分達の無実を訴えた。

サチコ「ち、違うよっ！私達は何もしてないよ！」

雪「確かにからかったけど、ヴィヴィオちゃんには何もしてないよっ！」

カイトはその言葉を聞き、少し考えた。

カイト「…なるほど、本当らしいな。良心はあるか」

だが、と言いながら表情を戻す。

カイト「サチコ達が迷惑をかけてることに変わりはない。もしそうやってからかって、冗談抜きで立ち直れなくなったり、変貌しきってしまふ人が出たらどうするんだ！ほっとくのか？」

サチコ「そ、それは…！」

そんなことしたくない、と言いかけるが、カイトが言葉つないだ。

カイト「嫌だろ？俺だって嫌だよ。そんな悲劇は起きてほしくない」

片膝を突いて座り、少し怒り顔をゆるめて言う。

カイト「二度とするなどは言わない。けど、皆心を持ってるんだ。

だから…困らせたり、いじめるようなことはしないであげてくれ…頼む」

まるでお願いするように言うカイトは、サチコ達を思っ言ってることを感じた。

あとは、素直な言葉を言うだけだ。

サチコ達「…ごめんなさい…」

カイト「……うん、わかってくれればいいんだ」

心からの謝罪を受け止め、カイトは微笑んでサチコ達の頭を撫でてあげた後、立ち上がった。

カイト「それじゃあヴィヴィオのことについては無関係だし、もう行っていいぞ」

サチコ「あの…何があったの？」

カイト「さつきミリア達から聞いたばかりだけど、何でもヴィヴィオがおやつにとっておいたケーキを食べられたんだと。で、犯人がなのはさんじゃないかって所まで話が進んで、詳しく話を聞き回ってたんだ」

サチコ「おやつ…？……あ、そういえば…」

カイト「ん？何か知ってるのか？」

サチコ「さつき、パーマのおじさんをからかう前に、なんかラムちゃんとロムちゃんが皿とフォークをおじさんから取ったのを見たよ
うな……」

カイト「銀さんから…？？」

詳しく聞こうとしたら、ミリアとネプテューヌがやって来た。

ミリア「カイトくん！真相がわかったよー！」

カイト「ミリア、ネプテューヌ！それは本当か？」

ネプテューヌ「うん、ラムちゃんとロムちゃんが言うにはね、銀さ

んがヴィヴィオのケーキを勝手に食べようとしてたのを見て、二人は取り返そうとしたんだって」

ミリア「でも、ケーキは取り返し際にこっそり食べられて、皿とフオークしかなかったらしいの。その後なのはさんに連れて行かれて……」

カイト「……つまり、なのはさんは濡れ衣を着せられたってことか……」

たっ たっ たっ ……！（来）

ネプギア「ミリアさん！監視カメラの映像を携帯映像機に入れて持って来ました！」

ビビ「証拠もばっちり映ってたよ！」

ミリア「ありがとう、早速見せて！」

ビビ「了解、スイッチON！」

カチツ

映像には食堂が映し出され、そこには皆で利用している冷蔵庫からケーキを取り出している銀時の姿があった。で、聞いてしまったのだ。

「ん？そついやヴィヴィオのおやつがあったらしいが………まあいいや、別に食っちゃっても後からどうにでもなるし。よし、このケーキは絶対に食うぞーっ」

と。

後はもう話の通りである。

カイト達「……………」
サチコ達「……………」

黒幕は、間違いなく銀さんだ。

カイト「……………」サチコ達、これからやるべきこと……わかるよな？それで今回はきつちり水に流そう。いいな？」

サチコ達「（しゅばっ）イエッサー！！」

ビビ「私も行くであります！」

ネプテューヌ「よし、皆行くよー！」

ビビ・サチコ達「おおー！！！！」

ざっざっざっざっ……！（行）

カイト「……さて、あとはなのはさんとヴィヴィオ、ラムとロムを仲直りさせるだけだな」

ミリア「そうだね、行こっ」

……………

銀時の部屋

銀時はさっきまでビクビクしていたが、今はまたぐっすり眠るようになっていた。

だが、それを許しはしなかった。

ぐぐ……………

銀時「ん…………ん……何だ？体が動か……………」

ざすっ！！（顔の横にナイフが刺さる）

銀時「んのおおおお！！？なななな、何だこりゃ！！？」

何事かびっくりしていると、前に騎乗してる少女がいた。顔を血で少しメイクして、病んだような目をしている少女が。

ビビッ「アハ、アハハハハハハハ……ヨクモ……ヨクモノノハチャ
ンとヴィヴィオチャンヲ泣カセタナ……？許サナイ……許サナイ、許サ
ナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ
許サナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユ
ルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユ
ルサナイユルサナイユルサナイ……」

銀時「ぬおおああああああ！！！！？てててて、てめっ、何や
つて……ひいいいいいいー！！！！！！！！！！？」

左にはグロテスクな顔の雪、右には首が回りまくる遼、布団からフ
つ目の時子、そして……

サチコ「アアアア……」

顔面には血まみれのサチコ。

ここでアイリからお言葉。

9 話「ホラーケーキ騒動」(後書き)

どうしてこうなった？

銀さん…すまぬ！（キリッ）

10話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」(前書き)

なのはの苦悩と、おまけとしてレオンの意気込みのシリアス話です。

本家につなげようか、それともうちで続きを書こうか悩んでたら「
れを書いてました。」

10話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」

それは、ホラーケーキ騒動後の翌日のことだった。

銀時「ラバース「銀さ(時)ー！ー！ーん！！」

銀時「ぎやあああああ！！！！」

また銀さんを追いかけて回している銀時ラバース。しかし、今日は1人だけラバースにいない者がいた。

屋上で銀時達を見ているなのはだ。

その表情は、ひどく暗かった。

原因は、あの騒動だ。

あの騒動で、自分の勘違いでラムとロムを脅し、その後ヴィヴィオにも一時の間だが嫌われてしまった。

大嫌いという言葉はトゲとなり、なのはの心に深く突き刺さった。

なのはは、これによって嫌な気持ちが残っているのだ。

さらに、あれからなのはは考えた。学園で仲間達と過ごしてきた日常を振り返って、これまでの自分の行いが思い浮かんでくる。

考えてみれば、自分はその騒動に限らずいろんな場面でこんなことをしてきた気がする。

前にもラムやロム、他にもいろんな人達にも脅しをかけていたことがあった。ほとんどが些細なことで怒り、すぐに魔力をもって脅し

ていた。

小さい頃はそんなことはあまりなかったのに、19歳あたりになってきてから、そうすることが多くなった。特に、変わってきたのが銀時達と出会ってから。

思えば、いつからこうなったのだろうか？

いつから沸点がこんなにも低くなり、大人げない人間になったのだろうか？

いつから自分は、こんなに醜くなったのだろうか？

魔王や冥王と呼ばれることは、別に構わない。だが、そんなことなど関係なく、自分は悪い意味で我が儘になって迷惑をかけるようになったことが、罪悪感を大きくする。

もう、自分は手遅れなのかもしれない。本当の意味で、悪い魔王に成り果てているのかもしれない。

このままいけば、間違いなくどうしようもなく救いようのない人間になってしまいそうで…恐れている。

ビビ「なのはちゃん？こんな所で何してんの？」

そんな時、なのはの元にビビがやって来た。

なのは「…ビビちゃん…」

ビビ「どうしたの？あのパーマおっさんを追いかけないの？」

なのは「……………追いかける気にならないよ……………」

首を振り、暗い表情でそう返した。そんななのはに、ビビは様子がおかしいと思った。ここにいる普段のなのはなら、明るく元気にいて、たまに銀さんに夢中になったりするはず。

それなのに、今日のなのはは違う。それはビビにもはっきりとわか

った。

ビビ「なのはちゃん、本当にどうかしたの？いくら何でも暗すぎだよ」

なのは「……ちよつと、考え事してて……」

ビビ「……こないだのヴィヴィオちゃん、ラムちゃん、ロムちゃんとのこと？あれはもう仲直りしたんでしょ？謝罪までして……」

なのは「確かに仲直りはしたよ。でも……だめだよ……」

ビビ「え？」

騒動のことはそこまで気にしてはいないようだが、それでもなのはは暗かった。

なのは「私……あれから考えたんだ。今まで皆と過ごしてきた、私はどんな風に振るまつてきたのか……本当、今更かつて話だよ……」

ビビ「なのはちゃん……」

なのは「ビビちゃんも見てきたでしょ……？いつも些細なことで怒って、すぐ魔力で脅して……私が、我が儘に振るまつてきた所、全部……」

ビビ「そ、それは……ただ皆と楽しく馬鹿騒ぎする一環でしょ？」

なのは「……ううん……そんなんじゃないかった……私は、誰もが例える暴君同然なんだよ……」

ビビ「っ！」

暴君、その言葉にビビは心から否定した。

ビビ「そんなことないよっ！！なのはちゃんは、あのエリート学園のくそ男共やダヌのような奴らとは全然違っっ！！なのはちゃんは優しいんだよっ……！」

なのは「……その優しいって、どういうことなの？」

ビビ「え…?」

優しいということに、なのは深く聞いてきた。ビビは、答えることができなかった。

なのは「……ごめん、嫌なこと聞いちゃったね。……私、もう少し頭を冷やして来るね……」

そう言い、ビビの横を通り過ぎて学内へ戻っていった。

ビビ「……なのはちゃん……」

ビビは振り返り、ただ見送ることしかできなかった。

……

15:30

教室

カイト「え?なのはさんの様子が暗かった?」

ビビ「うん…何だか、いつもなのはちゃんじゃなかったの。励ましてあげても、ネガティブなままで……」

ミリア「…そういえば、今日はなのはさんが目立とうとしてなかったね」

ネプテューヌ「何か嫌なことでもあったのかな?」

ビビ「嫌なことがあった…というより、自分を責めてるみたいだった」

ネプギア「どうしてですか?」

ビビは先ほど聞いたことを、ありのままに話した。

ビビ「なんかね、今まで私達と過ごしてきて、自分はまるで暴君だ
って……」

ネプテューヌ「暴君って……それはいくら何でも大げさだよ？」

ビビ「うん、私もそんなことないって言ってあげたんだ。でも……自
分は醜いみたいになってばかりだったよ……」

カイト達「……」

カイト達は少し沈黙した。なのはが、急にそんなことを言うなんて
信じられなかったのだ。

ネプギア「なのはさん……まさか、昨晚のことをきっかけに悩んで
……」

ビビ「……してない……って言っても、嘘なんだろうね……なのはち
ゃんを魔王のように見る人が多いのは現実だし……」

馬鹿騒ぎのためにあるつもりだった魔王要素が、よもやこんなこと
になるのは誰も思っではいなかっただろう。

カイトとミリアも、ビビ達の気持ちを痛いほどに感じていた。

カイト「……何にしても、なのはさんは自分を見つめ直してるんだ
な……きつと」

ヴィヴィオ「……ママ……」

今にも泣きそうな表情で心配するヴィヴィオ。

ミリアは、ヴィヴィオを悲しませないように撫で撫でしてあげた。

ミリア「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。なのはさんを放っておかな
い……ちゃんと助けてあげるから、ね？」

ヴィヴィオ「…うん…」

カイト「とにかく、今はなのはさんの様子をしっかりと見ていよう。できるだけ相談もしてあげるようになる」

ビビ「うん、わかった」

ネプギア「他の皆にも伝えましょうか？」

カイト「ああ、それがいい。理事長には、ネプテューヌが伝えてくれ」

ネプテューヌ「了解、任せて！」

話がまとまり、ネプ姉妹はすぐに行動に出た。

カイト「あとはフェイトには……ビビから伝えた方がいいな」

ミリア「頼めるかな？なのはさんの心を癒してあげられるのは、もしかしたら…ヴィヴィオちゃんとフェイトさんだけかもしれないから」

ビビ「わかった、任せといて！…で、銀時も必要？」

カイト「いるとずっといいだろうけど…かえって逆効果になる可能性も否定できない。伝えたいなら伝えてもいいけど、できるなら最終手段にしよう。今回は、銀さんを夢中に追いかける自分についても責めてるだろうからな…」

ビビ「そう…わかった」

ミリア「…あ、言い忘れたけど、ビビちゃんもきつと鍵であるはずだから、お願いね」

ビビ「…うんっ、絶対に元気にしてみせるよ！」

ビビはそう意気込み、ヴィヴィオを連れてカイト達から離れた。

カイト「…俺達にできることは、これくらいしかない…」

ミリア「あとは、皆を信じるしかない……皆、お願いね……」

なのはを救えるのはフェイト達だけ。
カイト達は、信じるのみであった…

………

その日の夕方…

レオンはいつも以上に厳しい修行をしていた。
カイトにまぐれであっても負けたことから、さらなる強さを求めているのだろう。

レオン（…カイト……私はお前を侮っていた……だが、このまま
終わるつもりはない……次は、勝つ！！！）

次なる戦いは、すでに約束されている。

10話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」(後書き)

というわけで、これまじでどうしようっ、

なのは魔王ネタについて考える答えはここで出すか、真王さんに
出してもらっか、それともどちらでもやるべきか……

11話「赤ちゃんの世話」(前書き)

本家より、赤ちゃんネタです。どう書けばいいのか、よくわかって
ません；

11話「赤ちゃんの世話」

キンコンカンコーン！

10:00

銀八「さて、今日はお前達に頼みたいことがある」
ネプギア「頼みたいこと？」

銀八「今日一日、リルの面倒を見てほしい」
カイト「何で？」

銀八「実は、理事長がまた転校生への挨拶のために出張されてる。そこで、帰って来るまでお前達に面倒を見てもらいたいつてわけだ」
ザック「そうなのか。けどリルは……」

銀時「冗談じゃねえ……何でガキンチョの面倒を見なきゃいけないだよ。ギルシアとレーティアに頼めばいいだろ？」

ブラン「二人は有休取って夫婦旅行に行ってる……」

ベール「赤ちゃんは預けておいて、二人つきりで羽をのばしたいらしいですわ」

一部「えええ……」

いつも面倒を見てる理事長も、夫婦もいない。赤ちゃんを二の次にしてないか、気になる者が何人かいたそうな。

銀八「まあとにかく、任せたぞ」

ネプテューヌ「ちょっと、まだ先生達がいるじゃん？」

ネプギア「そうですよ、手伝ってくれないんですか？」

銀八「先生達は事務で忙しいので、手は離せません！」

ネプテューヌ「のんびりしてる先生達も見かけるけど？特に銀八先生」

銀八「先生にだって、休みは必要です！ゆとりの時間は取るべきです！」

ネプギア「その時間を少しでも世話に使ってくれないんですか？」

銀八「……………」

しばらく沈黙する銀八。

銀八「……………」とにかく、リルの世話は頼んだぞ！以上っ！」

全員「逃げた！！？」

銀八はリルを置いて逃げました。

ここでネプ姉妹は言うのだ。

ネプテューヌ「…大人って、汚いよね…」

ネプギア「うん…私も、あんな汚い大人にはなりたくないよ…」

……………

銀八「大人はね、ずるいんだよ…（黒）」

……………

というわけで、リルの世話をすることになったのだ。

リル「あう〜」

ミリア「結局、世話することになったちゃったね（だっこしてる）」

ノワール「仕方ないわよ、大人は汚いんだし」

カイト「そうだな…こうなったら、しっかり面倒見るしかねえよ」

アイエフ「はあ…汚い大人には困ったものね」

銀時「…お前ら、汚い大人言うのやめようや」

銀時も一応は大人である。聞いてると嫌に聞こえるのだろう

コンパ「とにかく、リルちゃんもいい子ですから、優しくしてあげるだけでもきつと大丈夫です」

ミア「そうだね。リルちゃんはいいい子だから」

銀時「へっ、どうだか。とにかく、俺は関わらねえからな。ガキンチヨの世話はお前らに任せ……」

ドフォオツ！！！！（サイコパンチ）

銀時「ぶっ！！？（殴られた）」

ずぞぞぞー！！！！（地をはいながらふつとぶ）

ミア「あ……」

リル「きゃは〜」

カイト「……頭いいかな。ガキンチヨって呼ばれたのが嫌なんだな」
銀時「……ぜ、ぜってー関わらねえ……ぞ……がくっ」

銀さん、どんまい。

……

昼食の時間

リルにはミアが常につくことになり、食事もミアに任された。ビンに入れたミルクを用意し、リルに飲ませていた。

ちゅく、ちゅう、んぐ、んぐ……

リル「あうー」
ミリア「ふふっ、おいしいんだね」
リル「わうー」
ネプギア「なんか、すっかり懐いてますね」
カイト「ああ、ミリアも楽しそうにしてるよ」
ネプテューヌ「まるでお母さんみたい」

ネプ姉妹も、見ていて和んでいる感じた。

カイト「ミリアが母さん…か。確かに、ミリアは俺達の母さんによく似てるからなあ」
ラム「そうなの？」
カイト「ああ…今度また話すさ」
ロム「…楽しみ…」

楽しく話しながら食事をするカイト達。ところが…

リル「〜?」
ミリア「?どうかしたのリルちゃん?」

リルが銀時達がいる方へ向き、指をさした。

ぶわっ!

銀時「ぬおあああああつ?!?!?俺の箸に花が咲いたとおおおお
お!?!?」
ザック「げえええー!?!?!?キノコ箸になりやがったああああ
ー!?!?!?!?!?」
近藤「バナナ箸いいー!?!?!?!?!?」

なんと、銀時やそのまわりにいる人達の着に超能力が働き、変なものが生えたり変化した。

リル「あう」

それをやったであろうリルは、とても面白そうに笑っていた。

カイト「…なんという悪戯…」

ミア「か、変わった悪戯するんだね…」

これは怒るんじゃないかと思った二人。

銀時「…か、関わらねえ…関わらねえぞ…っ（プルプル震えてる）」

犯人が誰なのかはすぐにわかり、怒りが一気に込み上げてくる銀時だが、耐えているようだ。

……

14:00

休み時間

リル「あう」

リルは元気そうに笑っている。ミアも、リルのご機嫌に合わせて会話している。

銀時「あーったく、イライラする！」

ビビ「ぷっ…うわっ、何やってんのおっさんww」
神楽「何やってるアルか。銀ちゃんいつから裸好きになったアルね？」

ビビと神楽は銀時の姿を見て、銀時を変に見た。さらに、それにつられてまわりの何人かも変に見て引いたり笑ったりした。

ぷっん、と切れた音がした。

銀時「うがあああああああつ！！！！俺が何したってんだごるあああああああつ！！！！」

カイト「あ、流石にキレた…」

新八「ちよっ、銀さん落ち着いてください！悪気はないんですから…」

銀時「うるせええええっ！！！！悪気ありまくりだろっがあああああつ！！！！あのクソガキアアアアア！！！！」

ミリア「ちよっ、銀さん！？」

だっ！！（近付きだす）

銀時「そいつをよこせミリアあああつ！！！！クソガキにお話をしやらあああああつ！！！！」

銀時は暴走をし出してしまったようだ。リルからの悪戯に我慢できず、ついに激怒した銀時はミリアからリルを取ろうと近づく。その怒り顔を見たリルは…

リル「…あ…あう…あ…」

カイト「ん！？」

ミリア「いけない！？銀さんそれくらいにしてあげて…このままじ

ネプギア「はい…ありがとうございます」

ミリア「それにしても、さっきの子守唄はすごかったですね。あつという間に泣き止んじゃいましたよ」

イストワール「プラネテューヌの誰もが使うほどですからね。ネプテューヌさん達が今よりも小さい頃に、よく歌って寝かせてたんです」

ミリア「へえー…そうなんですか」

ミリアは子守唄の話聞いて、不思議な子守唄なんだなと思った。

カイト「それにしても、リルはいろんな意味ですごい子だよなあ…

…さしずめ、パワフルベビーみたいだよ」

イストワール「くすっ、確かにそうですね。でも、どんなにすごい能力があるとしてもリルちゃんのはまだまだ可愛い赤ちゃんそのもの…これからの将来は、もつとすごいかもしれないよ」

ミリア「そうかもしれないね。…ふふ、楽しみだなあ」

わくわくするようにミリアは言う。何だかんだで、リルの人生はまだまだこれからだ。

……

イストワール「ところで、銀時さん？以前の追試、また不合格でしたよ。今日は補習をしますので、逃げないでくださいね」

銀時「……………orz」

11話「赤ちゃんの世話」(後書き)

リルは本家で大人化できるようになってますが、今回はなしにしてみました。というか赤ちゃんキャラの方が通しやすいので、あまりやらないかもしれません。

12話「平和。転校生もあるよ」(前書き)

普通の日常話です。あと、こちらのメインキャラ追加いたします。

12話「平和。転校生もあるよ」

10:00

キンコンカンコーン！

時は、なのはの苦悩が起こしたハートレス事件から2日後。
かつて、復活したエリート学園への殴り込みでカイトとミリアがネプテューヌ達に心から受け入れられた時のように、なのはもより心を開くようになった。

今日もまた、平和な1日が始まる…

……

銀時「てめえらあああああああ！！！！！！！」

ラム「わーっ、銀さんが怒ったー！」

ロム「くすくす…（笑）」

ラムとロムに、顔に落書きをされてムツカムカの銀時。
もちろん、他の人もこの通り。

ブラン「またやりやがったなてめえらあああああああつ！！！！！！」

ギルシア「また真つ黒か！」

新八「せつかく手に入れたお通ちゃんの消しゴムがああああああ
っ！！！！」

ザック「お前いつから眉毛こゆくなっただんだ？」

マリオ「お前こそ、ヒゲあるぞ」

カイト「うわあ…またやつちゃってるなあ」

もちろん、カイトもびっくりしていた。

そこに、なのはが二人に声をかけた。

なのは「こらっ、二人共皆を困らせちゃだめじゃない。後が大変な
んだから、やめてあげようよ」

ラム「えー、やだよ。こんなに楽しいんだもん」

ロム「こくこく…」

悪戯っ子のように笑顔で言うラムとロム。これを見た何人かは、ま
たお話されるんじゃないかとビビる。

で、なのはは…

なのは「…ふーん、そっかあ……じゃあみなさんに言わなきゃいけ
ないなあ。悪戯してるから、おやつ抜きにしてくださいって」

ラム・ロム「…え？」

なのは「みなさんがね、二人はいい子だから今日はあの有名なバナ
ナケーキをご馳走させるつもりだって言ってたよ。でも、このこと
を言ったらがっかりするだろうなあ……きっと、おやつもなしにさ
れるんじゃないかなあ？」

ギクウウツ！

ラム「わああっ！？待って、待ってええっ！お願いだから言わ

ないでえ〜っ！」

ロム「い…言わないで…(震)」

なのは「どうしよっかなー？ごめんなさいって言ってないしなあー？」

ラム「ごご、ごめんなさいごめんなさいーっ！反省するから許してええ〜っ！」

ロム「ごめんなさい…(ぶるぶる)」

意地悪そうに言うなのはに勝てず、ラムとロムは涙目になって大慌て、タジタジだ。

銀時「ふふーん、ざまあねえなあ！悪戯なんてするから、そんな展開になるんだぜえ？」

で、銀時は勝ったといわんばかりに威張るのだった。

カイト「銀さん大人気ねえなあおい；」

なのは「ほんと、子供相手にムキになりすぎ。恥ずかしくないの？」
 Fayette「確かに…」

銀時「え…何？俺明らかに被害者なんだけど！？；」

なのは「被害者だからって、そんな風にするのはよくないんだよ。あんまり乱暴に接してたら、いくら銀さんでも怒るからね？」

銀時「うっ…；」

銀さん言い返せませぬ。

で、ラムとロムはまだ震えてる。

ラム「ごめんなさいい…」

ロム「うっ…」

そんな二人になのはは……

ぽんっ（撫で撫で）

ラム・ロム「…？」

なのは「冗談、許してあげる」

ラム・ロム「！」

にっこりして言うなのは。ラムとロムは嬉しさのあまり、なのはに抱き着いた。

ラム「わぁー！っ！ありがとうなのはさんっ！」

ロム「ありがとう…！」

なのは「二人つたら、にやはは」

なのは達は仲良しのようにだ。この様子を見ていた人達は、ほっと安心した。

ベール「ふふ…あの様子だと、なのはは変わられたようですね」「ノワール「いいんじゃないかしら。これで」

なのはの変わり様に、ほとんどが微笑むのだった。

………

13:00

運動場にて（休み時間）

いつも通りの風景、いつも通りの活気、いつも通りの時間………そ

う…

マリオ「296、297、298…」

いつも通り。

カイト「…マリオってさ、すげえトレーニングしてるよな」
ミリア「うん、ほんとすごいよね」

カイト達はマリオの修行を見ているが、その内容というのが、でかい岩を背中に乗せて腕立て伏せをしているのだ。

マリオ「なに、慣れればそうでもねえよ。310、311…」

カイト「じゃあさ、他にはどんな修行してるんだ？」

マリオ「よくやるのは、逆さ吊り1時間だな。しかも、全方位から攻撃用の弾が飛んで来るメニューつき」

カイト「そんなこともしてるのか？すげえや」

ミリア「流石にボク達はそこまでしないなあ」

マリオ「何なら今度やらせようか？他にも、綱1本の上で弾丸の雨しのいだり、いろいろあるぞ。352、353…」

カイト「そうだなあ……ぜひ、やってみたいな」

ミリア「うん、楽しみにしてるね」

マリオ「おっっー！」

……普通に話してるカイト達やマリオって、何だろうか？ねえ、皆さん。

……

銀八「えー、午後で遅くなっちゃったが、恒例の転校を紹介する」
ネプギア「恒例言いますか…」
ユニ「別にいいんじゃない？」
銀八「んじゃ、入って来い」

転校生が呼ばれて入って来た。その人達は…

カイト「ん！？お、お前達は！！？」

「ん？…つて、カイト…？カイトなのか！？」

「ミリアちゃん…？」

ミリア「…！レナちゃん…レナちゃん…！！」

急にミリアが席を立ち、オレンジの茶色の間にあるような音をした髪で、白い帽子と服を着た少女に抱き着いた。

さらに、茶髪で学生服を着ている少年にもカイトが名を言った。

カイト「圭ー！圭ーじゃないか！」

全員「えっ！？」

他の人達がびっくりしているのを他所に、会話が進む。

圭ー「やっぱりカイトだったか！久しぶりじゃねえか！」

レナ「はう…っ、ミリアちゃん久しぶりっ」

ミリア「よかった…また会えたね！圭ー君も、元気にしてた？」

圭ー「おう、この通り元気ありまくりだぜ！な、レナ？」

レナ「うんっ、レナもいつも通りだよ。カイト君とミリアちゃんも元気そうで嬉しいかな、かなっ」

カイト「ああ、俺達もだよ！」

カイト達4人は再会でもしたのか、とても嬉しそうに会話をしていた。

銀八「何だ、お前ら知り合いなのか？」

カイト「ん？ああ、エリート学園を離反して放浪をするようになったばかりの頃に、雛見沢で知り合ったんだ」

ミリアがレナから離れたのを確認し、改めて自己紹介に入った。

圭「^{レナ}というわけで、雛見沢の学校を卒業してやって来ました！俺は前原圭一。皆よろしくな！」

レナ「同じく竜宮レナです。よろしくお願いします」

元気に挨拶をする圭一とレナを見て、他の生徒達にとって感じよさそうだった。

銀八「あー、それともう二人いるんだ。入って来ーい」

まだいるらしく、今度は青い長髪の少女と紫髪のツインテールの少女が入って来た。こちらはセーラー服だ。

「まさか圭一達の知り合いがいたとはね〜」

「そうね。コミュニケーション能力がいいのかしら？」

カイト達の様子を見た感想を話すように会話する二人。

カイト「？友達か…？」

レナ「うん、入学前に会って知り合ったんだよ」

どうやら圭一達の新しい友達らしい。

「どもども、泉こなたです。皆よろしく〜」

「私は柊かがみっていいいます。よろしくお願いします」

こなたはのほほんと、かがみはハキハキと挨拶をした。こちらもフレンドリーみたいだ。

銀八「えー、というわけで仲良くするようにー」

ネプテューヌ「なんか、今度もすぐに仲良くなれそうだね」

ネプギア「うんっ」

姉妹の言葉は、少しフラグっぽい気がしなくもない。まだ来るのではないか、というような。

何にしる今日も平和な時間が続くのだ。

12話「平和。転校生もあるよ」(後書き)

というわけで、レギュラーとして圭一、レナ、こなた、かがみが入ります。

強いですよ？

13話「スパイダー……！」（前書き）

ハートレスであるらしい、スパイダー共の討伐です。

13話「スパイダー!!!!!!」

キーンコーンカーンコーン!

圭一「…でな、そいつはあの後心を入れ替えてバイトをするようになったんだってさ」

カイト「へえー、そんなことがあったのか」

こなた「難儀だよねえ、あの子も」

圭一、レナ、こなた、かがみが転校してきてから、カイトとミリアやなのは達、ネプ姉妹はすぐに仲良しになっていた。

圭一「で、話は変わるんだけどよ、こないださ……」

ごとごと…

カイト「ん？」

ネプギア「どうかしたんですか？」

カイト「今何か音しなかったか？」

かがみ「音？」

ごとごと…

なのは「…あ、本当だ。何だろう?」

フェイト「侵入者…?」

ネプテューヌ「それとも乱入者…?」

カイト達はあたりを見回してみた。すると…

「とととととととと！」

近付いて来る奴は、ツボだった。

カイト達「!!?」

ただし、クモの足がついてます。

かがみ「な、何よこいつ!？」

こなた「これは…モンスターか！」

ばばっ！（武器装備）

カイト「!？おい何だその武器は!？なんか強武器っぽいが!？」

こなた「ん？何って…聖剣ファールウエルですが何か？」

かがみ「いや、その言い方じゃわからんから…」

ネプギア「そう言うかがみさんの武器もすごそうなんですけど!？」

かがみ「これ？いろいろあって、雷槍ゼウスを使ってるわ」

ネプテューヌ「どうやって手に入れたんだろう…」

気にしたら負けか？

言ってる、ツボが動きを見せた。

圭「ん!？こいつ、まさか爆弾生物か!？」

なのは「突進しようとしてるよ！」

レナ「みんな、下がって!!」

レナが前に出て、手投げ用の鉈を1本取り出した。

レナ「はううーっ!!」

ぶんつ、ざくつ!!
ちゅどがあああああん!!!

レナはその鉈を取り出してツボに投げつけ、命中したツボは爆発を起こしながら消滅した。

ミリア「爆発した……圭一君が言った通りみたいだね」
カイト「でも何なんだ？どうしてあんなツボが……」

ごどごどごど……

圭一「ん？…げっ、何だあのタル軍団は!？」

圭一が指をさした方を見ると、今同はタルからクモの足が生えた軍団がいた。

しかも100体以上はいそうだ。

フェイト「さっきのツボの仲間……でもどこから現れたの!？」
こなた「まさか、こいつら実はロリコンで私を誘拐しよう!？」
かがみ「んなわけあるかっ!」

ボケてる場合じゃないんだぜこなたん。

ピンポンパンポーン！（アナウンス）

ヴィヴィオ「？」

「えー、私エッチ・ザ・ハードがお知らせいたしまあす。擬態蜘蛛のハートレスが、あそこ……倉庫から溢れ出してますうう！生徒の皆

銀時「だぁー！くそっ！！まじで何なんだこいつらはぁぁぁっ！！」

ノワール「ていうか、何でタルに蜘蛛の足が生えてるのよ!？」

学園のあちこちでは、すでに戦闘が繰り広げられていた。主に、タル蜘蛛が無数近くいる。

ビビ「こいつら倒してもきりがない…！アイリちゃん、情報は入った？」

アイリ「はいっ、ちょうど低級霊が調べて戻って来ましたわ!」

ずばぁんっ！！

鎌でタル蜘蛛を斬り捨てながら、アイリは伝える。

アイリ「このハートレス達のマザーは、学園のどこかに複数いるそうです。そいつらを始末しなければ、タルの蜘蛛がどんどん発生し続けますわ!」

銀時「マザーをつぶせて…どうやって探すんだよ!？」

アイリ「低級霊達に案内させます!低級霊が向かう先にマザーの反応があるはずですから、探して退治してください!」

ユニ「わかったわ!行こうっ、お姉ちゃん!」

ノワール「ええ!」

アイリ「低級霊達、いいですわね?しっかり案内して差し上げなさい!」

低級霊達はそれぞれに飛んでいき、仲間達をマザー討伐させに向かわせた。

倉庫

ギルシア「すでにマザーも動いてるらしいが…ここにどどまってる奴がいるのか？」

レオン「箱にも紛れてるかもしれん。調べるぞ」

ザック「どうやって？」

ガレーナ「決まってるであろう…」

ずばばばばばー！！！！（箱の破壊）

レオン「片っ端から壊すまでだ！！」

ガレーナ「うむ！」

ザック「ちよっ、何やってんだー！！！！？」

ユウカ「あら面白そう」

ザック「いやいやいやいや！？後で先生達にどやされるぞー！！！！？」

レオン達はザックのツッコミを聞かず、箱を無差別に破壊しまくった。

レオン「む？これは伝説の剣ばかり入ってたのか！」

ガレーナ「なんと！後で堪能しようではないか！」

ザック「やめとけええー！！！！無事では済まねえぞおおー！！！！！！？」

ぼかんぼかんぼかあー！！！！

宝箱・箱の蜘蛛「！！！！？」

で、知らない内にマザーの蜘蛛達は退治されていた。夢中になって気付かなかったのだろうか？

ザック「あーあ…俺知らねえからな…：…ん？」

ふと、散らばる物々の中からある物を見つけた。それは、写真集セツトだった。それを一冊取り出し、読んでみた。

ザック「これは…：…アダルティックサキュバス！？しかも無修正！

！こいつはレアなんじゃねえか！？」

ギルシア「何！？幼女はあるか！？」

ザック「…！うほおおーっ！ありますぜ旦那あ！こりゃレアもんだぜギルシア！」

ギルシア「でかしたぜザック！よし、俺も混ぜろお！！」

ヤルオ「ちよつ、僕もwwwwww」

変態男共は、事態そつちのけで写真集を読み出した。
ちなみに…

ジャンヌ「やんっ…：そんなに絡みつくなんてええ…：v」

レーティア「おませさんねえ…：あんっv」

シャリアローゼ「ああんっ、そこおお…：v」

変態女達もサボっている。

…

美術室

ステラ「！あそこあたり、タル蜘蛛がわらわらしてる！」
フウ「あのあたりにマザーがいるのかな？」
ステラ「だと思っけど……」

ちよんちよん

フウ「ん？」

後ろから右肩をちよんちよんされ、ふと横を見ると……

セレナ・ベル「！！？」

ステラ「へ！？」

なんと、ムキムキマッチョの銅像がそこにあり、足もあるため本物だった。

しかもその姿は……

『魔法少女になったつもりジジイ』

フウ「！？きゃああああー！ー！ー！っ！！！！！」

ずだだだだだだだだだだだだだだだだ！！！！

フウは驚きと気持ち悪さのあまり、拒絶するままにナイフを投げまくったりゴボウで斬りまくってすぐさま破壊または撃破した。

フウ「はあ……はあ……何なのよ……もうっ！とりあえず八つ当たりしなきゃやってられないよおおー！ー！ー！」

言い出した直後、フウはタル蜘蛛の群れへ突撃し、デストロイに洒

落込むのだった。

ステラ「うわぁ…かなりキレちゃってる…」
ベル「てゆか、何よあのマザーは…」
セレナ「意図がわかりませんね…」

……

屋上

アイリ「！あそこにマザーがいましたわ！」
ビビ「あれは…爆弾!？」

ビビ達の目の前にいるマザーは、爆弾の姿をしている。屋上には防衛のために爆薬の倉庫がある。そこから出て来たのだろう。

神楽「さつさとつぶすアル！行くアルああー！！（突撃）」

銀時「おい神楽、待て!？爆弾だぞ!！」

突撃する神楽に気付いた爆弾蜘蛛は、1つ口を開いて何かしようとしました。

神楽「!」

どんな攻撃なのか…

爆弾蜘蛛「フトンガフットンダ」

一同「……………」

しかし、ただのダジャレでした。

「レナ「そおおれっ！！！！（広範囲一閃）」

どばばばばばばばばばば！！！！！！

ミリア「けど、こなたちゃん達もまだ全然疲れてないみたい。鍛えてるんだね。えいっ！！（火炎槍）」

こなた「まあね。こっちもいろいろ経験してるからね（魔神剣）」
かがみ「でもどうすんのよ？このままじゃいつまで経っても全滅しないわよ！（天雷槍）」

こなた「んー…ちよつと使うの早いけど、あれを使ってみるよ。巻き込んでから、皆は空に逃げといて」
カイト「空へ？わかった！」

こなたは聖剣フアーウエルを構え直し、あたりに冷気を呼ぶ。

かがみ「よし、皆飛ぶわよ！（ハイジャンプ）」

カイト「ああ！（飛翔）」

なのは達とこなたを除くカイト達は、全員空へ避難した。それを確認したこなたは、奥義をはなとうと気を高めた。

こなた「燃えさかる業火であろうと、砕き散らすのみ……なんてね」

こなたは聖剣を天にかざし、一気に冷気を広げていった。冷気はタール蜘蛛を次々と閉じこめるように凍らせ、やがて運動場を氷と冷気の海に変えてしまった。

こなた「奥義・冥醒剣！！！！！！」

ざすっ！！

剣を大地に突き刺すと、氷の海全体に衝撃が走る。理が、崩け散る。

ビキキツ、ずがしゃああああああああん！！！！！！

氷の海が割れ、そこから冷気が大爆発した。運動場を埋めるほどの数のタコ蜘蛛軍団は巻き込まれ、1匹残らず全滅した。

すたっ（着地）

カイト「これは……！！」

ミリア「すごい……！？あの剣帝が使っていたという奥義を、この目で見るなんて……！！」

ネプテューヌ「すっごーいっ！今の技かっこよすぎっ！私も使ってみたいよーっ！」

ネプギア「まさか、こんなに強かったなんて……びっくりです！」

こなた「ふっふっふっ、惚れちゃヤケドするぜ？」

かがみ「はいはい、いつまでもなりきるんじゃないの」

圭「にしても、一気に全滅したな……これでもう安心か？」

レナ「んー……どうかな？もしかしたら、まだ親玉がこのあたりにいるかもしれないよ？」

どすん、どすん……

ヴィヴィオ「？」

フェイト「どうかしたの？」

ヴィヴィオ「何かが、こっちに来る……？」

どすん、どすん、どすん！

なのは「！何、あれ…！？」

圭「な、何だあいつは！？」

レナ「はう！？」

カイト「新手か！？」

入口から何かがカイト達に近付く。その正体は…猛虎だ。

「グアアアアアオオオオオオつ！！！！」

ミリア「虎！？」

かがみ「にしちゃ、なんかかなりでかくない！？」

こなた「うわお、ここでボス戦かあ…！」

ネプギア「これは…（Nギア検索）…！？皆さんっ、あれはガー
ギルタイガーです！！」

フェイト「ガーギルタイガー！？それってまさか、次元獣って呼ば
れているあの…！？」

ネプテューヌ「え、やばいの？殺る気満々なの！？敗北戦とかじゃ
ないよね！？」

「ガアアアアオオオオオオつ！！！！」

このガーギルタイガーは何なのか？蜘蛛達との関係はあるのだろうか？

後編へ続く！

13話「スパイダー!!!!」(後書き)

次回は、アミナさんと本家からのリクをごちゃまぜにし、ストーリー作ります。さて、ガーギルタイガーは強いかな？

14話「次元獣ガーギルタイガー」(前書き)

ガーギルタイガー戦です。手強くてきた…はず。

14話「次元獣ガーギルタイガー」

あらすじ

超次元学園にハートレスの蜘蛛が大量発生。すぐにカイト達はこれを全滅させた。ひとまず安心するカイト達だったが、学園にガーギルタイガーという猛虎が侵入してきたのだった。

……

ガーギルタイガー「ぐるるるるる……」

ガーギルタイガーと対峙したカイト達に、逃げるといふ選択はない。倒さねば危害を与えるだろうし、どの道逃げられない。

こなた「こいつは…ちょっと手強いかも？」

カイト「次元獣…聞いたことぐらいはあるが、まさかここに現れるとは…」

圭一「よくわからねえが、そこらの雑魚とかじゃないって考えるべきか…」

なのは「…それにしても、どうしてこんな獣が…?」

ネプギア「確かに…普通は見つけることすらまねなのに」

レアモンスターとも言えるらしいことも加え、疑問は浮かび上がる。と、その時タイガーの上からモニターが現れたそこに映る人物は黒い影で正体がかめず、ただ偉そうな雰囲気があった。

『やれやれ…この獣を出さざるを得ないか』

ミリア「!?!この声は…!」

圭一「知ってるのか？」

ネプテューヌ「アイリの主人を殺した人！」

カイト「デニーっ!!！」

だが、カイト達にはわかった。声に聞き覚えがあったのだ。そして、その正体はデニー…アイリを絶望させたあの男だ。

『また貴様達か…やはり、スパイダー共では無駄だったようだな』
カイト「あのハートレス軍団を仕向けたのもてめえか！よくもアイリの主人を殺しやがって…今度は誰を殺すつもりだ!!！」

カイトにとって、デニーは許せない存在。怒りをあらわにして、デニーに叫ぶ。

『私をそこらの殺人鬼のように言わないでもらおうか。ガキである貴様に話しても無駄だろうがな』

カイト「答えるっ!!！何を企んでやがる!!！」

『ふん…まあいい。今日はその学園にいるセレナとやらを渡してもらおうと、こいつらをけしかけた』

ネプギア「セレナさんを…？」

『いるのだろう？すぐに出られるよう、入口で待機しているな』

……

学校入口

フウ「何あの虎！？何であんなのがいるの!？」

ベル「あのモニターの奴、確か…？」

セレナ「…まさか、あの人の狙いは…」

グローリア「…デニー…っ!!！」

錬金術士グローリアは、デニーに何かを思っていた。

……

フエイト「誘拐する気……！」

『違うな。渡してもらおうと言っているのだ。学園と貴様らを生かしてやるかわりにな』

ネプテューヌ「どっちでも同じじゃん！こんな騒動起こして、しかもこんな虎をけしかけてる状態で言っただって、脅してるようなものだよ！」

こなた「誘拐するってんなら抵抗させてもらうよ。なんか理想を指してるような気がするけど、そういう奴って独裁者に落ちぶれやすいしね」

かがみ「そうね……しかもあいつ、ちょっと変態そうな気もするし」
『……貴様ら……』

ミリア「退いて。ボク達は絶対に貴方の好きにはさせない」

『……死にたいらしいな……行け、ガーギルタイガー。こいつらを殺せ』

ぷっん（消える）

カイト「待ちやがれデニーっ……！」

ガーギルタイガー「グルアアアアアアアアツ……！」

圭「うおっ、また一段と凶暴になりやがったぞ……！」

なのは「まずはこの獣をどうにかしないといけないね。放っておいたら、他の人達までもが殺されるかもしれない」

カイト「だな……さつさとつぶすぞ……！」

レナ「来るよっ、皆気をつけて！」

ガーギルタイガーがカイト達へと襲いかかる。カイト達は構え、戦闘に入った。

ガーギルタイガー「ガアアアアツ!!! (ツメ攻撃連打)」

ぎんっ、ぎんっ、がきいっ!!! (ガード)

圭「ぐっ…こいつ、なんか動きが早すぎやしねえか!？」

レナ「圭一君!!! (突撃)」

ぶうんっ!!! (鈍一閃)

レナは圭一とガーギルタイガーを離そうと、鈍による大きな一閃でタイガーを斬ろうとした。

しかし、斬られる前にタイガーは後ろへ飛び上がり、攻撃を素早くよけた。

レナ「はうっ!? 動きが速い!？」

体格から裏切られるほどの素早さに驚くカイト達だが、タイガーはすぐに次の攻撃をしようと、ツメから炎を発生させた。

ネプギア「炎!？」

かがみ「何かして来るわよ!」

ガーギルタイガー「ガアアアアアアアツ!!!」

ぶんっ、ごおおおおおっ!!!

ツメを大きく振り降ろすと、その炎が飛ぶ大きな斬撃となって地面を走る。

カイト「遠距離攻撃か！？よける！！」

どがああああん！！！！

全員は急いでその炎をよけた。炎は最後、壁に命中して爆発を起こして粉碎した。

こなた「ちよつ、攻撃力ありすぎじゃん！？」

ガーギルタイガー「ガアアアアアアア！！！！（突進）」

ミリア「！！」

ぶふううん！！（よけ）

ミリア「そこおおっ！！（風牙突）」

かがみ「もらったっ！！（裂駆槍）」

ずがあああああっ！！！！

ミリアとかがみが動きを見切って反撃。タイガーにしっかり攻撃が命中した。

しかし、命中しただけだったのだ。

ミリア「……！！効いてない！？」

かがみ「嘘っ！？」

ガーギルタイガー「グルアアアアアアアッ！！！！」

ズガガガガッ！！！！

ミリア「！？しまっ……きゃあああっ！！！！」

かがみ「うあつ、きゃああああつ!!!」

こなた「かがみ!!!?」

カイト「ミリア!!!!」

ガーギルタイガーは体を横に回転し、ツメとしっぽを合わせた回転撃でミリアとかがみをふつとばした。これはカウンターにも相応しいようで、全方位攻撃だった。

なのは「気をつけて!また攻撃して来るよ!!!」

圭一「今度は何をしやがる気だ!? (バスターショット連発)」

レナ「攻撃を止めなきゃ!!! (手投げ鈍を投げまくる)」

フェイト「させないっ!!! (プラズマランサー)」

攻撃される前に止めようと、それぞれが遠距離攻撃でタイガーを止めにかかる。しかし、ガーギルタイガーはあまり動じず、まるで無視するかのように口に何かを集中する。

カイト「効いてないか...くそっ! (突撃)」

こなた「なら私がつ! (突撃)」

ネプギア「私も行きます! (突撃)」

どさっ、ずざざざざざー!!! (ミリア達が着地失敗しながらも、
どうにか立て直す)

ミリア「くっ...3人共!!!」

かがみ「もう攻撃して来るわよ!?下がりなさいっ!!!」

こなた「うっん、下がってらんないよ!とあっ!!! (ジャンプ)」

ネプギア「覚悟してください!!! (剣構え)」

こなた「通常技がだめなら大技しかない!!!」

ガーギルタイガー「ガアアアアアア!!! (こなたにクロウ)」

びしゅん！！（瞬間移動でよける）

カイト「隙を見せた！今だ！！！（チャージ）」

ネプギア「行きます！！ライトニングブレイバー！！！」

ズバアツ、ズバアツ、ズバアツ、ズバアツ、ズダアアアアアン！
！！！！

ネプギアは雷のごとき瞬速で払い抜けによる4連斬をはなった。そして後の5発目、上からのたたき斬りで決めた。これぞ、ネプギアの新技だ。

こなた「続くよっ！奥義・鬼炎斬！！！！」

ごぶああああああつ！！！！

続くようにこなたは紅蓮の炎を剣に込め、力強く薙ぎ払う。それは炎のツメのように、タイガーへ引つかきついた。だが、2つの奥義を受けても口へのパワー集中はまだ止まらない。

カイト「とつとと、大人しくしやがれええええええええええつ！！！！（気功波動砲）」

ずどおおおおおおおん！！！！！！

カイトは剣にためた気を振りなち、ディバインバスターのごとくすさまじい威力を持つ波動を撃つ。波動はガーギルタイガーに直撃し、ついにタイガーをぐらつかせた。

ガーギルタイガー「グギアアアアアアアアツ！！！！？？ガアアアアツ！！！！！」

だが、それでも口から何かを放射しようとしている。
そこに…

だだだだ…ばっ！（突撃）

銀時「させるかああああああつ！！！！！」

神楽「くたばれトラああああああつ！！！！！」

ずどごおおおん！！！！

なのは「！銀さん！！！」

ミリア「神楽ちゃんも！！！」

なんと、銀時と神楽が助太刀しに突撃してきて、タイガーに木刀と鉄拳をぶちかました。

カイト「…何！？」

しかし、これだけ強攻撃を当ててもタイガーは止まらない。

こなた「嘘お！？」

ネプギア「に、逃げられない！！！」

ガーギルタイガー「ガオアアアアアアアアツ！！！！！」

どおおおおおおおん！！！！！！

ネプギア「きゃあああああーっ！！！！」

こなた・神楽「うぎやあああああーっ！！！！？」

カイト・銀時「ぐわあああああーっ！！！！」

ミリア「皆あああーっ！！！！」

ガーギルタイガーは口から波動を放射し、突撃したカイト達全員を飲みこんで焼きつけた。波動はカイトが撃つたものよりも大きく、逃げようがなかった。

どさ、ずざざざざーっ！！

カイト「っ……ぐっ……なんて威力だ……っ！」

こなた「洒落に、ならないって……」

銀時「野郎お……暴れすぎだろ……っ」

ミリア「皆大丈夫！？すぐに回復するから！」

ミリアはすぐに回復の魔力を使い、リザレクションを発動。癒しの魔法陣によって、カイト達を回復させる。

かがみ「全く、いつも無茶をして……」

こなた「しょうがないじゃん……相手がやばすぎるんだから……」

銀時「で……どうすんだよ？ありやかなり強い攻撃をしまくらなきゃ、ちつとも倒れやしねえぞ」

カイト「ああ……こりや、奥の手を使っていかなきゃまともによつてられねえだろうな。だが、問題は何をするか……」

強攻撃でしか怯まないことはわかった。だが、何が効果的でかつフラグ的にも無難で済むか。

それを出さなければ、勝ちにくい。

ガーギルタイガー「グルルルル…！」

一方、ガーギルタイガーは攻撃の反動で動けず、じっとこちらを睨んでいる。

打開するにはどうすればいいだろうか？
考えるカイト達だが…

ネプテューヌ「……私にいい考えがあるよ」
カイト「何…？」

ネプテューヌが話を進めた。何か作戦があるのだろうか？

ネプテューヌ「今から私が、ありったけのパワーを溜めるから、皆はあいつの足止めをお願い。チャージには時間がかっちゃうけど、この作戦なら1発でいけるはず」

ミリア「何をするつもりなの…？」

ネプテューヌ「私のあの奥義をあいつにぶつけるの。チャージした分は維持できないから、1発限りだけだね」

銀時「……よくわかんねえが、いけるんだな？」

ネプテューヌ「うんっ、任せて！」

ネプギア「お姉ちゃん…！」

ネプテューヌは自信を表す笑顔で答えた。カイト達、彼女を信じないわけがなかった。

カイト「わかった、任せたぜネプテューヌ！」

銀時「よし、だったら壁役は引き受けてやるぜ。お前ら、絶対に死守するぞ！」

圭「ああ、わかってる！」

こなた「んじゃ、もうひと頑張りしますか！」

ガーギルタイガー「グガアアアアアアアアア！……！」
ネプギア「動き出しました！」
レナ「皆、頑張ろうっ！」

タイガーが再び暴れ出し、カイト達はネプテューヌに近付かせないために防衛に入った。

ネプテューヌ「よーっ………はあああああ………!!」

ネプテューヌは少しでも早く奥義を実行するため、力の集中に入
た。

どばばばばばばばばばばば……!!

チャージに入ってから、しばらく激戦が続く。ガーギルタイガーの
攻撃はすさまじいが、カイト達は負けじと対抗する。

ミア「………まだまだ！強風波……！」

なのは「ストライクスタああああーズ……！」

フェイト「トライデントスマツシャああ……！」

ネプギア「いつけえええ……!!」(スラツシユウエーブ)「

銀時・神楽「なめてんじゃねえぞゴルアああああ……!!」
(連打)「

ヴィヴィオ「たああああああ……!!」(フルパワー波動
拳)「

レナ「はうっ！！やああああ……!!」(斧をぶん投げ、さ
らに鉈の一閃で追撃)「

かがみ「落ちろっ、神天雷……!!」(神雷を落とす)「

こなた「ファイナリティブラストオオオオオ……!!」(爆炎の剣技)
「

ネプテューヌ「お待たせーっ！フォックスの覚悟も、無駄にはしないよー！！とうっ！！（ジャンプ）」

ついにネプテューヌがチャージを終わらせ、とどめの攻撃をはなつために空高く飛んだ。

ネプテューヌ「全力でいくからねっ、変身ー！！！」

ぴしゅああああっ！！（光につつまれる）

カイト「ネプテューヌ！？」

ミリア「あれは、何…！？」

光はすぐに消えた。だが、それはネプテューヌを変えたのだ。

「…変身完了…：女神の全力、見せてあげるわ」

紫の女神、パープルハートへ。

カイト「なっ！？別人になっただと…！？」

こなた「ちよっ、あれ誰…！？」

銀時「うるたえんなよっ、あれはネプテューヌだ！」

レナ「えっ、あれネプちゃんなの！？」

カイト達にとつて、驚愕をせざるを得ないことだろう。しかし、彼女はれっきとしたネプテューヌなのだ。

パープルハート「さあ…決着の時よ」

パープルハートは右手を天にかざし、力を発動した。すると、空にとてつもなく巨大な剣が召喚された。そう、この剣は…

パープルハート「次元獣…その身をもって受けなさい！」

敵へ投げ落とすためにある。

パープルハート「ヴァルキリー式、グランズセイバあああつ！！！！」

だあんっ！！！！（落下）

カイト「あれは…！！！？全員避難しろおおー！！！！」

ざすっ！！！！（タイガーに突き刺さる）

ガールタイガー「ガアアアアアアアアアツ！！！！？？」

ちゅどがあああああああああああああああん！！！！

！！！！

ガールタイガー「グギャアアアアアアアアアツ！！！！」

そして力は爆発し、ガールタイガーは巻き込まれ、ついに倒されたのだった。

………

かくして、ガーギルタイガーは撃破され、後に理事長の意向によって捕縛されたのだった。その後、デニーの通信がないか調べたが、すでにその様子はなかったようだ。

それと、あのハートレスの真のマザーがまだいたらしいが、こちらはマリオ達に倒されたらしい。何にしる、これでもう安心だ。

カイト「ふう…やっとおさまったな」

レナ「はう、皆無事でよかった」

ミリア「…それにしても……」

ミリアは、帰って来たパープルハートの姿を見て言う。

ミリア「本当に…ネプちゃんなの…?」

パープルハート「ええ…びつくりさせてごめんなさい。これが私、ネプテューヌのもう一つの姿なの」

圭「…なんか、結構別人っぽいな…」

レナ「はう…しかもすつごく美人…」

ネプテューヌの変わりぶりに、ミリア達はとても驚いている。なぜ、他の女神よりも変身した時の変化が大きいのだ。無理もあるまい。

カイト「…またデニーだったんだな。何でセレナを誘拐しようとしたんだろうか…」

カイトは、デニーのことで考えていた。だが、答えはなかなか出ないものである。

パープルハート「…まだわからないことばかりだけど、1つわかる

ことがあるわ」

カイト「？」

パープルハート「デニーは、私達や人々の日常を壊そうとしている敵ということよ。この平和は…絶対に壊させないわ」

カイト「…そうだな……………そのネプテューヌらしさは変わらないあたり、お前は俺達が知ってるネプテューヌなんだな」

ミリア「みたいだね…（微笑）」

パープルハート「ふふ……………守り抜きましょう。私達、皆の日常を」

カイト「ああっ！」

ミリア「うんっ！」

カイト達は改めて、守るべきものを守ることを誓うのであった。

……………

セレナ「……………奴ら、私の力が目的だったようですね。でも、何のために…………？」

物語は、すでに動いている。

ちなみに…

フォックス「ふっ……燃えつきかけたぜ……」

真っ白になってたけど、ちゃんと無事でした。

14話「次元獣ガーギルタイガー」(後書き)

やっぱりどうしてもカイト達メインになりますなあ；

さて、フラグ回収とかもしっかりやらねば

15話「強くなりたい」(前書き)

カイト、レオン、ガレーナの修行です。バウンサーを倒しまくります。

15話「強くなりたい」

キーンコーンカーンコーン！

カイト「じゃ、また後でな」

ミリア「うんっ、また後でね」

この日、カイトとミリアは別行動を取ることになっていた。

理由は、カイトがショートミッションという一種のテストを受けるためである。これは、理事長が用意する依頼や訓練を自主的に受けるもので、クリアすることで何らかの報酬をもらうこともできるのである。また、スペシャルミッションをクリアすれば、称号をもらうこともできる。そのため、学園で大人気でもある修行なのだ。

今日カイトが行くショートミッションは、カイトとあと2人が受ける内容であるため、ミリアには先に帰ってもらったのである。

ミリアと別れた後、カイトは集合場所へ向かうのであった。

……

ミッションルーム

チフユ「…来たか、カイト」

カイト「ああ…」

チフユ「今日で初めてだったな。自信のほどは？」

カイト「…言葉にし難いけど、全力でやれる。行ける所まで…いや、最後までやり抜いてみせる」

チフユ「…ふっ、お前らしいな」

たっ たっ たっ …

レオン「む…？」

ガレーナ「もう1人とはカイトであったのか。意外だな…」

カイト「あ、レオンさんにガレーナさん」

チフユ「よし、これで揃ったな」

カイトの他に受けるメンバーは、レオンとガレーナだった。

レオン「まさかお前もいたとはな…高みを目指すのか？」

カイト「そんな所かな？」

カイトとレオンは模擬戦で1度やり合っているため、お互いに少しずつわかる所をわかってきている。

チフユ「さて、そろそろミッションを始めるとしよう」

揃った所で、チフユからミッションの確認と説明を話す。

チフユ「内容については確認したと思うが、今回はバウンサー軍団を相手に30分間戦ってもらう。ミッションのクリア条件は、1度も倒れずに生き残っていることと、バウンサーを1人につき100体以上撃破することだ。ちなみに、バウンサーについてはエリート学園いた奴をベースにしているが、もちろん強さは尋常ではないぞ。いいな？」

カイト「ああ」

レオン・ガレーナ「はっ！」

チフユ「では、フィールドを展開する」

チフユはリモコンらしき機械を取り出し、バーチャル空間を展開した。

……

バーチャル空間（学園庭園）

カイト、レオン、ガレーナは庭園の中央に立っており、まわりにはデータから次々と具現されるバウンサー軍団がいる。

レオン「無数に現れるのならば、大暴れしてもよさそうだな」
ガレーナ「うむ、余もそうするでしょう」

レオン達は意気込みながら、楽しみな表情をしている。

カイト「…今度は…越えてみせる」

対して、カイトはエリート学園でバウンサーに追いつめられたことを思い出していた。あの時、バウンサーの能力の高さに圧倒され、エリート学園の生徒達によってミリアを恐怖させてしまった。実際、奴らがミリアを犯すことなどではしめない。そうしようとすれば、能力など関係なく問答無用で体に激痛を与え、さらに全身の骨を折るからだ。

だが、それよりも…ミリアを怖がらせたことが問題だ。もしカウンターが発動してなかったり、もしくは通じなかったら…？そう思うと、やはりされかけるだけでも嫌すぎるもの。

カイトにとっても、ミリアが嫌な思いや体験するのは辛い。だから、もっと強くならなければ、ミリアの心をも守れない。

それが、カイトの意思だった。

チフユ『ミッション開始!!!!!!』

チフユのかけ声と共に、カイト達はバウンサーへ突撃して行った。

.....

その頃、ミリアは...

レナ「あ、そろそろかな。ミリアちゃん、そっちの鍋の火を止めて」
ミリア「うん、わかった」

ミリアはレナと料理を作っていた。レナと一緒に料理を作るのは久しぶりらしく、レナ達が入学して来たので再会を祝って料理を作ることにしたのだ。ミリアも料理の腕はなかなか良いため、レナとの料理はとても楽しめるようだ。

ミリア「あとは...あ、レンジもちょうど鳴ったよ」
レナ「うん、ちょうどよかった。それじゃ、一気に仕上げちゃおうか」

料理は順調で、次々と完成品が用意されていく。そんな中、ミリアはふと思う。

ミリア（カイト君、頑張ってるね...おいしい料理を作って待ってるから）

頑張ってるミッションをクリアすることを願い、彼氏の帰りを待つミリアであった。

……

戻って、バーチャル空間

レオン「はあああああつ！！！！（一閃）」

ガレーナ「斬つ！！！！（薙ぎ払い）」

20分後、レオンとガレーナはすでに100体以上撃破しており、後は時間まで生き残るのみ。

レオン「バウンサーなど話にならん。次はどいつだ！」

二人共、まだまだ余裕であるようだ。やはり最強の者は伊達じゃない。

ガレーナ「して、カイトはどうかかな？」

ガレーナは気になってカイトの方を見てみた。

ざしゅっ、がきいいんっ！！！！

カイト「っ……だあああつ！！！！」

ずばああつ！！！！

カイトは呼吸が荒れており、明らかに苦戦しているようだ。撃破数は30体前後。バウンサーの攻撃力と素早さは、カイトを苦しめ続

けている。

カイト「はぁ…はぁ…（もう20分過ぎてる…早くしねえと、このままじゃクリアできねえ…!）」

このままではまずい、そう考えている。だが、受けてきたダメージは大きく、体も重くなりつつある。

そこに、バウンサーの攻撃は容赦なく続く。正面にいるバウンサーが波動拳を撃ってきた。

カイト「っ!」

カイトはすぐさま飛んでかわした。だが、バウンサー達はカイトよりも早く飛んでいて、カイトを追撃する。波動拳を全方位から撃ち、カイトは逃げ場をなくす。

カイト（あの時はここでやられかけた…けど、打開しなきゃ俺は…!）

カイトは剣を構え、打開するための技をはなつ。

カイト「突風撃!」

ずどおおおっ!!!

カイトは前方へ体を回転させながら、バウンサーへ突進して剣の刃を当ててふつとばす。ひとまず、同じパターンは避けられた。

カイトはすぐに地面へ急落して着地し、次の攻撃へ備える。

しかし、状況は変わったわけではない。遅かれ早かれ、このままではタイムアップ。

カイト（どうする？このままじゃまずい…考えろっ、考えるんだ…！）

ガレーナ「あやつ…苦戦しておるのか…無理もあるまい。奴はバウンサーよりも能力が低い。部が悪すぎだな」

ガレーナはカイトの戦いを見て、そう分析した。ただ、レオンは何も言葉にせず、バウンサーを次々と撃破していく。

バウンサー「烈風拳」

ぶふうん！！

カイト「なっ、しまっ…ぐはあっ！！？」

攻防を続けるカイトだが、この時に隙を突かれてしまった。しかも、このままバウンサー達からの一斉攻撃がカイトを襲った。

バウンサー達「追撃連打」

どがばどががががががが！！！！

カイト「がはあああぁっ！！？」

次々とたこ殴りにされるカイトに、この状況は沼のようだった。

カイト（くそおおっ…！！強すぎる…っ！？このままじゃやられる…どうすりゃいいんだ！？こいつらの能力はどうなってやがる！？ちくしょおおっ、考える俺っ…どうにかするんだ！！どうにか…！）

やられながら考えるカイト。

どうすればいいのか、それともどうしようもないのか？

答えが出ないままだったが、ある言葉がカイトの頭をよぎった。

『考えすぎるな。相手の能力を知ろうとするあまり、能力にこだわってしまつては意味がない。ある程度知った後は、もう能力やステータスにこだわらなくていい。あとは心のままに戦うんだ。だから大丈夫だ。心があれば可能性は必ずある。あきらめるな、カイト…』

カイト（…！！父さん…！）

がしっ！（拳を掴む）

バウンサー「!?」

カイト（…何やってんだ俺は…！父さんからいつも言い聞かせられてることを忘れるなんて、らしくねえよ…！俺は…これくらいでびびってちゃ…あきらめてちゃだめなんだ…！！）

力がみなぎり、体が軽くなつていくカイト。

闘志が、カイトを動かす。

カイト「っ…！！うおおおおおおああああああああああああ
っ…！！…！！」

バウンサー達「!!!？」

どごおおおおん!!!!!!

カイトは絶叫と共に気でバウンサー達をふつとばし、カイトの猛攻撃が始まる。

さっきまでとは別格のごとく、バウンサーを次々と1撃で薙ぎ払っていく。しかも、いくらバウンサーの攻撃を受けてもダメージはあまりなく、逆にカイトにやられるのが早まるだけだった。

時間はあと5分になる頃には、すでに100体斬りをしていた。

ガレーナ「何：？あやつ、またいきなり強くなったぞ!？」

レオン「痛撃剣：？いや、それだけではない：闘志か!？」

カイトの変貌ぶりに、レオンとガレーナはまた考えさせられた。カイトのバトルスタイルについては、ほぼはつきりわかってきた。それに、レオン達は間違いなくカイトよりも強いと確信している。

それなのに、今のカイトを見ていると別の思いが浮かんでくる。それは、少なくともレオン達に考えさせるほどのものだ。

そうして、タイムアップとなった。

.....

結果

レオン 326体

ガレーナ 319体

カイト 162体

越えることはできなかったが、カイトも無事ミッションクリアとなつた。

チフユ「よし、全員クリアだ。特にカイト、よくやったな」

カイト「ありがとう。無事クリアできてよかったよ」

チフユ「うむ、その調子でこれからもしっかり頑張るがいい。次も楽しみにしているぞ」

カイト「ああ、精進するよ」

カイトは嬉しそうであり、かつ次へ意気込むような表情をしている。

レオン「……不屈……か」

カイト「ん？」

レオン「いや、何でもない。カイト……次の模擬戦では必ず私が勝つ。覚悟しておくのだな」

レオンはカイトに強く言った。

カイト「そっか。何にしろ、楽しみにしてるよ」

対して、カイトは笑顔でそう返した。

カイトも、またレオンと模擬戦をしたいという感じた。

……

ミッションの後、トレーニングをしてから帰ったカイトがここに来ると、何やらとてもにぎやかだった。

カイト「ん？なんか賑やかだな…？…あれは、ミアとレナか？」

そこに、近藤がカイトに近付いて話をしてきた。

近藤「ようカイトっ、ちょうどよかったな！今夜はミアとレナが晩飯を作ったんだけどよ、これがもう絶品すぎのなんのってな！すげえうめえぜ！」

カイト「え、ミアとレナが？…そうか、それで…」

近藤「お前も早くもらわねえとなくなっちまうぜ。んじゃ！」

たっ たっ たっ …

カイト「…ミアとレナの料理はすごくおいしいんだよな。この賑やかさも当然か」

どうやら、ミアとレナの料理は皆に大評判らしい。納得したカイトは、トレイを手にして窓口に向かう。

たっ たっ たっ …

ミア「！カイト君っ、お帰り」

カイト「ただいま、ミア（笑顔）」

ミア「ミッションはどうだった？」

カイト「ああ、クリアできたぜ。やっとバウンサーも倒せるようになれてよかったよ」

ミリア「本当？すごいカイト君っ！頑張ったんだね」

カイト「へへ、ありがとな。さあて、すっかり腹ぺこになっちゃまった」

ミリア「ふふっ、まだたくさんあるから、いっぱい食べてね」

カイト「ああ、そうするよ」

カイトとミリアは、お互いに笑顔でそう会話した。

当然、料理もカイトにとって超豪華料理を食べてるような気分になるほど、すごくおいしかった。

15話「強くなりたい」(後書き)

レオン達とのコミュニケーションも、書いてて楽しくなってきましたね。

カイトはまだまだ強くなるべく、いろいろ頑張ります。

16話「ギターはどこだ」(前書き)

本家より、5pbのギターを探す話です。後半、またガチのシリアス話になるんで分けてます。

16話「ギターはどこだ」

キーンコーンカーンコーン！

15:20

カイト「ガルデモライブ？」

ネプテューヌ「うん、今日の放課後にそのライブを見に行くつもりだよ」

圭「へえー、ファンなのか？」

ネプテューヌ「それもあるんだけど、それよりも5pbちゃんが出るからかな」

ミリア「5pbって、確かあの人気アイドルだっけ？」

ネプギア「はい、今夜のゲストとして参加するんですよ。あの人の友達としても、応援してあげたくて」

レナ「そうなんだ。レナも、その娘の歌を聴いてみたいかな、かな」

こなた「私も興味あるから行ってみたいよ」

かがみ「そうね、私も行ってみようかしら」

圭「だな」

カイト「じゃあ俺達も行くとするか」

ミリア「うん。というわけでネプちゃん、私達も一緒にいい？」

ネプテューヌ「うん、もちろんいいよ」

ネプギア「それじゃあ、放課後5pbさんと一緒に行くので、部屋まで向かえに行きましょう」

……

16:20

寮(5pbの部屋にて)

ネプテューヌ「おい、5pbちゃん！来たよー」

ネプテューヌは明るく声をかけた。しかし…

5pb「ない……ここにもない……！」

ネプギア「？どうかしたんですか？」

5pbは何やら困り果てている様子だったため、ネプギアは聞いてみた。

5pb「あ、二人共！それが、大変なの……私のギターが、なくなっちゃったの！」

ネプ姉妹「ええっ!?!」

5pb「さつき、シャワーを浴びる前まではちゃんとここにあったのに、戻ったらどこにもなくて……どうしよう……今日は大事な本番なのにい……っ」

ギターがなくなり、焦りと困惑の表情で言う5pb。涙目にもなっていた。

ネプテューヌ「5pbちゃんがギターをなくすことなんてないし…

…まさか……」

圭「泥棒か？」

かがみ「ありえるわね……でも、どうしてギターを？」

カイト「…わからないが、やるべきことができたな。5pb、俺達もギター探しを手伝うぜ」

5pb「え……いいの……？」

ミリア「もちろん。困ってる人をほっとけないもん」

こなた「だよなー」

カイト「で、場所はわかるからいいとして…ライブは何時からだ？」
5pb「7時からなんだけど、僕も打ち合わせがあるから6時にはここを出ないと…」

カイト「6時…まあ、向こうであればのも面倒だよな。わかった、それまでには見つけて来る！」

ミリア「待っててね、必ずギターを見つけて来るからっ！」

カイトとミリアは先に部屋を出て、ギター探しに向かった。

圭「俺達も行くぞ！」

レナ「うんっ！」

ネプギア「私達は、ここを探してから行きますね！」

こなた「おk、んじゃ行こうかがみ！」

かがみ「ええ！」

たっ たっ たっ …

……

カイト達は急いで学園のあちこちを探し回った。学園と寮には、監視カメラをはじめとする高度なセキュリティが整備されている。

いかに泥棒が入る、あるいは泥棒を働いたとしても、そのセキュリティから逃れることは余程の者でなければ不可能。ましてや、理事長が率いるハード達もいることを考えれば、なおさら泥棒できないだろう。

それなのに、泥棒事件が発生した。馬鹿騒ぎならあまり問題にはならないが、今回はリアルで問題になるほどの事態。

カイトはおかしいと思った。

5pbがドジるはずもなければ、他の誰かがマジで泥棒することも

ありえない。だから、泥棒は外の者であるとしか考えられない。なのに、セキュリティは起動していない。

カイト（…まさか、何かあるのか…？）

嫌な予感が、カイトの頭をよぎる。

……

17:30

カイト「見つかったか!？」

かがみ「全然見つからないわ…そっちは？」

レナ「はう…こっちも見つからないよ」

こなた「うーん…参ったねえ。誰も見つけてないってことは、もう泥棒は学園にいないのかな？」

ネプギア「そんな…このままじゃ、ライブに間に合いません…！」

ネプテューヌ「うーん…困ったなあ…どこかで見落としがあるのかな？」

圭「…ていうか、どこを探しても見つからないってのは流石におかしくねえか？セキュリティも働いてねえんだろ？」

カイト「ああ…いくら何でもおかしすぎる。嫌な予感がするな…」

たっ たっ たっ …

銀時「おい、見つかったのか!？」

カイト「だめだ…見つからねえ。そっちは？」

銀時「学園の外も探してみたが、どこにもありやしねえ。怪しい奴も見かけなかった」

新八「まずいですね…もうすぐライブの集合時間になってしまいま

すよ」

ミリア「そつちでも見つからないなんて……」

カイト「くっ……!」

銀時「……悔しいだろうが、もうお手上げだ。どうしようもねえ……」

ネプギア「そんな……!」

落胆する一同。だが、カイトとミリアは違う。

カイト「あきらめるなっ、まだ時間はある!まだ探し回ることぐらいならできる!」

ミリア「そうだよ!このまま何もしないわけにはいかない!」

ネプギア「カイトさん……ミリアさん……」

銀時「とは言うけどよ、どうやって探すんだよ?あてはあるのか?」

カイト「……あてはない……でも、何かできることが……」

その時だった。

カイト「……ん?」

ふと、カイトは窓から運動場や学園入口を見渡した。すると、運動場にある生物を見つけた。

それは、ピッピだった。

他の仲間達も、それを確認した。

ネプギア「あれは……ポケモンのピッピ?」

銀時「んだあ?あいつ何でここにいやがんだ……」

ネプテューヌ「あ!あれ見てっ、5pbのギターを持ってる……!」

一同「えっ!?!」

なんと、ピッピは5pbのギターを持ち上げたまま、学園を出よう

としていた。

また、その付近の空にはUFOがあった。

カイト「……………まさか、あいつは……………!」

ばっ!…! (窓から飛び降りる)

カイト「逃がさねえっ!…!」

ネプテューヌ「あいつ、こらしめてやるっ!」

カイトとネプテューヌが飛び降り、着地と同時に全速力でピッピを
追いかけた。

ミア「!カイト君っ、ネプちゃん!」

銀時「追っぞ!」

……………

ピッピ「びっ、びっ、びっ」

だだだだだだだだだだ…!…!…!

ピッピ「?」

カイト「てめええええええええええあああっ!…! (怒涛の突風撃)」

ずどどおおおおっ!…! (クリーンヒット)

ピッピ「プイーーーーッ!…? (ぶっどぶ)」

ひゅー、ばじっ!… (キャッチ)

カイトはピッピを技でふつとばし、ギターを取り戻した。

ぷああー…

すると、ピッピの頭上にあるUFOから光が降り、傷付いたピッピは光によってUFOに吸い込まれていく。

ネプテューヌ「逃げる気！？絶対に逃がさないよっ！！」

ネプテューヌは光に飛び込み、ピッピを追って行た。

カイト「！ネプテューヌ！！！！」

カイトが叫ぶが、ネプテューヌはすでに光に吸い込まれ、UFOの中に入ってしまった。

UFOはその後、速く動き出して学園から離れて行つた。

カイト「くそっ…！！」

たっ たっ たっ！！（来）

ネプギア「お姉ちゃんが…！！」

ミリア「カイト君、追いかけてよう！！」

カイト「ああ、ネプギアも皆も来るだろ？」

ネプギア「はいっ！！」

かがみ「いちいち聞かないですよ！行くに決まってるじゃない！！」

こなた「んじゃ、銀さんギターを5pbちゃんに返しといて！！（渡す）」

銀時「うおっ！？（受け取る）」

こなた「さあ出撃じゃー！！（行）」

こなたの言葉と共に、カイト達はUFOの追跡を始めた。

銀時「お、おいお前らっ！」

カイト「銀さん達は学園に残っていてくれ！何か嫌な予感がするんだ！外にいる皆を呼び戻して、学園の守備をすぐに固めていた方がいい！！！」

たっ たっ たっ ……！

銀時「ったく、あいつら…全員で行った方が早いだろうに……はあ」

やれやれとぼやきながら、銀時達は5pbのギターを返しに戻って行った。

ひとまず、ギターは守られた。

だが、カイト達とネプテューヌは大丈夫なのだろうか？そして、カイトが言う嫌な予感とは？

16話「ギターはどこだ」(後書き)

ピッピにはいろいろ考えてることがあるので、次回はそれもかねて話を書きます。銀さん達の話は、後から本家にお願いしようと思いません。

17話「破られる詐欺」(前書き)

16話の続きです。またいつも通りです。

17話「破られる詐欺」

あらすじ

5pbのギターを盗んだ犯人であるピツピを目撃したカイト達は、速攻でギターを取り戻した。しかし、逃げようとするピツピを追ったネプテューヌが、UFOの中へ突入してカイト達から離れてしまふ。すぐにカイト達は、ネプテューヌを助けるために追跡したのだつた。

今回は、カイト達側の話である。

……

カイト達はUFOを追い、ミリアの魔法による移動補助を受けて山を越え野を走り、どこまでも追いかけている。

カイト「当たれえええええっ！！！（気功波動砲）」

どおおおん！！！！

走り続けながらカイトが気の波動を撃ち振るつた。

それはUFOに命中するが、UFOに張られたバリアのせいだダメーじがあまりない。

ある程度追いついた所で、カイト達は遠距離攻撃を連発しているのだが、なかなかUFOに損傷を与えられずにいる。

ミリア「まだ効果がいまひとつ…バリアが強すぎるよー！」

カイト「くそっ！何てUFOなんだ！」

場が変わり、次は岩山を走っている。

かがみ「これじゃラチが開かないわ！何かもつといい攻撃はないの！？」

圭「ないわけじゃねえが、距離がありすぎる！」

レナ「レナももつと近くに行かなきゃ、バリアを壊せないよ！」

ネプギア「お姉ちゃん……！」

こなた「ん……あの手のバリアを壊すには……あれしかないか」

かがみ「何かあるの！？」

こなた「うん、正直あまりやらない方がいいけどね」

かがみ「何よそれ？とにかく、何でもいいから言いなさい！」

こなた「ほーい。で、その方法はね……」

……

UFO内部

たっ たっ たっ …… (来)

ピッピ達「ぴーっ！っ！ぴっ、ぴーっ！」

「……止められませんか。やれやれ……私達の邪魔をするとは……」

操縦部屋らしき場所で、肌色髪で赤と紫のローブを着た女性が、慌てて入って来たピッピ達の言葉を聞いていた。

たっ たっ たっ !

ネプテューヌ「こらーっ！っ！早くボス出て来ーっ！い！」

そこにネプテューヌが到着。ボスであるその女性に叫んだ。

「…ほう…貴方はあの有名な女神…」

ネプテューヌ「貴方が5pbちゃんのギターを盗もうとした黒幕だね？絶対に逃がさないよ！」

太刀を向けてそう言った。

「…隠しても無駄ですね。いかにも…この私、ピルスがこの子達に仕向けました」

まわりにいるピッピ達は、すでにピルスと名乗る女性のそばにいる。

ピルス「まさかここに乗り込むとは思いませんでしたが…まあいいでしょう」

ネプテューヌ「何でギターを盗もうとしたの？おかげで、5pbちゃんのライブに迷惑がかかる所だったよ！」

ピルス「盗む…？集収って言うてくれませんか？あのギターには、素晴らしいエネルギーがたくさん込められている…あのギターがあれば、私達は宇宙へ帰ることができる。それなのに、貴方達に邪魔をされるとは…」

ネプテューヌ「エネルギー？宇宙？…何の話？」

ピルスの話がよくわからない様子のネプテューヌ。

ピルス「この世界には、ありとあらゆるエネルギーが存在している…宇宙を旅してきた私達ピッピ族にとって、どれも貴重なものばかりです。それらのエネルギーがたくさんあれば、全宇宙をあるべき姿に戻すことも可能なのです」

ネプテューヌ「…??？」

ピルス「しかし、この世界に生きる人間達は皆、そのエネルギーを

無駄に浪費してばかり…このままでは、いずれこの世界…いえ、下手をすれば宇宙を脅かしかねません。それに、技術も文化も廃れてきてしまっているとなれば、時は一刻を争います。滅びてしまう前に、エネルギーをありったけ集収して、私達の技術を進化させなければいけません」

ピルスは、我々の悲願と言いたいように話し、ピッピ達も頷く。

ネプテューヌ「だからrpbちゃんのギターを…?…なんか、いろいろ事情があつて、世界平和のために活動してるっぽいね。でも、だからってライブの邪魔をしたり迷惑をかけていいってことにはならないよ。ファンもたくさんいるんだし、皆がっかりするんだよ?」

しかし、ネプテューヌはそれでも悪いことはしちゃだめだと言う。

ピルス「全宇宙の存亡がかかっているのです。そんな小さなこと1つ1つを優先しては、手遅れになってしまいます。悪いですが…邪魔をしたこと、詫びていただきます」

ネプテューヌ「むう…っ。どうしても謝らないのなら、私にも考えがあるよ!」

ネプテューヌはピルスの言葉に少し怒り、太刀を抜いて戦う姿勢を見せる。

その時…

『うるたえるな小娘共おおおお!!!!』

全員「?」

ずどがあああああん!!!

ピッピ達「パイーーーー!!!?」

なんと、ネプテューヌとピルスの間の右から巨大な手が、壁を破壊して突き出た。さらに、それに乗ってカイト達が入って来たのだ。

カイト「ネプテューヌ!無事か!？」

ネプギア「お姉ちゃんっ!」

ネプテューヌ「あ、皆!来てくれたんだね!」

かがみ「全く、心配かけて。勝手に先走っちゃだめでしょ!」

ネプテューヌ「たはは!、ごめんごめん」

怒るかがみに、軽く笑顔で謝るネプテューヌ。反省してるかどうか、気になるようにも見える。

話をしていると、謎の手は消えていた。

ピルス「くっ…強力なバリアが破られたというのですか!?そんなことが…」

こなた「ふっふっふっ、私の召喚に死角はない」

かがみ「ていうか、何で巨人になった高橋社長を召喚したのよ…」

こなた「シリアスっぽかったからね。たまにはこういうのが効果的なのだよ」

正体は、アニメイトの巨人になった高橋社長だったようだ。

ピルス「…!まさか…貴方達は、ネットアイドルの女王ペア…!」

こなた「そだよ。かがみとペアで全世界ネットアイドル大会優勝者だよ」

ミリア「ネットアイドル？」

かがみ「まあ、アニメイトの特殊アイドルってやつよ。いろいろあって、私達はアイドルやってるの。学生もやってるけど」

ネプテューヌ「そうなんだ！？なんかすごいっ！」

圭一「え…じゃあ、その特殊なアイドルをやってたから、こうやって戦えるようになったってのか!？」

カイト「ま、まじかよ…」

レナ「はうー…」

こなたとかがみが、ネットアイドルという特殊アイドル、しかも全世界大会の優勝者であることが判明して驚くカイト達。

だが、詳しい話は後にすることにした。

ピルス「…まさか、ネットアイドルのトップまでいたなんて…」

カイト「さあて…ピッピをけしかけて、ギター泥棒をやるうとしたのはお前だな。何でギターを盗もうとした？答えろっ！」

ピルス「集収とってください。世界のために、あのギターのエネルギーが必要なのです」

ネプギア「世界のため？」

ネプテューヌ「それがね、なんか世界滅亡の危機を回避するために、ギターとかを盗んでエネルギーを集めようとしてるんだって」

カイト「世界のため…?」

気になったカイトは、ピルスの正面に立って彼女やピッピ達の間を見る。少し様子を見て、カイトは口を開く。

カイト「聞こうか。世界はどうやって滅ぶ？」

ピルス「？」

カイト「答える。世界はどうやって滅ぶ？」

ピルス「…ずばり、エネルギー浪費による衰弱です」

カイト「何で衰弱する？具体的には？」

ピルス「え…？…それは、エネルギーが作られなくなり、そのまま世界が腐敗することです」

カイト「なら、あとどれくらいでエネルギーが尽きる？」

ピルス「…近い未来、です」

カイトはその後少し考え、目を見て言った。

カイト「…：…わかりやすいな。ネプテューヌ、こいつの言ってることは嘘だ。世界平和なんて少しも考えてねえ」

ピルス達「！！？」

カイトの言葉に怯むピルス。

ネプテューヌ「え？そうなの？」

カイト「ああ…こいつの言ってることは建前に過ぎない。本当の狙いは、自分達の繁栄だ」

ネプギア「どういうことですか…？」

カイト「簡単な話だ。こいつらが言う世界滅亡ってのはどういうものか、具体的な理論を持ってない上、答えがあまりにも曖昧すぎる。そもそも、エネルギーとはどういうものかについても例を挙げてない。それで世界滅亡を信じるなんて無理な話だろ」

ピルス「っ…！」

カイト「まあ、これだけじゃ奴が悪いって決めることはできない。だが、お前のような奴は別だ」

剣を向け、言葉を続ける。

カイト「お前の目には、別の目的が渦巻いている。それが答えだ！」
かがみ「それが、自分達の繁栄ってことね？」

カイト「その通りだ。世界を守るためとか綺麗事を言っ、いろんな世界でエネルギーを騙し取り、たまに誰にもばれないようにエネルギーとなる物も盗んでる。今こっやって追いつめられても、すぐあやつて正義面をしてやがる。そうやってこいつらは、奪ったエネルギーを全て自分達の繁栄に使ってるんだ」

ピルス「!！」

カイト「早い話……こいつは詐欺野郎だ！」

カイトはすぐに見抜いたのだ。ある人物の元で身につけた、読心術で。

ピルスは言い返せず、黙っている様子がそれを物語っている。

ピルス「…許せません……気が変わりました。貴様達はここで死になさい!！」

ピルスの怒号を合図に、まわりのピッピ達が指を振り始めた。さらに、カイト達を閉じこめるようにバリアも展開した。

ピルス「これより90秒後、その場は天雷で満ちる!逃げられはしない!」

ミリア「本性をあらわにしたね。そうやって自分の力で戦おうとしないあたり、詐欺師らしいよ」

ピルス「ふんつ、貴様達の低俗な文化や技術に触れるなど汚らわしい!私達の文化や技術は、エネルギーを上手く力にできる!エネルギーのあり方は、私が誰よりも知っている!貴様達のような浪費者などとは違うのです!」

レナ「……………うるさい……」

ピルス「あと50秒!もはやどつすることも……」

だっ! (突撃)

ずばあああああつー！！！！

姉妹の斬撃がダブルクロスし、ピルスにクリティカルヒットした。

ピルス「そ…んな……………この私がああああああ…！！？」

ちゆどがあああああああああああん！！！！！！！！

そして、爆発した。

……………

18:40

爆発によってUFOは墜落し、ピッピ達も爆発によって倒れた。ピルスにいたっては、もうボロボロになっていた。

こなた「…とりあえず、これで全部解決したね」

圭一「…ネプテューヌ…」

ネプテューヌ「…皆の技術を馬鹿にするなんて、酷いことなんだ。

…それを、こいつは…」

カイト「……………そうだな」

ネプテューヌの気持ちに、カイト達も同情している。

ミア「…で、このピッピ達はどつするの？野放しにしていたら、また迷惑行為を働くかもしれないよ」

ネプテューヌ「…理事長に預けようよ」

かがみ「どうして？」

ネプテューヌ「何だか、この子達はピルスに洗脳されてるだけのよ

うな気がするの。だとしたら……この子達も被害者だよ、きっと」
ミリア「ネプちゃん……」

ピピ達は、あくまでポケモンという子のような動物。その動物達に罪はないと思ったのだろう。

レナ「……いいよ、レナは賛成」

圭「ああ、俺もだ」

ミリア「うん、決まりだね」

話がまとまった所だが、後は……

カイト「……で、問題はどうかやって帰るかだな。だいぶ遠くまで来てしまった」

こなた「こりゃ、ライブをはじめから見に行けないね」

ネプテューヌ「……ごめん、私も迷惑かけちゃったね」

レナ「ううん、気にしないで。ネプちゃんは悪くないよ」

圭「んじゃ、とりあえず歩こうぜ」

カイト「だな」

アアアアアアア!

そんな時、空からウルトラマンの姿が現れた。

カイト「ん？あれは……ソロか!？」

降り立つと姿が変わり、カイトの言った通り、ソロだった。

ソロ「やっと見つけたぜ。お向かえに来てやったよ」

圭「ソロ!来てくれたのか!」

ソロ「全く、心配したぜ。こっちはいきなりデニーの仲間って奴から襲撃を受けて、大変だったぞ」

カイト「え！？大丈夫だったのか？」

ソロ「ああ、皆の奮闘のおかげでな。逃げられちゃったけど」

ミア「ほっ…よかった…」

ソロ「特に、レオンはすっげえ頑張ってたぜ？カイト達にも見せてやりてえくらいによ」

カイト「！レオンさんが…？」

そう言うと、ソロはすぐに言う。

ソロ「さ、もうすぐライブだよな？皆も見に行ってるし、送ってやるぜ！」

こなた「おー助かるよー！」

ミア「じゃあお願いしようかな。行こっ」

カイト「おう！」

こうして、今日も無事平和は守られたのであった。

ちなみに、ピルスはデニーの部下であったことが判明し、ピッピ達をそそのかしていたこともはっきりした。

後に、カイト達は思う。

まだまだ何かが来るはずだと。

17話「破られる詐欺」(後書き)

何故いつもシリアスになるんだろうな、俺；

次は劇場とかもやってみようかな。

18話「良心があるから」(前書き)

散歩してたカイトとミリアが、あの誠と言葉と話をします。きれいな誠仕様、誠×言葉でいきます。

18話「良心があるから」

13:00

カイトは、道路の下にある川近くの傾斜の草村に倒れて話をしていく。

その相手は、自分と同じ学生の者だ。

「そうか……カイトも、いろいろ大変だったんだな」

カイト「まあな。けど、今はこうして超次元学園の生徒として生きる。皆は、俺とミリアを受け入れてくれたんだ」

「…それはよかった。やっぱり、カイトは俺なんかと全然違うよな」
カイト「何でそう思うんだ？ 誠だって、改心して変わったんだ。全然はないんじゃないか？」

誠：伊藤誠。カイトと話している相手はその人物だ。誠もカイトと同じように、草村の傾斜で横になっている。

誠「…いや、全然違いすぎるよ。カイトもミリアも、まっすぐだし」
カイト「まっすぐ…か。けど、誠もそうやってきたんじゃないか？」
誠「そうかな…」

カイト「ああ、きつとそうさ。だって、今はもう言葉だけを見るようにして、浮気だって二度としなくなったんだ。これを変わってないなんて言えないだろ」

誠「……そうだといいな」

二人は空を見上げて思う。

誠「…俺と言葉がああ学園を出て行った後、カイト達は襲撃したん

だよな？言葉をいじめてた奴らもこらしめたのか？」

カイト「俺とミリアは見てねえけど、ビビがそいつらを見つけて半殺しにしたそうさ。トラウマも植えつけられたことだし、もう悪さやいじめなんてできないだろう」

誠「そうか…」

カイト「にしても、何であんな学園が復活したんだか…襲撃前はそう思ったもんだよ」

誠「……」

カイト「…で、世界は見てないのか？襲撃時には、ヤンナと同じくどこにもいなかったんだが…」

誠「それが、あれから全然見ないんだよ。もしかしたらって不安になつて警戒してたけど、言葉も見えてないらしい」

カイト「そうか…ま、あいつのことだ。このまま終わろうとはしないって考えて行動するのが妥当だな」

カイトは深く読んでいるような、誠は不安気味な表情で話す。

誠「……俺さ、1度エリートがつぶれる前に入学してたら、カイトにぶつ倒されてたんだよな…」

カイト「……昔のお前だったら、つぶしてたかもな」

誠「……」

カイト「自己嫌悪か？昔のことを悔やんだりしてさ」

誠「…ああ」

誠は昔、どうしようもなく救えない男だった。優柔不断で男気もなく、女に弱いダメ人間だった。

当時、ある日に誠は学園帰りにカイトとミリアの噂を聞いた。あまり聞いてはいないが、ただ弱い者いじめを許せないということだけはつきりと耳にしていた。

だが、この時の誠はまだ醜いまま、世界の友人達の工作もあつて

世界に浮気していたため興味を持つてなかった。ところがある日、言葉が公園で1人で黄昏れ泣いていた所を目撃した。知らずに少し罪悪感を持ち、泣いている所を見て放っておけなくなった誠は、言葉と話をして友達からやり直そうと決めた。その翌日、誠は言葉を気遣いながら生活をした。

するとその日、世界の裏切り、友人達のいじめ、さらに誰かに言葉をレイプするよう先生達もグルになって仕向けようと話していたことを聞いたのだ。

後に誠の心は目を覚まし、世界達を見限った。そして、言葉がこれ以上辛い思いをしないために、共に学園を退学した。

その後、言葉の前で自分を責めていた所をカイト達を通りかかったのだ。

誠はカイト達の噂を思い出し、全てを暴露してカイトに自分を痛めつけてほしいと頼んだ。しかし、カイトはそれをせずに言うべきことを言い、励まし、あの学園をつぶすことを約束した。そして二人は、言葉をいつまでも守ってあげてほしいと告げて去った。

これが誠達の、エリート学園復活を知ったばかりのカイト達との出会いだ。

カイト「……………大丈夫だよ」

誠「…?」

カイトは暗くなる誠に言う。

カイト「言つたる?お前はもう昔とは違う…大切なのはこれからだつて。そう思うのなら、これからの行動で体現すればいいんだ」

誠「カイト…」

カイト「それに、もし誠が人として悪いことをしようとしたら、ちゃんと俺がぶん殴ってでも止めてやるから安心しなよ」

笑顔でカイトはそう言った。その言葉に、誠は少しずつ元気になるのだった。

「わっ!」「」

カイト・誠「うわっ!?!」

と、その時カイトと誠の顔近くに、ミリアと桂言葉がびっくりさせるように顔をひよこつと出してきた。

誠「び、びっくりしたなあ…」

カイト「二人共、おどかさないでくれよ…」

ミリア「えへへ…」

言葉「ふふっ…ごめんなさい。ちょっとやってみたかったです」

びっくりしたが、まんざらでもないように微笑んでカイト達は起き上がった。

カイト「そっちも話は終わったみたいだな」

ミリア「うん、ちょうどよかったね」

今、散歩の途中に4人が再会したので、男と女に分かれて少し話をしていたのだ。

言葉「誠君、これからのことなんですけど、超次元学園に入学しませんか?」

誠「え?」

言葉「私、超次元学園に通えばいろいろとやり直せる気がするんで

す。改めて、誠君とも付き合っていたいから…」

言葉は、誠と共に1からやり直すために入学しようと言った。前の暗い思い出を埋めて、明るい思い出でいっぱいになりたい。それが願いだ。

誠「…うん、言葉がそうしたいなら、俺も賛成するよ。でも、俺が入学できるかどうか…」

カイト「大丈夫だってっ。俺が理事長に土下座してでも頼むし、皆にもちゃんと話すよ。きつとわかってくれるさ。お前達の良心が生き続ける限り、俺達は味方だ」

ミリア「そうだよ。だから、これからは皆と一緒に生きようよ。ね？」

そう言うカイトとミリアは、喜んで受け入れる様子だ。

誠「…ありがとう二人共。なら、俺も入学しようかな。その方が、言葉も幸せになれるだろうし」

言葉「誠君…（笑顔）」

カイト「よし、決まりだな。んじゃ、理事長んところに行くとしようか！」

カイト達は立ち上がり、超次元学園へと歩き出すのであった。

良心がある誠と、明るさを取り戻している言葉。

きつと二人も受け入れてくれる場所へ、二人は歩く…

18話「良心があるから」(後書き)

ルートによっては、誠は本当はいい人なんです。俺はそんな誠も好きですよ。

予告

マジカルハートフラグ

世界もやっつけろ!?

19話「魔法少女だって」(前書き)

マジカルハート編いきます。まずはプロローグから

19話「魔法少女だって」

キンコーンカーンコーン！

13:00

ネプ姉妹は、学園に毎日置かれている新聞を読んでおり、ある記事に目を向けている。

ネプギア「これって…」

ネプテューヌ「うーん…なんか大変なことが起きるのかな」

それを見かけたカイト達は、気になって声をかけた。

カイト「どうした？何か気になる記事でもあったか？」

ネプギア「あ、はい。これなんですけど…」

新聞の表紙を見てみると、こんな記事が載せられている。

『いよいよ来る！魔法少女大戦！』

かがみ「魔法少女大戦？」

レナ「何かのバトル大会かな？かな？」

はじめ、カイト達はこれが何なのかよくわからなかった。わかって、大会みたいなものかということぐらいだ。

ネプテューヌ「何でも、たくさん魔法少女達が戦って、勝った人は願いを叶えることができるんだって」

誠「どんな願いでもか？」

言葉「まあ…そんなにすごい大会なんでしょうか？」

ネプギア「優勝すれば、どんな願いも叶うっていう程ですからね…
きつとすごいんでしょう」

大会優勝者への報酬は、あらゆる願いを1つ叶える。それを聞くと、
普通はすごく思える。

カイト「でも、これ本当なんだろうか？主催者は誰なんだ？」

こなた「ん…ドクターSが載ってるね」

ミリア「聞かない名前だね…もしかして、罨？」

圭「わかんねえな…」

ドクターSという名前を聞いたことがないカイト達。

かがみ「で、うちの学園から出る人っているのかしら？ここにはい
ろんな人がいるんだし、誰か興味を持つてるんじゃない？」

言葉「多分、いるかもしれませぬね」

カイト「魔法少女なあ…ネプテューヌは、魔法少女をやってみた
いって気はないのか？」

ネプテューヌ「はじめはやってみたいなーって思ってたけど、なの
はさん達と出会ってからはそこまで思わなくなったかな」

ミリア「あ…なのはさん達も魔法少女だったっけ」

こなた「というより、魔導士で定着してきてるけどね」

なのは、フェイトは魔法少女の代表格というイメージがあるが、今
の本人達にとって恥ずかしがるだろう。

カイト「魔法少女大会か…調べてみるか？」

こなた「別にいいけど、それならまずどうすんの？」

圭一「今から調べても微妙な所だ…というか、今知ったばかりだからな。しかも、開催日が明日だ」
カイト「明日まで待つしかないか…」

今からだと流石に厳しい上に、情報が少なすぎる。カイト達は、ひとまず明日まで待つことにしたのだった。

……

15:00

銀時「魔法少女大戦？」

カイト達は、この話を他の仲間達にも話すことにした。

カイト「俺達もさっき知ったばかりで、よくわからないんだ。何か心当たりはないか？」

新八「うーん…あまり聞かないね」

誠「そつか…：… やっぱり、なのはさん達に聞いた方がいいんじゃないか？」

圭一「そうだな…それがいいかもな。やっぱり、なのはさん達のように魔法特化の人中心に聞いていくか」

銀時「何だ？話して参加させるのか？」

カイト「いや、それはしないけど…なんか気になってさ」

銀時「まあそういうのは好きにすりゃいいさ。俺には無縁な話だ」

神楽「何アルか？魔法少女同士で殴り合いでもするアルか？」

銀時「そうなんじゃねえか？最近の魔法少女は、わけわからねえ奴が増えてきてるしな。なんせババアでも魔法少女って呼ばれるこのご時世だ。なのはとフェイトだっていい年してるのに魔法少女って「いい年して…何？」…：…！！？（青）」

後ろには、なのはさん達本人がいました。

なのは「いい年…かぁ……………いい年……………ふふふ、ふふふふふふ
…」
フェイト「…ふふふふふ…」
カイト達「っ！！？（震）」

さっきの発言を聞いたのか、ものすごい怒気を放射している。怒りを、笑顔に込めて。

なのは「…カイト君？話なら後で聞いてあげるから、今は離れてい
てくれないかな？ちよつと3人きりになりたいの」
カイト「わ…わかった、じゃあ後で…」

言う通りにしよう。そう即断したカイト達は、すぐにその場から離
れた。

銀時「…あ、あのー…何か…？」
なのは「大したことじゃないよ？ただ、いい年って何なのかなあー
って気になってね…」
フェイト「私にも、詳しくいいかな…？」

こつ…こつ…（ゆっくり近付く）

銀時「い、いいい…いや…べ、別に悪い意味じゃあないですぜ…？
つつ、つまり…お、大人だつてことをだな…」
なのは「大人…かぁ……………」

銀時「そ、そうそうそうっ！だから、ほら…だから、べべ、別
に…」

今日のアイリからのお言葉

アイリ「皆様、女性の年齢をお聞ききするとはもちろん、それに嫌に触れることを言うことはNGですので、ご注意くださいませ。どうしても触れるのであれば、せめて若く見てあげたりするようにしましょう。では、続きもごゆっくりしてください」

……

ビビ「魔法少女大戦？それってつまり、魔法少女だらけってこと？」
ミリア「そういうことになるね。何かありそうな気がするけど」
ビビ「……魔法少女大戦……」

ビビマインド

- 1・魔法少女大戦に出る
 - 2・魔法少女とたくさん出会う
 - 3・魔法少女達に快樂を与える
 - 4・魔法少女達が自分を愛するようになる
- ラスト・百合ハーレムうはうは

ビビ「……キターーーーーー!!!!!!」(*
カイト「うおっ、どうしたおい!?!」
ビビ「行く!絶対出場する!!私の求めるものが、そこにあるわ!」!

ビビはすっかり出場する気になったようだ。というか、魔法少女と聞いて黙っていられるビビではあるまい。

レナ「ビビちゃん、目が輝いてるね……」

圭「百合ハーレムに生きる奴なんだ。わかりやすいぜ……」

カイト「なるほどな……」

とりあえず、ビビも協力することにはなった。しばらく話をして、カイト達は次へ向かった。

ただ、その前に……

レナ「……あ、ところでビビちゃん?わかってるとは思っけど……」

ビビ「ん?なあにレナちゃん?」

レナは、ビビの耳元でこつこつ言う。

レナ「……強姦やってたら……レナ、怒っちゃうからね……」

ビビ「っ!?!?!?!?!」

魅惑の声でささやいた後、レナはにこにこことカイト達の所へ戻った。顔色が青く、ガクブルするビビを残して。

……

で、戻って……

なのフェイ「魔法少女大戦？」

ちよっとした時間を終えた頃に、なのは達にも話をしてみた。

ミリア「はい、それで何か心当たりはありませんか？」

なのは「うん…ないなあ。私も初めて聞いたよ」

フェイト「私も、そういう話はあまり聞いてないね」

レナ「そうですか…」

どうやら、なのは達もこの手の話については聞いてないようだ。

なのは「…あ、ドクターSって言えば、ある魔法少女の話は聞いたことがあるよ」

こなた「何ですかそれ？」

なのは「ドクターSは、何でもどこかで街全体を巻き込むほどの悪さをしてるらしくて、その魔法少女…マジカルハートっていう娘がそれを阻止しながら、ドクターSと戦ってるって噂だよ。どんな娘なのかはわからないけど…」

圭一「ドクターSが悪さ？じゃあ魔法少女大戦って、畏かもしれないんじゃない？」

誠「言われてみれば…確かに、怪しい気がするな」

フェイト「もし調べるつもりなら、私達も手伝うよ。私達も、それについて確めたいことがあるから」

なのは「うん、そうしょっか」

カイト「わかった、助かるよ」

なのは達も協力してくれることになった。これで、カイト達のパーティーは固まってきた。

そうして、カイト達は当日を待つのであった。

……

その日の夜遅く……

こつ……こつ……

長い黒髪にリボンをつけ、セーラーに近い服を着ている少女が、月明かりに照らされる港で月を見ていた。

その少女はある人物を想い、口にした。

何かを心に秘めて。

「……まどか……」

19話「魔法少女だって」（後書き）

ここで話をしておきますが、うちではなのは・フェイトを銀時ラバ
ーズから外し、いずれノクターンノベルズで

『なのは×フェイト』

『ネプテューヌ×ネプギア』

の、百合を書くことにしました。
書いたらまた伝えます。

20話「ドクターSを追え」(前書き)

ドクターS現る。あと邪王さんごめんなさい！なんかもつそっくりなネタだったんで！

20話「ドクターSを追え」

翌日

ピンポンパンポーン

『マゾチック・ザ・ハードが、臨時ニュースをお伝えいたします。学園近くで何者かが民間人を巻き込む騒動を起こしてるそうで、しかも民間人の多くはガスらしきものによって、まるで邪王様が考えたHーウイルスに感染したようになってます。このままでは18禁モード全開の展開になってしまいますので、生徒全員で犯人をぶちめしてください。あ、それと…誰か私をおk』

ぷっん。

全員「……………」

カイト「……………なあ、まじで殴りに行っていいか？」

銀時「おい、俺にも殴らせる」

かがみ「だからさ、もうぶっ刺してもいいんじゃない？」

ノワール「突きじゃ卑猥になるだけだから、斬るにしましょう」

ユニ「ていうか燃やしていいでしょ？」

カイト達はやる気失せるこの放送に、クレームする気満々だ。

ネプギア「そ、それより！また街で事件が起きたのなら、すぐに行かないと！」

ミリア「民間人がウイルスに感染して変貌…？何をさせるつもりなの？」

こなた「なんか、Hーウイルスとか言ってたよね。とにかくやばい

ってことなんじゃない？」

かがみ「とにかく言ってる場合じゃないわ！すぐに出るわよー！」

事件を食い止めるために、カイト達はすぐに外へ出ようとする。

その時…

圭「ん！？おい、何だありゃ！？」

誠「向こうから何か飛んで来るぞ！？」

ミリア「あれは…特大ミサイル！？しかもあれって…！」

カイト「学園全体にいくか…っ！ミリア…！」

ミリア「うんっ、みんな窓からすぐに逃げて…！」

ちゅどがあああああああん…！！！！！！

………

超次元学園にミサイルが直撃し、大爆発を起こした。爆風は汚れたような緑色をしており、まるでガスのようなだった。学園全体はガスに包まれ、もくもくと広がる。

ガスから何とか逃げ出すように外出したのは、まずはカイト達だけだった。

メンバー

カイト・ミリア

圭・レナ

こなた・かがみ

誠・言葉

ネプテューヌ・ネプギア

なのは・フェイト

アイエフ・コンパ

学園入口

ずむむむむーっ！

カイト「皆、大丈夫か!？」

言葉「はい、何とか!？」

ネプテューヌ「ネプギア、あいちゃん、コンパ、体は何ともない!？」

ネプギア「う、うん!？」

コンパ「私も平気ですっ」

アイエフ「けほっ、けほっ…何なのよ、もうっ!？」

フェイト「いるのは私達だけ…他の皆は?？」

ミリア「まだ中にいるのかもしれない…」

なのは「そんな…!じゃあ、あのガスがウイルスのものだとしたら、皆は…!?？」

緑のガスをHーウイルスだと判断した皆は、中にまだ仲間がいたために不安になる。

カイト「それなら大丈夫だ。脱出する直後に、加護を皆に与えた。学園全体にいったかはわからないし、即座に展開したものだから、すぐに効果が出ないかもしれないが…」

こなた「どゆこと?？」

ミリア「話すと長くなるけど、今はあのウイルス感染を受けつけなかつたよ。全体に付加されたかはわからないから、感染してしまつた人が何人かいるかもしれないけど、加護が宿つた人が感染者に何

か行動をすれば、ウイルスはすぐに消滅するはずだよ」
コンパ「そうなんですか？じゃあ、あいちゃんが少しガスを吸ってしまっただけですけど……」

その事実にも、全体はアイエフを見る。しかし、アイエフ本人に変化は見られない。

アイエフ「あ……ほんと、何ともないわ。これは、私にも加護が宿ってるってこと？」

カイト「間違いない。これならアイエフも大丈夫だ」

圭「そうか。じゃあ、俺達にガスは通用しなくなっただってことだな？」

カイト「ああ、皆の心が生きてる限り、勝手に破られることはない」

カイトとミリアの説明に、全員はひとまず安心した。カイト達の加護について詳しくはわからないが、今は知らなくていい話だ。

誠「で、これからどうする？皆を助けに行った方がよくないか？」

カイト「そうしたい所だが、事態が事態だ。すぐにガスを何とかしに行った方がいい」

かがみ「…そうね、あんなガスに目茶苦茶にされる皆じゃないし、このまま行きましよう。加護もあるんだから、心配はいらないわよ」
なのは「なら急ごう！これ以上被害が出る前に、何としても止めに行かなきゃ！」

ミリア「はいっ！」

カイト「皆、行くぜ！」

話がまとまった所で、カイト達は元凶を探しに走って行った。

……

たっ たっ たっ ……！

感染者を避けるように、街を疾走するカイト達。やはり、感染者は非常に多いため、対策が面倒だ。しかも、すぐにウイルスを滅菌した所で、H1N1ウイルスによる効果で犯されてしまい、また感染するはめになる。これではかえって心に大きな傷を負うだけである。それならば、ガスを止めてから滅菌していった方がいいだろう。

カイト「こいつはひでえな！まだレイプされた人がいないが、このままじゃいずれ出てしまうぞ！」

圭「くそっ、犯人はどこにいやがるんだ!？」

かがみ「ていうか、さっきのミサイルといい、ガスをばらまいてる奴もどこにいるのよ！」

こなた「ガスをばらまくから目立つと思うけど、ううむ……」

その時、あちこちを探すカイト達に、何者かが襲撃してきた。

「見つけた！」

「獲物がいたー！」

フエイト「！誰!？」

ネプテューヌ「上から来るよっ、気をつけて!！」

カイト「そこかあああああっ!!!!!！」

どばばばばっ!!!!!！」

カイトは、すぐに上から奇襲して来る者達を木刀で薙き払ってふつとばした。

どさささっ！

攻撃を受けて落ちた者達を見ると、不思議っぽくて可愛い姿をしていた。

圭「何なんだこいつらは？」

こなた「んー……これって魔法少女じゃない？それっぽい姿をしているもん」

ミリア「どうして魔法少女が……？」「邪魔、そこにいた」

カイト達「！？」

上からの声を聞いたカイト達。

そこには黒いマントっぽい大きな服を着て、口から上しか顔を出していない少女がいた。

「ガスが効かず、魔法少女の奇襲を避け、さらに1撃でたたき伏せるとは……やる」

カイト「てめえ、何者だ！！」

「私はドクターS。世界を支配する者だ。しるぶふれー」

ミリア「ドクターS!？」

圭「どういうことだ!？何で、魔法少女大戦主催者がここにいるんだ!？」

こなた「……なるほど、昨日の話はフラグだったか」

レナ「どういうこと？」

こなた「まず魔法少女大戦はフェイク……つまり、魔法少女を集めるための罠だったんだよ」

誠「何だつて!？」

こなた「で、集まった魔法少女を洗脳して、戦力をつけた所でこの騒動を起こしたつて所だね。まあ早い話、あいつが黒幕だよ」

かがみ「そういうことだったのね。予感はしてたけど……」

ドクターS「いかにも。よくわかったな」
こなた「ま、ゲームやりまくってますから」
かがみ「いやいや……」

ゲームで養ったといわんばかりのこなたであった。

カイト「魔法少女を洗脳しやがるとは……目的は何だ!!」

ドクターS「知れたこと。魔法少女の潜在能力を引き出し、我が部下として変化させる。そしてこの街を足がかりとし、全世界を我が理想郷とすること」

ネプテューヌ「ありきたりな目的だね。でも、世界征服なんてやらせないよ!!」

ミリア「今すぐに魔法少女達の洗脳を解いて!」

ドクターS「そうはいかない」

しゅばばば!

ドクターSの後ろから、別の魔法少女が二人現れた。

ドクターS「この私の邪魔はさせない。お前達、やれ」

そう言った後、ドクターSはテレポートで逃げて行った。

カイト「待ちやがれ!!」

すぐに追おうとするが、二人の魔法少女が阻む。

「逃がさない……」

「ふふっ、いい男……」

ミリア「……?この娘達、様子がおかしいよ!」

誠「！おいつ、さつき殴った魔法少女達が起き上がったぞ！？しかもこつちも様子がおかしい！」

なんと、カイトが薙ぎ払った魔法少女達が立ち上がった。誠が言うように、こちらにも異様な目をしている。

レナ「ねえ、これってまさか…この魔法少女達も感染してるんじゃないかな、かな!？」

その様子が民間人達のものに似ており、感染してるのではないかとレナは言う。

カイト「…どうやらそう見て間違いないかもな。しかも、ただ殴るとかするだけじゃ解けねえらしい。魔法少女の潜在能力を引き出すって言うてたが、こんなことして何になるってんだよ！」

ネプギア「わかりません…けど、このままにはできません！」

ミリア「でもすぐに治療しても、また感染してしまう可能性が高いよ…」

アイエフ「だったら、こいつらに構ってられないわ。無視して追いかけるわよ！」

コンパ「でも、この人達はこのまま通してくれそうにないですうつなのは「だったら…」」

ビシユウウウ…！（チャージ）

なのは「ちよつとの攻撃じゃ治らないことだし、動けなくするしかないね！」

なのはが攻撃の準備に入る。魔力を高め、レイジングハートを地面に向ける。

フェイト「なのは、倒さないように気を配って！」
なのは「わかってる、ちゃんと手加減はするよ！」

チャージし終わり、それと同時にいくつものビットがなのはのまわりに現れる。

なのは「バインドワイヤー・マルチプル!!!」

どおおおおおん!!!

地面に魔力を発射すると、ビットはバインドするワイヤー役となつて、ビームや追尾弾を撃つて牽制しながら魔法少女達に絡みついて拘束していく。さらに、他の位置からもワイヤービットが飛び出し、そうしてまわりに近付くことをさせない蛇達の布陣を作った。

ネプテューヌ「おおー！何この魔法！？すっごーいっ！」

なのは「よし…うまくいってるね。レーティアさん達からアドバイスもらつてよかった」

こなた「え…それってどんなアドバイスで…?」

かがみ「しかもレーティアさん達から…?」

この魔誠、レーティア達のアドバイスを元に編み出したらしい。

圭「話は後だ！このまま追いかけるぞ！」

レナ「うんっ！」

ドクターSを追うべく、カイト達はそのままつつ走って行く。

……

その頃

たっ たっ たっ ……!

「…どこかに必ずいる…! キュウベエ……今度こそ…!」

黒い長髪の少女が走る。

何かのために。

「まどか…!」

20話「ドクターSを追え」(後書き)

ネタが少し足りない…;

本家であった、あの魔法少女のふりしたばーさんを殴るネタならあるんですが…

理事長お助けー!

カイト「こいつは…。」

21話「マジカルハート乱入」(前書き)

マジカルハート編中編。本家リクでダماغモ要塞戦、そしてマジカルハート出現。

21話「マジカルハート乱入」

あらすじ

学園に謎のミサイルが直撃し、人を欲に狂わせるウイルスがばらまかれた。だが、カイトとミリアの対策により、感染の危機は回避はされた。後にカイト達は、ドクターSの野望を阻止するために走っていた。

……

たっ たっ たっ ……!

圭「くそっ、どこに逃げやがった!」

カイト「まだ遠くには逃げてないはずだ!」

現在、なのはのバインドワイヤーによる布陣で、追跡してくる魔法少女を拘束して追えないようにしながら走っているが、まだドクタースの姿が見当たらない。

誠「ん?あれ、言葉は!?!」

ミリア「え、いない!?!」

カイト「何!?!はぐれたのか!?!」

ところが、ふと気がつくと言葉の姿がない。どうしたのだろうか?

ネプギア「まさか、魔法少女達に捕まってしまったんじゃない?!?!」
レナ「探しに行かなきゃ!」

「じじじじじじ……」

こなた「ん？また上から何か来るよ！」

かがみ「え！？こんな時に…もうっ、何なのよ！」

何かの影が上からでき、空を見ると要塞らしき物が浮いている。

よく見ると、その要塞にはボールっぽいような生き物がたくさんくっついてる。

カイト「要塞か！？」

圭「何なんだ一体！？」

こなた「あれは…ダマグモか！」

ミリア「知ってるの？」

こなた「知ってるも何も、あれはピクミンに出る敵だよ。普通、ダマグモは両端に弱点があるから、そこをたたけばOKなんだけど、なんか新種の奴もいるっぽいね」

生き物はダマグモというらしく、ピクミンというゲームに出ているとこなたは言った。

ただ、新種らしき奴もいるようで、軍人っぽい外見をしたダマグモのダマグモアーミー、さらにツメが生えているダマグモが3体。きつと後者がボスだろう。

かがみ「あのゲームの奴らが…？これも、ドクターSが用意したのかしら？」

こなた「そう考えてもいいかもね」

カイト「何でもいい！そろそろ攻撃して来るぞ！」

圭「なのはさんとフェイトさんは魔法少女を食い止め続けてる！あまり長引かせるわけにはいかねえ！」

誠「くっ…言葉を探さなきゃいけないのに！（ロケットランチャー

用意)」

ミリア「わかってる！だからこそ、速攻で倒すよ！」

カイト達が構える頃には、要塞からダماغモが急降下して来た。

カイト達はこれをよけた後、こなたから攻撃を仕掛ける。

こなた「特徴、弱点はすでに把握済みだからね。あっさり斬らせてもらいやす!!！」

しゅばばばばはっ!!!!

ピクミンをクリア済みのこなたに、ゲームに出ていたダماغモだけは瞬殺される。

ダماغモキヤノンやおまけのヒョイグモ、ゾウノアシも、こなたのアドバイスや知識があればたやすく倒される。さらに、カイト達の強攻撃などで足にもダメージを与えるおかげで、動きも止めやすかった。

かがみ「さて、問題はこいつらだけど…」

こなた「まずは普通に攻撃してみるべし！うりゃあああっ!!！」

まず、こなたがダماغモアーミーに弱点めがけて攻撃しようとしてみる。

チャキ!!!

こなた「なぬっ!?!」

レナ「はうっ!?!」

ズダダダダダダ!!!!

しかし、アーミーは弱点の両端からガトリングガンを出し、さらにミサイルも追加で撃ってきた。対してこなたは巧みに聖剣の刃で弾き、ミサイルはレナが斬って破壊する。

アイエフ「弱点にガトリングガン装備!? 対策してるってわけね」
ミリア「軍人らしさの表れみたいだね……でも! (突撃)」
ネプテューヌ「それごと斬っちゃえば問題ないよね! (突撃)」

ミリアとネプテューヌが突撃し、ガトリングをよけながらアーミーに接近する。

ミリア「旋風昇竜! ! !」

ネプテューヌ「そおーれっ! ! ! (回転斬り)」

ずばばばばばば! ! ! !

二人の範囲技がダメージモアーミー達を巻き込み、ガトリングガンもろとも斬り捨てた。いかに武器で弱点をカバーしても、武器が弱くてはダメなのだ。

ズガアアアアツ! ! ! !

ネプギア「きゃっ! ? (よけ)」

カイト「! 地面に綺麗な傷が入った…ツメの攻撃力は高いか!」

残ったツメのあるダメージモ、ダメージキラーが、ツメ攻撃をしてきた。ネプギアがよけた後、地面に突き立てられたことで綺麗な傷ができた。

ツメには、威力を1点に集中させているのだろう。
そして要塞からは、次々と新しいダメージが現れ続けている。中にはアーミーもあり、きりがなことがわかった。

圭「くっ、あの要塞をぶつつぶさなきや、こいつらは増え続けるのか！（スマツシユしまくり）」
ズガアアアア！！！（ツメ）

レナ（よけ）「時間もないし……よし！誰か、レナを要塞の所まで飛ばせる！？」

ミリア「要塞へ？なら、誠君が撃つ弾丸に乗ればいけるかもしれない。誠君、頼める！？」

誠「え！？わ、わかった！」

レナとミリアの指示を受け、誠はすぐに要塞へ狙いをさだめる。

誠「いくぞ、発射つ！！！」

どおおおおん！！！！

ロケット弾を撃つと、レナがその弾に乗って要塞へ向かって行った。要塞へ直撃する直前、レナはさらに空高く飛んだ。鉦を振り上げた後……

レナ「てやあああああああつ！！！！！」

ズガアアアアアアツ！！！！

要塞を真つ二つにたたき斬った。結果、中や要塞の裏にいるダメージももろとも大爆発と共に壊滅した。

コンパ「はいっ！」

コンパから、ある葉が入ったグラスを複数本受け取る。そしてアイエフが突撃。

それに応じて、ダマグモキラーがツメでアイエフを切ろうとするが、アイエフは全て華麗によける。ダマグモキラー達が一カ所に集ってきた所で…

アイエフ「いくわよっ、受け取りなさい！！！」

ぶん、ずばばばばはっ！！！！

アイエフはグラスを全体にばらまき、ダガーで全部割りながら退いた。

じゅっううううう！！

液体がツメにつくと、なんとツメが溶けだしたのだ。固い皮膚も、これで意味を成さなくなった。

カイト「これは…酸か！」

アイエフ「そうよ。ご自慢のツメも、溶けてしまったら使い物にならないわ。力で割るなり折りに行くより、こっちの方が楽でしょ？」

ミリア「成る程、その手があつたね！」

ネプテューヌ「ナイスあいちゃんっ、こんぱ！」

ネプギア「後はやっつけるだけです！」

だっ！（突撃）

ネプギア「これでおしまいです！！！」

ネプテューヌ「斬り捨て、ごめんー!!」

ずばばばばばばばーっ!!!!!!

ただのダマグモ同然になったダマグモキラー達は、他のダマグモもろとも斬り捨てられたのだった。

圭「よっしやあー!!」

カイト「よし、片付いたな!」

レナを降ろした圭が腕をビシツと前に出し、カイトも一息ついた。ちょうど、なのはとフェイトも戻って来た。

なのは「皆ー、こつちも魔法少女達を食い止めきつたよー!」

ミリア「本当ですか!?よかった…!」

どうやら、なのは達も追手が来なくなるようにしてくれたようだ。ひとまず、事態は少し良くなっただろう。

フェイト「これで魔法少女達の追撃はできなくなったはず。後は、ドクターSを探すだけなんだけど…」

こなた「どこにいるか、ですよね」

ミリア「…!近い…!向こうにいるよ!」

カイト「気配を察知したか!行くぞ!」

カイト達はすぐに走り出した。

……

カイト「ドクターSー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ドクターS「！」

建物の上にいるドクターSを発見、さらに近くに巨大な人らしき奴もいた。姿は何やら誠っぽい感じがするが、顔はよく見えないのでよくわからない。その巨人は、ガスをばらまく機械を手にしている。

誠「あれは!？」

圭「ガスをばらまいてる奴は、あいつだったんだな！」

ネプテューヌ「ドクターS!もう逃がさないよ！」

ネプギア「ガスも私達には通じません!貴方の野望もここまでです!」

ドクターS「…魔法少女をも止めるとは……おのれ…」

追いつめられたように愚痴るドクターS。だが、まだあきらめてはいない。

ドクターS「…だが、まだウイルス感染者達がいる」

カイト「！」

ふとまわりを見ると、八方からウイルス感染者の住民達が遠くから接近して来ていた。おそらく全員いると見て間違いない。

ミリア「やっぱり逃げられないってわけだね…」

なのは「だったらバインドワイヤーで拘束すればいいけど、魔力が持つかどうか…」

カイト「それならミリアにサポートさせるから、心配はいらない。俺もできることをやる」

圭「だが、難しいんだろ?…1発殴っただけで元に戻るんだ。まとめてやらなきゃ、後がまずいことになりかねない」

誠「言葉…!」

カイト「皆、抜かるなよ！」

構えるカイト達だったが、その時だった。

「マジカル脳洗淨ー！」

ぱあー！ー！

全員「!？」

突然、街全体に広がる魔力のオーラが発生。すると、感染者達からウイルスが浄化されていき、次々と倒れて行った。

ミリア「何…？」

なのは「魔力…？」

カイト「これは一体…？」

「ドクターS、そこまだけだよ！」

全員「!!！」

声が出た方へ向くと、別の建物の上にある少女がいた。ピンクのりボンやドレスを着ている。

「目、肩、お尻っ、マジカル注入！マジカルハートこころちゃん、ここに参上！」

可愛いポーズで名乗り、登場したことを伝えた。

こなた「あれが…！」

誠「マジカルハート…?」
レナ「こころちゃん…?」

カイト達は少し啞然としていたが、彼女がマジカルハートであることをすぐに認識した。

ドクターS「やはり来たか…マジカルハート」

マジカルハート「また悪さをしてたんだね！皆迷惑してるんだから、もうやめてよ！」

ドクターS「悪さ…?いいえ、これは未来のために必要なこと」

話の途中、ドクターSの部下であろう黒マントの男達が互いの後ろに現れた。

ドクターS「この世界は愛に飢え、そして愛は尽きかけている。その証拠に、人々の恋愛は2人によるものしか存在が多くない。それではいずれ滅亡する…愛を増大させるには、一夫多婦をはじめとする複数にするしかない」

マジカルハート「…??」

ドクターS「一夫多婦を主流にすれば、愛は今よりも大きく広がる。百合も充分。世界は救われる。だからこそ、私はそれを実現するために世界を手にする」

マジカルハート「…あーもうっ、わけのわからないこと言っつて煙にまこうとしてる！とりあえず攻撃！」

こなた・かがみ「アップパー派か!!?」

わからないことは気にしないらしい。

マジカルハート「マジカル引力光線!!」

「おおー！ー！ー！ー！ー！ー！」

すると、田中はさらに巨大化して30mほどの大きさになった。

レナ「はうつ！？大きくなつたよ！？」

田中「ゼアツ！！」

圭「しかもウルトラマン化！！？」

マジカルハート「わああ、すつごく大きくなつた！？」

ドクターS「さあ、覚悟するがいい。しるぶふれー」

果たしてどんな戦いになるのか？

続くつたら続く

21話「マジカルハート乱入」(後書き)

次で終わりにしますが、心ちゃんを仲間に入れてもいいかな？

向こうでもネタになるかはわかりませんが…

22話「ドクターSの野望」(前書き)

マジカルハート編決着です。で、いつものシリアスもあります。

22話「ドクターSの野望」

あらすじ

ついにドクターSに追いついたカイト達。さらに、マジカルハート
こころも登場。ドクターSは、巨大化した巨人田中で対抗する。戦
いはクライマックスへ入る。

……

田中「ゼアッ!!」

先制攻撃をしたのは田中だった。両腕をL字にクロスさせて、光線
を出してきた。

こなた「って、戦法もウルトラマン!!?」

田中はウルトラマンが好きなのだろうか？

ちゅどがああああああん!!!

誠「うおわっ!?!」

カイト「威力がでかすぎる!?!これじゃ街を数分で破壊しかねない
ぞ!」

ミリア「でも、相手の身体が大きすぎるよ。とにかく、ボク達も上
に登らなきゃ!」

圭「!?!?また攻撃してくるぞ!?!」

田中「ゼアッ!?!?!」

ずぎゅつづつづん！！！！

田中はあちこちに光線を撃ち、街の建物を破壊していく。このままでは被害は拡大し、住民達も危険にさらされる。

カイト「時間がねえ！ミリアー！！」

ミリア「うんっ！レビテトフィールド！！」

ミリアは魔法で陣を展開し、全員の体を軽くした。

レナ「はう…？体が軽くなったよ」

ミリア「そのまま建物の上へ飛んで行って！できるだけ巨人に近づけるように！！」

ネプギア「はい！！」

ミリアの魔法によって体が軽くなり、ミリアの指示通りジャンプや壁走りを駆使しながら、全員建物の上へ昇っていく。

一方、マジカルハートも苦戦していた。

マジカルハート「やめて！街を壊さないで！！」

光線と崩れた建物の瓦礫をよけながら、ビームなどの魔法を駆使して止めにかかるが、なかなか状況はよくなるらない。田中はひたすら攻撃と破壊を繰り返す。

だが、それもいつまでも続かなかった。

ミリア「！？マジカルハートちゃん、危ない！！」

マジカルハート「え…！？」

田中「ゼアっ！！！！」

ちゅどがあああああん！！！！

マジカルハート「きゃああああああつ！！！！」

カイト「しまった!？」

誠「まずい！落ちるぞ！！」

圭「誠！！」

カイト達が気づくも、遅かった。

光線が直撃し、撃ち落とされたマジカルハートが道路へ落下していく。それを見た誠は、すぐに助けに降りて行った。全速力で、受け止めに走る。

誠「マジカルハートおおつ！！！！」

がばっ！

結果、何とか地面へ落下することは避けられた。誠はマジカルハートを受け止め、無事に助けられた。

マジカルハート「ん…あ、お兄ちゃん！」

誠「え？」

しかし、その直後に瓦礫が誠とマジカルハートの頭上が落ちてきていた。

誠・マジカルハート「!？」

カイト「させるかああああ！！！！」

カイトが瓦礫を斬って助けようと、全速力で二人の元に駆ける。間に合うか、間に合わないか、緊迫するその時……

どがあああああん！！！！

圭一「誠おおおつ！！！！」

瓦礫が落下したのが見えて、圭一が叫ぶ。だが、それで全ては決ま
つてない。

ばあああああ…ずがあああん！！！！

なんと、瓦礫が光と共に破壊され、そこには無事だった誠とマジカ
ルハート、そしてもう一人の少女の姿があった。

ミリア「あれは…！！？」

ネプテューヌ「誰！？」

その少女は、黒色の魔女らしき服装をしていて、しかもグラマラス
な体格をしている。特に、スカートあたり（特にパンチラ）と胸を
強調している。

え？どんな風にかつて？原作を参照すべし。

「…間に合つてよかった…」

すたっ！（着地）

カイト「お前は…？」

「…仮・マジカルワード」

誠「マジカルワード…？」

ネプテューヌ「ていうか、仮なんだ…」

マジカルワード、そう名乗った魔法少女は立ち上がる。

マジカルワード「マジカルハート、助けに来ました」

マジカルハート「あ、ありがとう！」

マジカルワード「街を混乱に陥れ、さらにマジカルハートをいじめる貴方の暴挙を許すわけにはいきません。覚悟していただきます」
ドクターS「なるほど、新手的敵というわけね。いいわ、相手になつてあげる」

田中「ゼアっ！ー！！」

田中がマジカルワードに光線を発射する。

ずどおおおおおん！！！！

しかし、マジカルワードは右手を前にかざしてバリアを展開し、光線をたやすく防御した。

コンパ「わあー！あの人、すごいです！」

なのは「あの光線をいとも簡単に防御した…！？」

フェイト「あの娘も、魔法少女…？」

バリアと光線が消え、おさまった後にマジカルワードが声をかける。

マジカルワード「大丈夫ですか？伊藤誠、カイト・ネイラード」

カイト「え、俺達を知ってるのか？」

マジカルワード「ワードは何でも知っている」

カイト・誠「は、はあ…。」

左手の指を一本立てながら言うワードに、カイト達は少し啞然とす

る。

マジカルワード「貴方達が街を守ろうと戦い、さらにマジカルハートを助けてくれたおかげで、ここに来ることができました」

カイト「俺達が…？」

マジカルワード「マジカルハートを助けてくれて、ありがとう」

誠「あ、いえ…」

まだ話を把握しきれてないカイト達だったが、ひとまずこれまでの戦いのおかげでここに参上できたそうだ。いずれにしても、マジカルハートを助けたので結果オーライか。

マジカルワード「さあ、マジカルハート、合体しましょう！」

マジカルハート「え？そんなことできるの？」

マジカルワード「私達が二人揃えば、できないことはないんです」

マジカルハート「…！うんっ！」

ここでハートとワードが浮遊し、田中とドクターSの前に来る。そして、ワードは日本刀を、ハートは杖を天にかざし、呪文を唱え始めた。

………

その頃、他の仲間達は…

たたたたたたたたた…！（走）

銀時「つたく…余計に時間を取られちゃったぜ！」

新八「またこの騒動にデニーが絡んでいたなんて！」

神楽「しかも理事長が、ドクターSって奴も部下だって言うってたア

ル！」

ビビ「あんのクソ男が…ドクターSって娘からじつくり聞きださなきゃいけないね！」

ギルシア「ていうか、カイト達は今どこにいんだ！？さっきぼこつた部下は逃げられちまったし、あいつらんとこに行ってんじゃねえのか？」

銀時「さあな！けど、あいつらのことだ。どうせ行っただって振り返り討ちにしてるだろうさ！」

マリオ「かもな！」

ミサイルが学園に直撃してから、銀時をはじめとする仲間達はしばらく出撃できずにいたが、カイトとミアリアが張って行った加護のおかげもあってガスを完全に浄化および駆除し、後から全員出撃していた。感染者の対応に面倒かけられながらも急ぐその途中、彼らが言うデニーの部下と遭遇したらしい。銀時達は部下をあと1歩まで追い詰めたが、部下は命からがら逃げてしまった。今、その戦いで得た情報を整理しながら、カイト達を探しているのだ。

ユニ「それにしても、さっきの波動は何だったのかしら？ウイルスに感染した人達が一斉に元に戻っていったけど…」

ラム「これも、カイトさん達が？」

ベール「いいえ、それとは違う感じでしたわ。まるで、魔法少女らしい感じの波動でしたから」

びゅうっうん！

ノワール「ん？何、あの光の玉は！？」

走っている銀時達が見ると、南の方角から光がものすごい勢いで北へ飛んで行った。

セレナ「あれは、何でしょうか？」
フウ「どこに行ってるんだろう？」

レーティア「…なるほど、あの光の行き先に、もしかしたらミリアちゃん達がいるかもしれないわ」

スネーク「ありえるな。急ぐぞ！」

ビビ「待っててね、ミリアちゃん達ー！）、・・・（）」

……

マジカルハート&ワード「合体！！！」

空から二つの光が魔法少女達を包み込み、そして1つの光となって合体した。

びかああー！！！！

閃光の後、その光から現れたのは、巨大化したマスコットの姿をした生命体だった。

ネプギア「あれは何ですか!?!」

こなた「あれは…まさか、ミニーマウス!?!」

かがみ「はあ!?!何で夢の国のネズミの女の子なのよ!?!原作だとマヨちゃんっていうマスコットになるはずでしょ!?!」

こなた「かがみ、気持ちはわかるけどメタっちゃんおしまいだよ……」

所詮、何でもありなのだ。

そして、ワードとハートは操縦席で二人一緒に操作するよう、すでに準備できていた。ちなみに何故か裸。原作に忠実だ。

マジカルワード「いきます！」
マジカルハート「おー！」

夢の国の女ネズミの姿をしたマスコットは、田中に攻撃を仕掛けていく。

マジカルハート・ワード「マジカルパーンチ!!!」

すどがああっ!!!

田中「ゼアっ!!!?」

マジカルという名の鉄拳を田中にお見舞いした。田中は負けじと反撃にパンチするが、逆によけられてカウンターパンチを喰らう。

田中「ぜ、ゼアっ!!!」

奥の手として光線を撃つ田中。

マジカルハート・ワード「マジカルシューーット!!!」

どおおおおおん!!!

田中「ゼアあああっ!!!?」

しかし、ネズミのマスコットはマジカルという名の波動拳を撃って光線を相殺し、残った波動が田中に直撃する。まともにくらった田中は、ついに後ろへ転がりうつ伏せになった。

カイト「正体は完全にわかってねえが、今わかることはお前が世界の友人であるということだ。知らないとは言わせないぜ…誠と言葉から話は聞いている。お前らの関係のことも全部な」

ドクターS「……」

カイト「答える！西園寺世界はどこにいやがる！！」

さつきまでのギャグな空気を壊すような瞳で、ドクターSを睨むカイト。大してドクターSは、冷静に答えた。

ドクターS「…いいわ、少しだけ話してあげる。西園寺世界は、エリート学園残党組織にいる」

カイト「！残党だと？」

ドクターS「ほんのわずかだけどね…今はヤンナと一緒に副指揮官を務めている」

カイト「ヤンナ…？あいつまで生きてやがったのか」

ドクターS「最も…さつき超次元学園の他の奴らに敗走した後だけどね…今頃、組織の拠点に帰りついた頃よ」

カイト「…それはどこだ？」

ドクターS「…それ以上は話さない。デニー様からそつ念を押さるてるから」

カイト「！…」

ドクターS「カイト・ネイラード…貴方では絶対に私達の理想を止められない。デニー様…そして、私達の理想を……」

ぶふううん！

ドクターSはその言葉を最後に、レポートで逃げて行った。もう追っても無駄だろう。

カイト「……デニーの部下になったっていいのか？何が目的で……」

すたっ

「己の欲望のため…最後に行きつく結論はそこよ」

カイト「！」

カイトが振り向くと、そこには黒い長髪の少女が立っていた。

「…1つ聞くわ。キュウベえという宇宙生物を見たことはない？」

カイト「お前は…魔法少女か？」

「……」

少女は答えない。聞いても無駄かもしれない。

カイト「…いや、聞いたこともない」

「…そう……結局、今回もまた外れだったということね……」

カイト「……」

少女は後ろを向いて少し歩き、こう言った。

「1つ伝えておくわ。さっきデニーっていう名前を聞いたようだけど…奴は、力で倒すことはできない。覚えてて」

カイト「…？力で、倒せない…？」

「……縁があつたら、また会いましょう」

ばっ
…

カイト「！？」

一度目を瞬きすると、その少女はすでにそこにはいなかった。

カイト「今のは…一体…？」

たっ たっ たっ ……！（ミリア達がかけてける）

ミリア「カイト君、今の娘は…？」

カイト「わからない。ただの少女じゃなかったみたいだったが…」
圭「…ん？」

たっ たっ たっ ……！（銀時達がやってくる）

ステラ「おーい！皆ーいーい！」

ネプギア「あ、皆さん！」

ベール「ふう…探しましたわよ。私達を差し置いて、ずるいですわ」

ネプテューヌ「あはは、ごめんごめん」

銀時「…どうやら、全部終わった後みてえだな」

カイト「そっちは大丈夫だったか？」

ガノン「うむ、お前達の加護のおかげですぐに対処できたぞ」

レオン「全く、面倒なことをしてくれたものだ」

仲間達と合流したカイト達は話しこむが、ちょうど同行していた理事長らの内の一人、チート・ザ・ハードが区切りをつけた。

チート・ザ・ハード「話は学園に戻ってからにしてください。カイト、戻った後すぐに報告をしてもらいますが、よろしいですね？」
カイト「ああ、俺も伝えたいところだよ」

チート・ザ・ハード「よろしい。では、帰りましょう」

こうして、平和的に後始末はいい意味で何事もなく行われ、魔法少女騒動は幕引きとなった。

……

報告されたこと

・ドクターSやヤンナ、そして西園寺世界がデニーの部下として活動している

・エリート学園の少数残党組織が存在している

・ガスによる制圧は、エリート学園復興の足がかりのためだったらしい

・謎の少女と遭遇したこと

・少女いわく、デニーは力で勝つことはできないとのこと

これらの情報は、後に来るであろうデニーとの戦いで役に立つだろう。

少しずつではあるが、戦いは近づいてきている。

ちなみに…

心「桂心っていいます！皆さん、よろしくお願いしまーす」

かがみ「…何で、唐突にこうなったのかしら？」

こなた「まあ、別にいいんじゃない？マジカルハートとして登場した時から、そんなフラグが立ってたっばいし」

カイト「ていうか、見たときから言葉も含めて正体ばればれでもあったしな…」

言葉「もう…心ったら」

誠「まあまあ、心ちゃんがそうしたいって決めたんだから、好きにさせてあげようよ」

言葉「そうですね。心、ここの皆さんにひどい迷惑はかけちゃダメ」

心「はい」

圭「で、本家は心ちゃんを果たして使うんだろうかって話だが…」
レナ「それもだけど、使うとしたらまたマジカルハートとワードで活躍の話を書く可能性もあるんじゃないかな、かな」

ミリア「なくはないね…作者もリクエストしそうだし」

カイト「てか、今回はメタな終わり方だな…」

ネプテューヌ「たまにはこういう終わり方もいいと思うな、私は」

ネプギア「あはははは…（苦笑い）」

桂心ちゃん、入学しましたとさ。

心「次回のマジカルハートところちゃんも、皆見てねー」

銀時「え、またやんの？」

ちゃんちゃんっ

22話「ドクターSの野望」(後書き)

今回はいつもよりもやりたい放題、そしてつっこみ所ありまくりな話だった気がします。

まあ、うちもカオスだからかな。

ネプMK2バトン(前書き)

真王さんから受け取ったバトンです。カイトとミリアを書いてみました。

ネプMK2ボタン

カイト・ネイラード

戦闘開始：容赦はしねえ！行くぞ！

先制攻撃：隙だらけだ！

バックアタック：不意をつかれたか…！

自ターン：よし、行くぜ！

敵撃破：撃破！

勝利：まだまだ、これからさ

戦闘不能：ミリア…ごめん…

戦闘不能復帰：ありがとう、同じ過ちは繰り返さねえ！

アイテム使用：使っぜ！

変身：（なし）

変身完了：（なし）

自己紹介：俺はカイト・ネイラード。よろしくな！

誕生日を祝う：お誕生日おめでとう！これからもよろしくな

メール着信：お、メールか。何かな？

電話着信：電話来てるぞー

褒める：すげえな！これからも信じてるぜ

罵る：お前：らしくないぜ

その他1：あきらめねえ：！俺は最後までやりつくす！

その他2：ミリアは：皆は、俺が守る。だからこそ、俺は強くなり
たいんだ。

ミリア・ネイラード

戦闘開始：よし、頑張らなきゃ！

先制攻撃：先手はもらったよ！

バックアタック：しまった！？

自ターン：行くよ！

敵撃破：撃破したよ！

勝利：ボクは、まだまだ頑張れるよ

戦闘不能：カイト…君…：ごめんね…

戦闘不能復帰：ありがとう、助かったよ

アイテム使用：使うね

変身：（なし）

変身完了：（なし）

自己紹介：ボクはミア・ネイラードっていうの。よろしくね

誕生日を祝う：お誕生日おめでとう

メール着信：メールが来てるよ。何かかな？

電話着信：電話だよ？誰からだろう？

褒める：わぁー…すごいね！本当にすごいよ

罵る：ごめん…それじゃ良く思えないよ

その他1：ボクも、カイト君のように強くありたい…そんな心を持ち続けたいよ。

その他2：皆の笑顔も、幸せも、日常も…ボクは守りたい。それが、ボクの喜びでもあるから！

ネプMK2ボタン(後書き)

これでよかったんかな…？

23話「解放女神姉妹」(前書き)

ネプ姉妹が大変なことになる話です。今回は自重すべきネタがあるんですが、それでもいろいろやばいんで、ネプ姉妹好きの人はご注意ください。

23話「解放女神姉妹」

10:00

キーンコーンカーンコーン！

『イギヤアアアアアアアアアア！！！！！！』

ミリア「な、何！？」

カイト「向こうからだ！行ってみよう！」

平和を満喫していたカイト達は、突如聞こえてきた叫び声の主を確かめるために走る。

……

場所は運動場付近。

二人がそこに行くと、何故か新八やリンクなどたくさんの方々が倒れていた。

カイト「お、おいどうした！？」

ミリア「何かあったの！？」

フォックス「…お、お登勢…がが…」

カイト「お登勢…？」

ミリア「誰…？」

カイトとミリアには聞いたことのない人なので、首をかしげるのみ。

「おや、カイト君とミリア君ではないか！いやー、ちょうどよかったのである！」

そこに、ドーンが声をかけてきた。

カイト「あれ、何やってんだドーン？」

ドーン「実は、私が作った新しいクローンの出来を見てもらったのである」

ミリア「クローン？誰のクローンなの？」

ドーン「ずばり、こちらである！」

ドーンが右腕を広げる方を見ると、二人の変わった顔の女性がいた。

カイト「……この二人か？（おばさんの方が、お登勢とやらか？）」

ドーン「その通りである」

クローン2「何だー、そこのガキンチョ達はー？」

お登勢「こらキャサリン、失礼だろ」

ミリア「あの……貴方達は……？」

お登勢「ふ、よく聞くんだよ？あたしは……」

キャサリン「あたしらはー！」

チャラーン（リリカルなのはコス&リリカルフェイトコスに変身）

お登勢「リリカルお登勢よっv」

キャサリン「リリカルキャサリンだっv」

……。

ミリア「……………」

カイト「……………うん、こりゃ迷惑かかるな」
キャサリン「殺すぞ」

カイトとミリアには通じないが、嫌な気持ちにはなるらしい。

ミリア「なるほどね…さっきの絶叫にも頷けるよ…」

ドーン「うむ、絶叫するほど素晴らしいのであるな！流岩私である。次もこの調子で、カイト君達のシリーズも…」

ばきいいいっ！…！（殴）

ドーン「ぶううっ！…！？」

お登勢「おや、やるねえ」

どーん！…！（壁にめり込む）

カイト「絶対作るなよ？あと、次また皆をこんな状態にしたら、まじでつぶす…」（怒）

カイトは殴るほどに嫌な様子だ。お登勢とキャサリンを悪く言うつもりはないようだ。ドーンには連帯責任でむかついたらしい。

ミリア「あ…カイト君とドーンさんの相性はよくないのかも」

それがミリアのコメントだった。

……………

教室

カイト「まったく…クローンばつか作りそうで嫌になるぜ」

ミリア「まあまあ、きつとドーンさんもそこまで身勝手じゃないと思うよ。やりすぎたら止めればいいんだから、機嫌直そうよ。ね？」
カイト「…そうだな。今は様子を見ていよう」

こんな時もあるが、今日も平和である。

そう、『平和』であるのだ…

カイト「…ん？あれ、ネプテュー又達は？」

圭「さつきまで近く長くにいたんだけど、どこ行ったんだ？」

こなた「トイレかな？」

たつたつたつ…

ミリア「あ、言ったら戻って来たよ」

かがみ「おーいネプギア、何してた…のっ!？」

こなた「かがみ?どしたの…うおっ!？」

カイト・圭「なっ!?!？」

ミリア・レナ「ええっ!?!？」

ネプギア「はあ…はあ…ちよつと、お手洗いに…」

例え、ネプギアがレオタード、しかもセクシー度がやばい奴の上に半袖の上着を着ただけの姿で、していても。

ミリア「ぎ、ギアちゃんその姿どうしたの!？」

ネプギア「はあ…はあ…じ、実は…今日は何だか肌を露出してないと落ち着かなくて…はあ…はあ…そ、それでさつき着替えてきました…/ / /」

なのは「しかもはあはあしちやってる!？」

カイト「なんかネプギアらしくねえぞ！？ 昨晚何があつたんだ！？」
ネプギア「そ、それが… シャリアローゼさんに……」

……

シャリアローゼ「貴方達にこれをプレゼントするわ。 はまりやすいから、長く楽しめるわよ」

……

ネプギア「それで、もらったビデオを見てたんですけど…… 今日になっても、内容が頭に残ったままで……」

カイト「あの淫乱女王サキュバスのせいかなぁーっ！……」

ミリア「アダルトビデオ見ちゃったっていうの！……」

どうやらノクターンのヒロインが黒幕らしい。

レナ「え、ええと… それで、そんな風になっちゃったの？ 大丈夫なのか、かな？……」

ネプギア「だ、大丈夫です… ただ、体が熱いだけで……」

こなた「いやいや、それ大丈夫じゃないって答えになるよ……」

かがみ「にしたって、ビデオ見ただけでここまでなるものなのか？

ちよつと変じゃない？……」

カイト「確かに気になるが……」

ビビ「ハアハアハアハア……… (*´、*´)」

ミリア「……… 次の休み時間に、ビビちゃんと一緒に見てみようよ……」

……

11:00

ビデオルーム

ネプギアにビデオテープを持って来てもらい、ビデオの中身を確認するために準備をした。なお、見るのはミリアとビビとアイリのみで、他は外で待つ。

アイリ「ご主人様、ビデオ再生の準備ができましたわ」
ビビ「ありがとー」

ミリア「それじゃ、早速見てみよっか」

ミリアはリモコンのボタンを押し、ビデオを流した。

……

10分後

部屋からミリアだけ出て来た。

カイト「どうだった？」

ミリア「うん…あれ、特殊な作りのアダルトビデオだったよ／＼」
言葉「やっぱり…」

ミリアも恥ずかしがってるあたり、間違いなくアダルトビデオだったらしい。

ミリア「…ふう…で…ネプギアちゃんは、催眠術にかかっているよ」
ネプギア「さ、催眠…？」

ミリア「ビデオの内容に見てる人へ催眠をかけるシーンがあったね、

ネプギアちゃんはそのシーンを見たせいで今の状態になってるみたいだよ」

かがみ「催眠？どんな催眠なのよ？」

ミリア「…えと、台詞がひどくアレだから言えない…しかも露骨な淫語…ノノノ」

カイト「ノクターンノベルズ向けか…」

言えばアウトな言葉であるようだ。どんな内容かは、シャリアローゼに聞くことをオススメする。

圭「で、ビビとアイリは？」

ミリア「催眠術を受けたせいで、ヤっちゃってるよ…ノノノ」

カイト「あいつら…」

ビビ達エロティック戦士には効果抜群だったようだ。

カイト「で、ネプギアの状態なんだが、加護ですぐに治せるか？」

ミリア「今回は性質じゃなくて、精神異常だからすぐには無理だね…時間をかけないといけないから、治るのはせいぜい夜の8時ぐらいかな」

レナ「じゃあ、今日1日我慢するしかないね」

カイト「そうなるな。ネプギア、それで大丈夫か？」

ネプギア「はい…我慢してみます…」

ミリア「ごめんね。とにかく、無理はしちゃだめだよ」

「ネプギア…っ、皆…っ！」

ネプギアの治療についてまとまった所に、ネプテューヌが走って来た。

フエイト「あ、ネプテューヌ……って……!？」

カイト「おい、ネプテューヌ……!？」

ネプテューヌ「はあ……はあ……どうしよう……なんか露出してなきや
落ち着かないよぉっ!」

なんと、ネプテューヌは水着という場違いな姿をしていた。しかも
セクシーな奴。

ミリア「ね、ネプちゃんも催眠術にかかっちゃってたんだ……;
なのは「ある意味大変なことになっちゃったね……;」

ネプ姉妹が催眠術にかかってしまったこのトラブルに、カイト達は
また振り回されることになるのであった。

……

13:55

授業前

イストワール「お二人の様子はどうですか？」

カイト「保健室で安静にさせてるよ。ドクターにも刺激しないよう
に言ってるから、大丈夫だと思う」

ミリア「加護を与えてますから、最悪の事態にはならないはずですよ
イストワール「そうですね……お二人に迷惑かけてごめんなさい」
カイト「いいよ。ネプテューヌもネプギアも、友達なんだからさ」
ミリア「そうですねよ、気にしないでください。友達が元気でいてく
れるなら、ボク達は喜んで助けるだけですから」

カイトとミリアは、微笑んでそう言った。

イストワール「ふふ…優しいんですね。ネプテューヌさんもネプギアさんも、いい友達を持ちました」
カイト「はは、お互いにな」
ミリア「くすっ…」

互いに微笑み合うカイト達。今では、すっかりイストワールともいい仲になっている。

カイト「さてと、そろそろ授業…」

『ガアアアアアアアッ！！！！！！』

3人「！！？」

ミリア「な、何！？」

カイト「待てよ…？あの咆哮、聞き覚えがある気がするぞ！？」

イストワール「まさか…ガーギルタイガーですか！？」

カイト「くっ！」

だっ！（出）

………

運動場

「ガオオオオアアアアッ！！！！！！」

カイト達の予想は当たってしまった。運動場に、あのガーギルタイガーがいたのだ。

こなた「ちよつ！？ガーギルタイガー！！？」

圭一「何だと！？何でガーギルタイガーがいやがるんだ！？前に俺達が倒したはずだろ！！？」

ガーギルタイガー「ガアアアアオオオオオツ！！！！！」

「ごおおおおつ！！！！（風圧）」

レナ「はうつ！？？」

ミリア「あのガーギルタイガー、前の奴とは違う…！？以前よりも強そうだよ！？」

銀時「おいおい！前回あれだけ苦戦したんだぞ！？前の奴は弱い部類だったっていいのかよ！？」

目の前にいるガーギルタイガの威圧が以前と違う。それはすなわち、以前よりも苦戦することが約束されるに同じ。しかも、以前のガーギルタイガーを倒したネプテューヌとネプギアは、催眠術を受けているために戦うことはほぼ不可能であることを考えると、非常にまずいパターンである。

圭一「くっ、ネプテューヌ達が動けない時に出て来やがって！」

誠「勝ち目はあるのか！？」

言葉「流石に、相手が悪すぎる気が…っ！」

カイト「言っただってしょうがないんだ！何にしてもこいつを放っておくわけにもいかねえ！！！」

かがみ「どうせ逃げることもできないんでしょ！？だったら戦うしかないじゃない！」

こなた「どう考えても倒さなきゃいけないボスだよ…はあ、嫌なもんだよ」

だが、引くことは許されない。カイト達は戦う構えを取る。

ミリア「皆、気をつけてね！」
カイト「絶対に生き残るぞ!!」
ガールタイガー「ガアアアアアアアアッ!!!!!!」

.....

その頃、保健室では...

ネプギア「はあ...はあ...み、皆の所に行かなきゃ...でも、今動いたら...!」

ネプ姉妹は、未だ催眠効果による発情熱に苦しんでいた。そのため、もしもの場合に備えてネプ姉妹には防衛に回ってくれるメンバーが何人かいる。

しかし、二人はこのまま何もせずにはいられないらしく、この疼きが暴走しないように出れないものか考えていた。そうしていると、ネプテューヌがあることを思いついた。

ネプテューヌ「...やっぱり...あれを解放するしか、ないんだね...」

ネプギア「え...まさか...?」

ネプテューヌ「うん...やりたくないことだけど...この熱を冷ましなから戦うには...やるしかないよ...」

ネプギア「...お姉ちゃん...」

ネプテューヌ「大丈夫だよ...私も一緒だから...ね?」

ネプギア「...うん...っ」

.....

戻り、カイト達は…

ズガアアアツ！！！！

カイト「ぐあああああつ！！？」

ミリア「！？カイト君！！！」

やはり苦戦していたようで、今カイトがツメによる突きをまともにくらってしまい、壁へふつとばされた。しかも、カイトだけでなく圭一やこなたなども攻撃を受けて傷付いている。

圭一「大丈夫かカイト！？」

こなた「カイトまでこのあり様とは…やっぱりやばいじゃん…」

かがみ「こつちの攻撃はちつとも当たらないのに、何であいつの攻撃はほいほい当たるのよ！？能力チートすぎるだろ！」

ミリア「素早さ、攻撃力、防御力…どれも前の奴とは比べ物にならない…っ」

がららっ…（壁から抜ける）

カイト「ぐっ…強すぎる…何なんだこいつ…っ！（立）」

ガーギルタイガー「ガアアアアアアアアツ！！！！！」

ボロボロになっていくカイト達だが、ガーギルタイガーは容赦しない。カイトを仕留めようと襲いかかった。

レナ「はうっ！？カイト君危ない！！！」

言葉「逃げてください！！！」

誠「だめだっ、間に合わない！！！」

ミリア「カイト君…っ！！！！（走）」

カイト「っ…こんな所で、やられてたまるか…!!」

再び構えるカイトだが、ダメージが大きすぎる。危機そのものだ。しかし…

「一撃必倒ーっ!!!!」

「決めるっ!!!!」

ズバアアアアアツ!!!(クロス斬撃)

ガーギルタイガー「グガアアアアア!!!!」

カイト「な、何…!!?」

ずざざざざざー!!

カイトに攻撃が行く寸前、ある二人によってそれは阻止された。そして、その正体もはっきりわかった。

カイト「ね、ネプテューヌ…ネプギア…!!?」

ネプギア「カイトさん…大丈夫ですか?」

カイト「あ、ああ…でも、二人と…も…!!?」

ネプギア（パープルシスター）、そしてパープルハートが助けに来たのだ。

ただし、姿は別だった。

ザック「うおおおお!!?」

銀時達「オiiiiiiii!!?!」
他男達「ぶふうーっ!!?!」

学内に待機している男達が、鼻血を吹き出した。何故なら、ネプ姉妹が原因だからだ。

答えは、二人のプロセツサがいつものものではなく、絆創膏だったからだ。

つまり、大事な部分を絆創膏で隠しただけの、ほぼ全裸姿である。

圭一・誠「ぶふうっ!!?!」

こながが「ちよっ、おま!!?!」

ミリア・レナ・言葉「え、ええええー!!?!?!?!」

まさに、サプライズ。

カイト「お、お前らそそそ、その姿は何だあっ!!?!」

パープルシスター「その…き、気にしないでください」

ミリア「いやいや、気にせざるを得ないんだけど!!?!」

パープルハート「催眠の効果をおさえるには、こうするしかなかったの。大丈夫、奴を倒したらすぐに戻るわ」

カイト「け、けどその姿やばくねえか!? どう見ても過激な姿以外何物でもねえし!! 下手すりゃノクターン行きだぞ!!?!」

パープルハート「表でも15禁向けがデフォよ。問題ないわ」

こなた「っーか、恥ずかしくないの? ほぼ全裸だし」

パープルハート「…ふふ…ネプギアと一緒になら、これくらい耐えられるわ」

かがみ「いやいやいやいや…」

ガーギルタイガー「グ、グルルルル……」

どこまでつつこむか続けていると、さっきの攻撃でようやくダメージを受けたガーギルタイガーが、ネプ姉妹を見て警戒している様子だ。

ミリア「あれ…タイガーの様子がおかしい…?」

パープルハート「さあ、すぐに終わらせるわ」

パープルシスター「いきます!!」

ばっ！（突撃）

こなた「って、そのまま行っちゃったー!!?」

レナ「あ、危ないよ二人共!そんな姿で攻撃を受けたら……」

ザシュツ!!!ズガアアツ!!!

ガーギルタイガー「キヤイイイーン!!!」

カイト「って!?!」

そのまま戦闘に入ったネプ姉妹が、ガーギルタイガーを圧倒しだした。カイト達全員で戦ってひどく苦戦していたのに、ネプ姉妹はその現実をぶち壊していく。タイガーにいたっては、まるでびびっている犬のようになってしまっていた。

言葉「つ、強い!?!」

かがみ「嘘おっ!?!」

ミリア「な、何で!?!なんかネプちゃん達が強くなってる!?!」

パープルシスター「体が軽い…こんなに爽快な気分、感じたことない…!」

パープルハート「このプロセスなら…もう、何も怖くない！」
こなた「それどういう意味?!?しかも死亡フラグ立てちゃだめだ
つてば!?!?!」

解放された気分というやつだろうか?

ビビ「ふ、ふふふふ……へブン、だわ……（*、*）」
ザック「へ、へへへへ……」

アリエス「はあはあ……はあ……」
はやて「うわあっ!?!鼻血で倒れてる人むっちゃおるやないかい!
?」

なのは「み、皆しっかりしてえーっ!」

やはりほぼ全裸で戦う姿を見て、ぶしゃーになる人は数知れないら
しい。

ガールタイガー「キャイイイーン!?!」

パープルハート「皆のために、私達は負けられないの!?!」

だっ！（ヴィオレットシユヴェスター）

パープルシスター「お姉ちゃん…私、皆を守るために…!」
パープルハート「らしくなってきたわね、ネプギア」

ズババババババシュー!!!

パープルシスター「これで、終わりです！」

ちゅどおおおおおん!!!!

(爆発)

ガールタイガー「キャウウーーン!!!!」

どしーん!(倒)

なんと、倒してしまいました。

カイト「た、倒しやがった...!?!」

こなが「ま、まじっすか...!」

言葉「ど...どういふことなんでしょうか...?!」

ネプ姉妹のみでガールタイガーを倒したことに、カイト達はただ
啞然とするしかなかった。

キュイーン!(戻)

ミリア「あ...」

ネプテューヌ「ふうー...うまくいったけど...//」

ネプギア「あうう...すっごく恥ずかしいよお...//」

ネプテューヌ「やっぱり、意欲的にやるものじゃないね...//」

カイト「そりゃそうだ...」

最な話である。

.....

かくして、ガーギルタイガーの危機は去り、ネプ姉妹の催眠も無事解けたのであった。ちなみに、ネプ姉妹がガーギルタイガーを圧倒したことについては、あの絆創膏プロセスによる効果のおかげらしい。効果については、防御力を引き換えに攻撃力を莫大に上げるのだとか。きっと、特殊なことをして付加されたのだろう。

後日、ネプ姉妹はあの出来事を黒歴史として、心に恥ずかしさと共に濃く残したそうなの。

ちなみに、シャリアローゼには一応催眠をかけるようなことをしないよう、カイトとミリアがきつく念を押した。

ビデオはというと…

アリエス「ふふふ…これがあればきっと…」

なんか別の人んところに行ってた。

23話「解放女神姉妹」(後書き)

本当なら痴女になってらめえなことをたくさんやるつもりでしたが、本家に悪いんで自重しました。

でも、やばいことしたよな…；

ごめんなさい！m(；)m

24話「カイトとミリアと空の板」(前書き)

本家よりスライダー競争です。空はいいよね

24話「カイトとミリアと空の板」

きいいい、い、いいんっゝここ、おおおおおんっゝ、かあああ、
あああんゝこおお、おおおおんゝ

全員「……………」

カイト「…なあ、本気で殴りに行っていいか？」

銀時「カイト、俺にも殴らせる」

土方「おい、俺も混ぜろ」

かがみ「ていうか、前回抗議してマゾチックとエッチ・ザ・ハード
には放送やらせないって決まったんじゃないのか？」

こなた「理事長がちよつと留守の間に、悪戯心が騒いでチャイムの
真似でもしたんじゃない…？」

ちなみに、今のチャイムはエッチ・ザ・ハードである。放送やりた
くてたまらなかつたのだろうか？

誠「それにしても、ここ最近暇だなあ…」

カイト「そうだな…あの騒動があつてから、何も起きてないしな」

前回のネプ姉妹の催眠騒動の後、一週間以上経過してもハプニング
どころか面白い馬鹿騒ぎネタもないため、ほぼ全員が暇を持て余し
ている。デニーに関する情報を集めに行くにしても、現状では微妙
なところだからますますやることがない。
まじで暇なのだ。

銀時「別にいいだろ？何もないのも平和な証拠さ。こんな時は下手
に刺激を求めてねえで、のんびししてりゃいいのさ」

カイト「まあ、わからなくねえ話だけだな…」

ネプテューヌ「むうう…退屈だよ。誰か面白いことやってよぉー」

ネプギア「お、お姉ちゃんっ、そんな抱きつかないでよっ／＼／＼」

退屈だと愚痴るネプテューヌは、ネプギアに抱きついて猫のようにくたりと力を抜いている。

沖田「おーい、俺に1つリクエストありやすぜー」

圭「ん？聞こうか」

沖田「土方さんが全裸で土壌すくいすりゃ一気に爆笑もんだぜー」

土方「てめえがやってろドアホ」

アリエス「はいはいーい！ネプテューヌさんと私の愛の劇場を…」却下「しよぼーん（、・、・、）」

言葉「あの、皆で映画を見るといのはどうでしょうか？」

ラム「あ、それいいね！見たい見たい！」

ロム「私も、見たい…」

なのは「私も賛成。それで、何か候補はある？」

言葉「はい、最近店で借りたDVDを今持ってますよ。題名は『着信アリ2』というのが…」

アイエフ・銀時・ビビ・その他「嫌ああああああっ！！！！それ嫌ああああああっ！！！！」

言葉「え…もしかして、苦手でしたか？私は、結構気に入ってるんですけど…」

こなた「そういえば、ホラー好きだったんだっけ…」

アイエフ「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない…」（ガクブル・涙目）

コンパ「ほらほら、あいちゃん大丈夫ですよ。あれはフィクションですから、何も起きたりしないですよ（なでなで）」

アイエフ「うりゅう…（；；；）」

銀時「…ケータイ壊れてねえのに、なんか幼児退行してるぞ?」

ミア「携帯電話から幽霊や呪いが出るお話だからね…きっとそれ
で関連して怖いんだと思うよ」

カイト「お気に入りから嫌なものが出るとなるとなあ…」

アイエフは携帯電話がらみになると、案外もろいのかも知れない。

圭「にしても、確かに暇だよなあ。何か面白いことねえかなあ…」

暇で暇でどうしようもない一同。

がららっ (ドア開く)

そこに、理事長が入ってきた。

真王「お前達、そんなに暇なら面白いゲームでもしないか?」

カイト「あれ、理事長?」

ノワール「面白いゲームって何よ?」

真王「知りたいなら、全員運動場に集合すること。別空間でやるか
ら、それなりに準備はするよつに。以上」

たっ たっ たっ… (去)

ミア「どんなゲームなのかな?」

ネプテューヌ「面白いって言ってたし、やってみようよ!」

圭「そうだな、そうするか」

………

運動場

というわけで、全員運動場に集合するのだった。

真王「よし、時間もちょうどいい。始めるとするか。空の空間、オン！」

全員いることを確認し、理事長真王は力を発動して別空間を開いた。

……

特殊空間 空

いくつかの足場があるだけで、下も周りも空一面の場所に到着した。目立ってるのは、いくつもの板が斜め下へ向けて並んでるといことだ。

あとは、大きな観客席があるだけ。

カイト「あれは、スライダーか？」

ミア「向こうに何か光ってるものがあるみたいだけど……」

真王「今回のゲームは、空のアスレチック・スライダーバージョンだ。ルールはいたって単純。スライダーを滑って、あそこにあるサンシャインの紋章をゲットすることが目的だ。一応ランク付けのためにゴールラインも用意するが、一番を取りたいのならばサンシャインも取ることだ。ちなみに、今回は相手への妨害もありだ」

新八「滑るって…これ、結構ジャンプとかしないと無理ですよね？」

真王「まあな。そして、今回の優勝者には景品も用意している。ぜひ頑張ってほしい」

近藤「景品付きか…よし、いつちよやるか！」

銀時「で、今回の出場メンバーは？」

真王「全員でやりたいところだが、今回はサンプルステージだな。

すまないが10人に限定させてもらおう」

こなた「ふむふむ。まあ仕方ないよね」

真王「さて、選出方法はご指名でいく。日ごろの成績も見て、俺が選ぶでしょう」

そういうことで、今回真王が選んだメンバー（理由つき）は…

カイト （総合的に頑張ってる）

ミリア （総合的に頑張ってる）

ネプテューヌ（運動系は優秀）

ネプギア （成績優秀）

ノワール （成績優秀）

ユニ （成績優秀）

こなた （新人だがよくやってる）

圭一 （新人だがよくやってる）

近藤 （理由は後ほど言う）

マリオ （スライダー名人）

以上のメンバーとなった。

他のメンバーは観客として見ることになる。

真王「では、スタート位置についたところで始めるとしよう」

カイト達がスタート位置に立ち、それぞれ意気込む。

ネプテューヌ「ふふん、一位は私がもらうからねー！」

ノワール「それはどうかしら？私が勝つんじゃないかしら？（余裕）

┌

ネプギア「頑張ります！」

ユニ「負けられないわ！」

こなた「近藤さん、ゴリラパワーとやらを見せてもらいますぞ?」

近藤「ゴリラではない!愛のパワーと言え!」

こなた「え...?」

圭「ふっふっふっ...俺が勝っちゃうもんね」

マリオ「この勝負、いたただくぜ」

カイト「いかに妨害をしのいでいくかどうか...だな」

ミリア「何にしても、頑張らなきゃ!」

真王「それではスタートだ」

3、2、1...GO!!!

合図とともに、全員は勢いよくスライダーに乗り出した。そして、最初の斜面からいい滑りで進みだす。最初に先頭を滑るの、近藤だ。しかも、距離もいい感じで開いている。

近藤「ひゃっほおーう!このまま一気にゴールまで...」

ぱかつ(開)

近藤「ん?」

真ん中を滑っていたのだが、その途中に四角っぽい部分に乗ると木の床が一部分開いた。

下は空、すなわち...

近藤「な、何だとおおおおおお!?!?」

ひゅっううううううう.....

ビビ「やっぱり鬼畜ねあんだ……」

……

ユニ「な、何て嫌な構成なのよ……」

ノワール「全くね……とにかく、注意して進みましょう」

ネプテューヌ「とりやー！一番は私がいっただけー」

ネプギア「ま、待ってよお姉ちゃーんっ！」

カイト「皆早いなあ。俺も負けてられねえ！」

ミリア「くすっ、ボクも負けてないよ」

孔明の罫がありそうな空を抜け次のスライダーへ滑って行く6人。その後もらせん状に回る地帯、続いて上にジャンプしながら登っていくトランポリンコース、カービイのエアライドによくある線を自動的につたって華麗に進んでいくコースなど、6人は順調に進む。しかも、気がつけば6人共感覚に慣れてきたために、自ら立って滑る姿勢になっていた。

カイト「よっ、はっ！……よし、いい感じだな！」

ミリア「うんっ、それに風も気持ちいいし、楽しいなあ」

ユニ「ちよっと！私を置いていくなんて、いい度胸じゃない！」

ネプテューヌ「ふふーん、一番は渡さないよー」

特に、カイトとミリアは他の4人以上に楽しんでいる様子だった。空でこんなに飛び続けているのは、二人にとっても気分がいいらしい。

カイト「ははっ、こんなに楽しい気分になるのは久しぶりだぜ。やっば、空っていいもんだよな！」

ミリア「うんっ」

ノワール「ふふっ、確かに悪くないわね。こんな風にうまく飛び続けてれば、いい気分になるもの」
ユニ「孔明の罫とかがなければ、もっといい気分になれるんだけどね……」

その後も続く難関を次々と楽しく突破していき、ついに6人はゴールラインを突破した。

後は、向こう側にある小さな床にあるサンシャインを取るだけである。

カイト「あのジャンプ台から滑って飛べばいいな！行くぜ！！」

ネプテューヌ「一番はもらったー！！」

ネプギア「私も行きます！」

ノワール「そうはいかないわよ！」

ユニ「私だつて！」

ばっ！

ミリア「チャンス到来！このままいく！！」

5人が意気込む中、なんとミリアが5人よりも先に飛び出した。順位的に真ん中あたりの距離から、一歩ステップしてギリギリ手前の位置で着地し、そこからうまく滑り飛んだのだ。

カイト「な、しまった！？」

ネプテューヌ「ねぶっ！？」

5人が追うように飛んでも、時すでに遅し。先にミリアが床に到達して、サンシャインを華麗にゲットした。

ミリア「サンシャインゲット！この勝負、もらったよ」

すたっ、すたっ！

がしっ、がしっ、がしっ！

その後の結果は、ネプテューヌとネプギアが床に着地。カイト、ノワール、ユニは床の隅に捕まった状態で終わった。

ネプテューヌ「うう、もう少しだったのに！悔しいっ！」

ネプギア「負けちゃった…でも、お姉ちゃんと並んだからいいかな

」

カイト「何てこった、またミリアに一本取られちゃったか（微笑）」

ユニ「うう…こ、今回はちょっと調子が悪かっただけよっ！本当なんだからね！」

ノワール「はあ…いい感じだったのになあ」

………

結果発表

一位 ミリア

二位 ネプテューヌ、ネプギア

三位 カイト、ノワール、ユニ

アウト マリオ、こなた、近藤、圭一

………

運動場

真王「一位おめでとう、ミリア。いい身軽な動きを見せてもらった」

こなた「マリオ、ちょっと鈍感過ぎない?」
ウィータ「やっぱ理事長の考えはわかんねえ…」

各々がそれぞれの気持ちを抱き、暇つぶしはこれで終わりとなったのであった。

ミリア(……媚薬かあ……これを使えば、いつもよりはいい感じになるのかな……? だったら……)

カイト「? ミリア、何媚薬を見つめてぼーっとしてるんだ?」

ミリア「え! ? う、ううんっ、何でもないよ」

カイト「そうか? ならいいけど……」

ミリア(……もらえて、よかったかな?)

ミリアは心の中でそう思った。

ノクターンノベルズイベントフラグたちましたw

24話「カイトとミリアと空の板」(後書き)

というわけで、ここからノクターンにてカイミリを手始めに裏のア
ナザーストーリーを書くことにします。媚薬にするかは未定です。

25話「自惚れた襲撃者」(前書き)

ヴァーラガルゼさんの敵キャラが襲撃してきます。前・中・後に分け、今回は2人と戦います。

25話「自惚れた襲撃者」

22:00

運動場

ぶん、ばっ、しゅばあああ！

夜空の下、カイトが素振りを主とした修行をしていた。今夜は風が気持ちよく、カイトにとってこういう環境で木刀を振るうことは好きなのだ。

カイト「……よし、この分ならそろそろ見えてきそうだな。そろそろ次に行ってみようかな」

たっ…たっ…

「熱心だな、お前」

カイト「あれ、お前は確か…雄大？」

そこにやって来たのは、OSGを束ねる者の雄大だった。彼は、1人で修行するカイトを見かけたのだろう。

雄大「いかにも。お前はカイトだろ？噂はよく聞いてるぜ。最近、学園でよく目立ってるそうじゃないか」

カイト「目立つつもりはねえんだけど…まあ、いろいろやってるからかな」

雄大はカイトのことを知っていたようで、少し意外な気持ちになる

カイト。

雄大「それになかなか強そうだ。どうだ、OSGに加わらないか？お前なら、奴らをぎゃふんって言わせられそうだ。俺達全員歓迎するぜ」

雄大はカイトの素質を買い、OSGへ勧誘してきた。どうやら、雄大達からも注目されているのだろう。だが、カイトは丁寧に断ることにした。

カイト「気持ちはありがたいけど、お前達の競争に加わるような柄じゃないよ」

雄大「そうか？見た所、お前ってなんか正義のヒーローって感じしてるからさ、きっと俺達の苦しみがわかるはずだと思うんだが」

カイト「全然わからないわけじゃない。けど、俺は正義が嫌いだね。俺からしたら、どっちでもない者だと思うよ」

少し悲しげに言うカイト。

カイト「その後のことを思うと…どうしても、正義に身を委ねたくないんだ。俺が、俺でなくなりそうだから」

雄大「……？」

カイト「…って、そういう話じゃなかったな。ごめん、話がそれたな」

はっ、と気付いて苦笑する。雄大にいたっては、そんなカイトを妙に感じている。

雄大「…変なことを言うんだな」

カイト「はは…反論はしねえよ」

雄大「にしても、そこまで考えることなのか？ただ、正しいか悪いかの違いだろ？何でそんな正義を嫌って……お前、強いらしいし」
カイト「強い…か。本当にそうなのかな」

雄大「??？」

カイトは少し歩きながら喋る。

カイト「確かに強くなっていく感じはしてる。けど、まだまだだめなんだ…まだ頑張っていかなきゃ、皆の力になれない」

雄大「…まじめだなあ」

カイト「まじめとかそれ以前に、わかりやすい話なんだよ」

雄大「え…？」

カイト「チート…この学園にもそんな能力を持つ者がたくさんいる。チート・ザ・ハード、レオンさん達3人、他にもビビなど…あらゆるチート能力を持っている。…けど、俺はどうだ？何の証もなけりや称号もない……ただの異端な者でしかない」

雄大「……」

カイト「まだ、だめなんだ…」

目を閉じ、カイトは自分に言い聞かせるように言う。それは、カイトの心の表れでもあった。

雄大「…よくわかんねえけど、そこまで弱くはないんじゃないか？」

カイト「どうしてそう言える？」

雄大「だってよ、カイトはそう言いながら高難易度のショートミッションをクリアしたり、バウンサーとかいう強者達に次々と勝ってきたんだろ？それなのに弱いなんて、ありえねえよ」

雄大は、カイトが模擬戦でマスタービーを倒したり、他にもガーギルタイガーを相手に勇敢に立ち向かう姿を見たことがある。

それだけではあるが、カイトは強いと思うには十分だ。

雄大「カイトなら絶対大丈夫だって。俺達の組織でなら、副隊長にだってなれる！だから…」

カイト「くどいよ。俺はそんな柄じゃないし、そっちの競争に加わる気もない。嫌な戦いじゃないんだし、俺が参加する必要だってないはずだ」

雄大「カイト…」

目を開き、カイトは顔を上げて言う。

カイト「俺はただ…皆と一緒に生きていたい。そのために強くなりたい…それだけだよ」

その目は、純粹なものだった。

カイト「それに…ミリアを悲しませたくないしな」

雄大「…お前…」

そこまで…、の続きの言葉を出しかけた時だ。

「下らん男だ、お前は」

カイト「!！」

カイト達の前に、青い服を着た16歳程の青年がどこからともなく現れた。

「相変わらずだな。その子供ぶりは」

カイト「お前は…イオド!!生きていやがったのか!？」

雄大「イオド…?」

イオド、そう呼ばれた青年は雄大に応える。

イオド「デイクロス・イオドだ。覚えておけ、弱者」
雄大「じゃ、弱者だと!？」

カイト「見下す癖もそのままか。どこかでバチが当たってるかと予想してたんだが…」

イオド「バチ? 違うな、報われたんだ。あの方に俺の実力を買われてな」

カイト「あの方…?」

イオドが言う人物を連想するカイト。少しの間だけで、答えは出た。

カイト「まさか、デニーか!」

イオド「いかにも」

雄大「…お、おい? あいつのこと知ってるのか?」

話についていけない雄大は、イオドについてカイトに訪ねた。

カイト「奴は、元エリート学園代表の剣士…そして両親を幼い頃に権力争いで亡くしたために主君となった、デイクロス貴族の一人息子だ。俺とミリアがエリート学園にいた頃、一度だけ模擬戦で戦ったことがある」

雄大「エリート学園の人間だって! ? あの腐れ外道の学園のか! ?」

カイト「ああ… 剣の腕で有名だったのも覚えてる」

イオド「そう… 本来なら、あのまま全世界最強の剣士へと昇格していくはずだった。だが… カイト、貴様がその最強伝説に泥を塗った」

拳を握りしめ、少し震えさせて理由を話す。

イオド「貴様と初めて模擬戦を交わしたあの日……」

……

回想〱カイト対イオドの模擬戦〱

イオド「勝負は見えたな、弱者カイト。所詮お前はBクラスの人間
… Aクラスの俺に勝つことなど夢のまた夢でしかないんだ」

カイト「がはっ…ぐ…っ!!」

勝負ははじめ、俺が優位に立っていた。カイト剣技を見切り、一方的に追い詰めていたのだ。誰もが俺の勝利を確実なものだと見ていた。だが…

イオド「弱者はこの世に必要な…カイト、貴様はここで死ね」

カイト「…!!」

イオド「これで終わりだ!!（構え）」

だっ！（突撃）

カイト「…弱者はこの世に必要な…だと…?」

イオド「最高奥義・天空霸王剣!!!（全霊のダッシュ突き）」

がきいいいいん!!!（弾く）

イオド「なっ!!!?」

カイト「…下のクラスの人間は皆、死ねって言うのか…!!!!」

イオド「馬鹿な!?俺の最高奥義が…!!?」

カイト「…ふざけるな…」

だんっ！！（力強く踏み込む）

カイト「ふざけるなああああああああああああああ
！！！！！！（フルスイング）」

すどばあああああああつ！！！！（クリティカル）

イオド「ぐばあああああつ！！！！??」

～回想終わり～

.....

イオド「…俺の最高奥義を止め、拳句たった一撃で俺を地にひれ伏させた。あれだけ追い詰めていたのにだ」

雄大「…カイトが、勝ったのか？」

イオド「そうだ…忌々しい思い出。あの敗北を機に、俺は学園評議会から段位下落をくらい、さらには俺の最強伝説が格下に見られ続けるという屈辱を味わうはめになった。しかも、カイトがエリート学園を一度壊滅させたあの日を境に、世間からの評価も落ちていたために居場所を失いさまよい続けたんだ…！」

徐々に怒りをあらわにしていくイオド。

イオド「あの時の苦痛と屈辱…俺は忘れはしない…！壊滅当日にも、貴様から受けた打撃の痛みもな…！」

最終的には、カイトに己の不幸を語りぶつけるに至った。だが、カイトは真剣かつ鋭い表情でイオドを見ている。

カイト「模擬戦での敗北をきっかけに墮落してしまったという話は聞いていた。だが、俺がお前をたたきつづいた理由はその復讐に係ることじゃない。お前が、奴らと同様に性交の秩序を築こうとしていたからだ」

イオド「……!!」

カイト「知らないとは言わせないぜ。俺達が学園を離れた後、イオドのことについても念を押して調べさせてもらった。評議会や他の連中ほどではなかったが、ある1人の女性を己の秩序に組み込もうとしていたことはすでにわかっている。確か、貧困層の住民達に慕われている心やさしきグラントール貴族の一人娘、シルフィを汚い手口で自分の物にしていたんだっただな」

雄大「シルフィ……?それってあの、格闘術や細剣術をもたしなんでいたって……?」

カイト「そうだ。そしてシルフィには彼氏ができていたんだ。名はカルフとあって、同じく貧困層で慕われていた、格闘術を重んじるチオウ貴族の一人息子だ。だが……イオドはそのカルフを自分の独善で殺害してシルフィを奪い、後に二つの貴族を金と権力で滅ぼした。もちろんカルフとシルフィの両親も謀殺してな。だから俺は、1回目のエリート学園襲撃の時にイオドもたたきつづいたんだ。……ぎりぎりだった……あと少し襲撃が遅かったら、シルフィは間違いなくこいつに犯られていただろうな……」

深く思いたし、ありのままに話すカイト。カイトにとって、イオドもまた許せない存在なのだ。

雄大「な、何て奴だ……!!」

カイト「イオドをたたきつづいてからシルフィを安全な環境へ返した後、彼女がそれからどうしているのか……その情報はまだ入ってない。立ち直ったか、それとも落ちたままか……いずれにしても、シ

ルフィの人生は一度滅茶苦茶にされた事実は消えない。イオド…てめえのせいだな」

カイトはイオドを睨み、あの時の怒りを再び呼び起こした。イオドは冷静な表情に戻し、話をつなげた。

イオド「…ふん、さも俺が元凶のように言うのだなカイト。俺は、シルフィの人生を想ってやっただけだ。あのような弱者がシルフィを幸せにできるとは思えん…だから、俺がその役目を変わろうと思つたんだ。シルフィ…身体と精神共に強く、そして美しい…彼女は俺の妻にふさわしい存在。だが…その彼女が今どこにいるのかはわかっていない」

カイト「そこで、超次元学園から情報を頂くために来たってわけかにしても…あれだけ叩きのめしたつてのに、まだあきらめてなかったのか。しかもデニーの部下になるとは…」

雄大「まじかよ…外道が他にもいやがったとは…!!」

カイト「どこにでもいやがるのが今の現実さ…だから、野放しにしちやいけない」

話を聞いて憤る雄大と、イオドのような外道はまだまだたくさんいることを告げるカイト。

イオド「話はもういいだろう。デニー様の命令により、ダヌ理事長の奪還及び学園に存在する魔導書全てをもらいうける。それと、ゼレナやステラとその他仲間全員にも来てもらおう」

雄大「何だと!？」

イオド「そこをどけカイト。俺はもう昔の俺ではない…すでに貴様など俺の敵ではない」

カイト「…自惚れるな、イオド」

しゃきんっ！（木刀をしまい、バスタードソードを抜く）

カイト「そう言われてどくわけねえだろ。てめえは、今度こそここで止めてやる！！」

イオド「愚かな…いいだろう」

しゃきんっ！（ある剣を抜く）

イオド「今までの恨み…ここで返させてもらおうか、カイト」

カイトとイオドは対峙し合い、戦いが始まるうつとしている。

カイト「雄大、こいつは俺が相手する！お前は皆に知らせてきてくれ！他にも襲撃者がいるかもしれないから、理事長達にもすぐに探知をさせてほしい！」

雄大「わ、わかった！気をつけるよ！」

たっ たっ たっ！（学校内へ戻る）

イオド「今の俺は、昔のようなへマはしない。今度こそ、貴様の血を浴びさせてもらう」

カイト「させるかよ。てめえの野望もろとも、たたきつぶす！！」

かつて、エリート学園で剣を交えたカイトとイオド。今、再びぶつかる。

だっ！（どちらも突撃）

イオド「行くぞカイト！！」

カイト「覚悟しやがれ外道がああああああつ！……！」

続く

25話「自惚れた襲撃者」(後書き)

またもやセレナ達関連も入りました。

ダヌについては…そんな構えなくてもいいです。いいネタあります

し
w

26話「冷酷な魔導士」(前書き)

ミリア達視点の話になります。もう1人はここで登場です。

26話「冷酷な魔導士」

あらすじ

月明かりが綺麗な夜に、超次元学園への襲撃者が現れた。イオドと名乗るその襲撃者は、かつてカイトが一度倒した因縁の相手。

カイトはイオドを止めるために、一人で立ち向かう。

しかし、襲撃者はイオドだけではなかったのだ…

……

学内

チート『緊急報告です。超次元学園にデニーの部下と見られる襲撃者が現れました。戦える生徒は全員出撃してください。なお、他にも襲撃者がもう1人いるようですので、注意するように。繰り返します。超次元学園に……』

たっ たっ たっ ……！ (走)

アイエフ「またデニーの部下ね…今度は何をしでかす気なのやら」
ネプテューヌ「も、せつかくネプギアとこなた達とレースゲームで白熱してたのに！」

こなた「いやあ、これで邪魔されちゃあ敵にちよつち怒りが湧くね」

かがみ「ちよつとどころかすっげえむかついてるけどな！」

どがあああああん!!!

なのは「!?!?爆発音:どこから!?!?」

ミリア「...! 体育館からです!そこに誰かの気配があります!」

圭「体育館だと!?!?」

.....

体育館

ネプテューヌ「ここだね!?!?こらーっ、出て来なさい!?!」

セレナ「!?!?皆、伏せて!?!」

レナ「え!?!?」

ずがしやああああん!!!

セレナが叫ぶと同時に、ネプテューヌ達の目の前には氷塊が飛んできている。セレナとステラはすぐに前へ出てバリアを展開し、氷塊を防いだ。氷塊は豪快に砕け散り、あたりに破片が突き刺さる。

「おやおや...用のある人達が自ら来てくれましたか。手間が省けて助かりましたよ」

そして撃ってきた方を見ると、そこには緑のスーツを着て杖を突いた老紳士がいた。彼の手には金色の魔道書がある。

ネプギア「貴方が襲撃者ですね?一体何者ですか!」

「お初目にかかります。私はゾディアック・ランドルフ・カーターと申します。デニー様の命により、ここに参上いたしました」

ミリア「デニーの部下…！」

銀時「またデニーの犬かよ…めんどくせえ、とっとと出て行けよじじい」

ゾディアック「その前に、セレナやステラにはこちらに来て頂きたいのです。もちろん、お仲間も一緒にしてほしい所ですが」

アイエフ「どうせ碌でもないことに利用するんでしょう？はいどうぞって言うわけないじゃない」

ネプテューヌ「こっちはせっかくの時間を邪魔されて迷惑してるんだよ！まだ邪魔する気なら、ぼっこぼこにしちゃうよ！」

突然襲撃してきたゾディアックに対して、ネプテューヌ達は敵意むき出して睨んでいる。

ゾディアック「穏やかではありませんねえ。あまり手荒にしてほしくないのですが…」

銀時「てめえが言うんじゃねえよ、じじい」

ゾディアック「おやおや…まあいいでしょう。貴方達を始末しても問題はないことですし、すぐに片付けましょう」

そう言うと、彼は本を開いて魔法陣を展開。攻撃態勢に入った。

アイエフ「結局やる気満々じゃない！ま、どうせこっつなるとは思ってたけどね！」

ゾディアック「そうですか。では受けなさい！テオルゼオールド！」

ぐおわあああああ…！

呪文を唱えると、本から雲がもくもくと出てきて上空に大きなそれとなる。すると…

こなた「うわっ、弾くなり相殺するしかないじゃん!？」

なのは「くっ…：すぐには決められないけど、アクセルシューター・シュート!…!」

フェイト「プラズマランサー!…!」

どばばばばばばばばばば!…!

なのはとフェイトが弾丸を相殺するために、対抗して追尾弾を撃つた。次々と弾丸を撃つが、相手の追尾弾は数がありにも多いためにどうしても自分達の所へ来てしまう。

ざしゅ!…ばしゅ!…!

こなた「うおととととっ!?速度も速いつて!」

かがみ「うっとおしいわね…!ミリアにも攻撃が行かないように気を配るのよ!」

銀時「ちい!なんてじじいだっつーの!」

がすっ!…(弾丸がかする)

神楽「っ!…!」

ヴィヴィオ「神楽さん!？」

神楽「何これ…：かすっただけで、力が抜けていく感じがしたアル…っ!」

相殺しそこねた追尾弾の1つが神楽の腕あたりをかすり、すると神楽は当たった部分から力が少し入りづらくなつたようだ。暗黒追尾弾による効果だ。

銀時「ただの追尾弾じゃねえのかよ!くそっ、面倒な攻撃しやがっ

て！」

こなた「これ以上撃たれたらたまらないね…なら、私が速攻でいくしかないっしょ！（突撃）」

このままでは不利になると見たこなたは、ゾディアックへ斬りかかった。しかし、ゾディアックはにやりと笑っていた。

ゾディアック「若いですねえ」

こなた「なぬ!？」

ゾディアック「イグナート・ヴァルガンザルド！」

ちゅどががががががががああああああん!!!

こなた「んぎやあああああああ!?!？」

かがみ「なっ!?!?こなたあああ!?!？」

こなたがゾディアックへ技を放つ前に、自分のまわりから大爆発が次々と発生した。こなたはその大爆発へ巻き込まれ、最後にはふつとばされた。

かがみがこなたが落下してくる所を受け止めるが、すでにこなたはポロポロの状態だ。

こなた「う…きつ、すぎ…反則だよ、これ…っ」

圭「こなたを瀕死にしただど!?野郎、魔術のエキスパートだっていうのかよ!？」

ゾディアック「まだまだいきますよ。イグ・ノアド！」

ずびゅつううううう!!!

光の玉を複数召喚し、その玉から幾多のレーザーを発射させた。

銀時「次はレーザーかよ!! (よけ)」
ネプギア「きゃっ!! レーザーが速すぎて、よけづらい…っ!!」
ネプテューヌ「だったらガードして…うわっ!?! ガードできそうにないよこれ!」
ベル「くっ…嫌な奴だわ!」
ステラ「セレナ! あれをやるよ!!」
セレナ「了解!」

ステラとセレナは状況を打開するべく、二人がけの魔法を唱え始めた。

ステラ「月の光、天地に降り注ぐは涙…」
セレナ「涙に宿るは、月の悲しみと慈悲…」
ゾディアック「のんきに詠唱していいんですかね? ほら、そこにいるお譲さんにもレーザーが行きましょ!」

ずぎゅーん!! (ミリアへレーザーが発射される)

ミリア「っ!! 逃げられない…!!」
ネプテューヌ「ミリアあああ!!…!!」
レナ「させないっ!!…!!」

ずばああああん!!…!!

レナがミリアを庇い、鉈でレーザーを真っ二つに切り裂いて事なきを得る。レナはそのままレーザーをいくつも切り裂きながら、ゾディアックへ突撃していく。

ゾディアック「おや、おかしな人がいますね? ライブラで見たとこ

る、学園で目立つようなチート能力をお持ちではないはずですが…」
レナ「早くここからっ、出て行ってよっ！！！！」（一閃）

ぶんっ、ずがきiiiiiiiiいん！！！！

レナ「！？」

レナの鎧による一閃がゾディアックに命中はした。しかし、それがゾディアックにダメージを与える一撃にはならなかった。何故ならゾディアックにはあるバリアが張られていたからだ。

ゾディアック「まあ…この反転魔法陣の前では無力であることに変わりはないのですから、気にしなくてもいいでしょう」

レナ「反転…！？」

ゾディアック「そう、反転です」

その言葉と共に、ゾディアックのバリアから何かが弾けた。それは、レナを激痛と共に吹き飛ばす。

ばきiiiiiiiiい！！！！

レナ「きゃあああああああっ！！！！」

圭「レナあああっ！！！！」

どざっ、どぞぞぞ…！！（吹っ飛んで倒れて転がる）

レナ「っ…っ…っ…！！」

かがみ「嘘…！？」

ネプテューヌ「要塞をたたき斬るほど強いレナがやられた…！？」

学園に入学してから、恐るべき实力を見せていたレナがいともたやすくあしらわれたことに、ネプテューヌ達は驚愕せざるを得なかった。

ゾディアック「反転魔法陣といましてね。この魔法陣またはバリアがある限り、全てのダメージをそのまま返すことができるのです。今の吹っ飛びぶりからすると、さぞ強力な攻撃力だったようですね」
圭「な、何だと!? それじゃ、今のはカウンターだったのかよ!」

セレナ「物理がだめなら、魔法で!!!」
ステラ「皆、どいて! でっかい魔法をかますよ!!!」

その頃、セレナとステラの詠唱はちょうど終わっていたようで、二人は魔力をありったけこめてゾディアックへ魔術を放つ。

セレナ・ステラ「月光波動!!!」
ルナライトバースト

ズドおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!

二人の魔力は月光となり、波動のごとくゾディアックへ発射された。それはゾディアックに命中し、大爆発を起こした。

かがみ「やった!?!」

フウ「今度はちゃんとダメージが通ったはずだよ!」

ベル「あれだけ強力な波動を撃ったんですもの。これで無傷でいられるわけが...!?!」

圭「なん...だと...!?!」

煙が止んでゾディアックが見えた時、その結果はわかりやすく知ることになった。今の魔法を受けても傷一つ負っておらず、それどころ

るかバリアに光が吸収されていく様子だった。またもや通らなかつたのだ。

ゾディアック「がっかりしましたかね？魔法も例外ではないのですよ」

セレナ「そんな…！？」

ステラ「魔法も、返す…！？」

ゾディアック「はい、この通り…」

きゅい「い…！ずどおおおおおおおん…！！！！」

圭一達「ぐあああああああああ！！！！」

レナ達「きゃあああああああああ！！！！」

バリアから吸収した月光が放射され、そのまま全員へと跳ね返った。なのは達が防御魔法を使っても、焼け石に水だった。その威力はとて大きく、たちまちネプテュー又達はその場に倒れてしまった。

ミリア「皆…！？そんな…！」

ゾディアック「残念でしたねえ…貴方の仲間達による反撃は全て無駄だったようです」

ミリア「くっ…！」

残ったミリアは歯を食いしばるも、今はナイフの雨を防ぐことで手いっぱい。今ここで修羅烈風波を中断してしまったら、全員ナイフの雨にさらされることになる。皆を傷つけないミリアに、反撃に出ることは許されなかった。

ゾディアック「さて、このままでは貴方が先に死ぬことになるかもしれませんね。どうします？今なら逃がしてあげますよ」

ミリア「…冗談言わないでよ。ボクは皆を見捨てない…絶対に逃げない！」

ゾディアック「何故です？貴方が死ぬかもしれないのに…」

ミリア「皆はボクとカイト君を受け入れて、そして救ってくれた仲間達だから、守りたいの。今度は、ボクが皆を守るの！！」

ミリアの決意は固く、その場から逃げる気など毛頭もなかった。その様子を見て、ゾディアックはにやりと不気味な笑顔でこう言った。

ゾディアック「なるほど…でしたら、もう少しじっくり教えて差し上げましょう。恐怖と絶望というものを…」

魔導書から闇が噴出し、そして言葉と共にミリアへ飛んで行った。

ゾディアック「絶望がプレゼントです。ダークネス・ナイトメアアビス」

「おおおおおおおん！」

ミリア「うっ…！？」

闇はミリアをたやすく包み込み、それと同時にミリアの頭に嫌なもの走る。

ミリア「！？何…これ…！？幻影…それとも、夢…？」

変な感覚が体中をめぐり、そして今自分がどうなっているのか状況判断を急ぐミリア。しかし、この後ミリアはさらに困惑することになる。

『ぐわあああああああ！！！！！』

『し、死にたくないよおおお！！！！』

『嫌あああああああ！！！！』

ミリア「！？？」

突然、ミリアの耳に誰かの絶叫が聞こえてきた。何かに命を奪われるような悲鳴。

そしてまた…

『嫌あああああ！！もう許してえええええええ！！！！』

『助けてえええええええ！！！！』

ミリアはそこで知ってしまった。これは仲間達の悲鳴であることを。

ミリア「皆の悲鳴…！？でも、まだ殺されたり捕まったりしてないはずなのに、まさか幻聴…？」

何なのかいろいろ考え、何とか冷静に整理しようとするミリアの前に、ある幻影が目に入ってきた。

ミリア「え…っ！！？」

それは、絶対にあつてほしくない光景だった。

仲間達がエリート学園の人間に、欲に溺れた人間達に殺される光景。あるいは男女共にその連中に強姦され、墮落する光景。

ミリア「！！！！嫌…何、これ…！？こんなの…あ、あああ…！！」

ミリアは動揺してしまう。幻だとわかっているはずなのに、それが

あたかも現実になるような感じがしてしまい、ミアの恐怖心がどんどん湧きあがってくる。さつきからそのせいで、意識や思考がまともに働かない。

動揺し始めたことで、ミアの技が少しずつ弱まり始めた。

圭「っ…！ミア…！？」

レナ「これは…！？」

ゾディアック「おやおや…やはり怖いようですねえ？当然ですよ…怖くない人間なんているはずがないのですから」

銀時「てめえ…っ…ミアに、何をしゃがった…！」

ゾディアック「ダークネス・ナイトメアアビスは、相手に永遠の悪夢と絶望、恐怖、憎悪、呪い、無を与える魔術。ミアというお譲さんには、永遠に苦しんでいただくようにしました。これでじっくりわかることでしょう。どんなに心を強く持つても、神…秩序…運命…そして力に抗うことなどできはしないということを」

ネプギア「そんな…！？」

ネプテューヌ「ミアっ、しっかりして！！幻に惑わされないで！！」

ゾディアック「無駄ですよ。今のミアさんには、貴方達の声は届きはしない…闇が遮断しますからね」

こなた「こ、こいつ…鬼畜すぎ…」

ゾディアック「鬼畜？いえいえそんな、私はいたって紳士ですよ。野蛮で下等な貴方達とは違って…ふふふふふ」

ゾディアックはほくそ笑みながら、ネプテューヌ達を見下す。

気がつけば、もうミアの風がなくなりつつある。このままでは、ナイフの雨が自分たちに降りかかることになる。

ゾディアック「ほら…もうすぐお別れの時間ですねえ。困りましたねえ」

かがみ「あんた…最低よ…っ！絶対、ただでは済まさない…！！」
ステラ「全くだよ…そうやって、他人を苦しめて…いじめるなんて、許さない…！！」

ネプギア「酷い…こんなことを平気でするなんて…！！」

ネプテュー又達は、ゾディアックの性格を卑下する。

ゾディアック「所詮…貴方達が信じるものなんて、力のない者の甘さが生み出す幻だということですよ。全てを決めるのは、知恵と力だけなのです。貴方達の学園を守護するハード達や代表の猛者達も、同じようなものでしょう？どんなに正義や綺麗事を述べても、実際に戦いで示す実力の形は、力と知恵だけ…貴方達だって、力と知恵だけで戦ってなどいえないと言い切れるのですか？」

ネプギア「…そ、それは…」

セレナ「違う…私達は、力と知恵に溺れたりなんかしない…！！」

ゾディアック「いいえ…そう言ってる貴方達も同じですよ。そう…この世は力のある者こそが絶対であるのが節理なのですよ。ミリアさんがあややって苦しんでいるのも、それを認めなかったことも関係しているのです」

銀時「…頭イってんじゃねえのかよ……てめえなんか、俺達の全てがわかってたまるかってんだ…！！」

ゾディアック「いえいえ、わかりますとも、どんなに飾っても、決めるのは力と知恵だけなのですよ。ミリアさんには、力と知恵がない弱者…これは仕方のないことです。もし彼氏がいるのであれば、彼氏もさぞ下等なんでしょうね」

圭一・レナ「…！！」

ゾディアック「さて…そろそろいいでしょう。では、仕上げといきましょう」

ゾディアックはそう言うと、ぱちんと指を鳴らした。

あの少女が、現れるまでは。

きいいいいいいつ！

ゾディアック「むっ！？」

その直前、ナイフの雨が動きを止めた。その場にいるネプテューヌ達も、まるで時が止まったかのように…

「力と知恵だけが全て…そう思い込む人間ほど、落ちぶれるものよね…事実だとしても」

かちっ…ちゆどがあああああん！！！！

大爆発が起き、ナイフの雨とその雲は形を残さず消えていった。

ネプテューヌ「え…？」

ネプギア「貴方は…！？」

ゾディアック「…まさか…時の魔法少女、曉美ほむら…！？」
こなた「え、嘘…！？」

そう…

ほむら「…貴方達を死なせはしない…この自惚れ者は、後は私が相手するわ」

現れたのは、あの黒い長髪の少女だ。

続
く

26話「冷酷な魔導士」(後書き)

曉美ほむら参戦です。もうここらで仲間に入れることにします。
次でこの話は終わりにする予定です。

27話「怒りが呼び起こすもの」(前書き)

イオド&ゾディアック戦後半です。

27話「怒りが呼び起こすもの」

あらずじ

カイトがイオドと戦う中、ミリア達は体育館にて同じ襲撃者ゾディアックと対峙。勇敢に立ち向かうが、ゾディアックの圧倒的な実力の前に敗北寸前まで追い詰められる。さらに、ミリアがゾディアックの悪夢の魔術を受け、精神崩壊してしまう。ところが、絶体絶命の時にある少女が危機を救いに参上した。それは、マジカルハート騒動終結直後に出会った魔法少女。

名は、暁美ほむらという……

……

運動場では、カイトとイオドが激戦を繰り広げていた。どちらも攻撃の手をゆるめようとはせず、ただひたすらに剣劇を続けるだけ。これを見る限りだと、互角といった所だ。

がきいいんっ！！！（相殺）

イオド「剣の腕は上がってるようだな…これだけやって1撃も当たらんとは」

カイト「あの時と同じようになるわけねえだろ！！（払いから魔神剣）」

魔神剣をよけ、一旦カイトから離れて構えたイオド。

イオド「…そろそろ、俺の本気を見せてやろう」

そう言うと、剣から異様な力が開放される。

カイト「！（あの剣…ただの剣じゃない！しかもこれは…）」
イオド「俺の力と剣技、その身に受けるがいい」

カイトは構え、じつとイオドの出方を伺う。だがしかし、瞬くとイオドの姿がない。どうやら不意打ちを仕掛けるつもりだ。

カイト（どこから来る気だ…）

ざしゅっ！！（左から斬撃）

カイト「ぐっ！？そっちか！！」

突然斬撃を受け、剣を振り返しながら見るが、イオドはいない。

ずばっ！！（右から斬撃）

カイト「がっ！？」

ずばっ、ざすっ！！

不意を突くかのごとく、見えない斬撃がカイトを切り刻む。

カイト「ぐあっ！！…くっ、やっぱりこれは…姿を消してない…うぐっ！！…つまり…っ！！」

ずばあああっ！！！！（後ろから斬られる）

カイト「うあああっ！！！！」

イオド「よくわかったな…その通りだ」

斬られてのけ反るが、現れたイオドから何とか倒れずに離れた。

イオド「俺はあの日から剣の腕を磨き続け、それによってデニー様からこの剣技を授かったんだ。俺にふさわしい剣技だ」

カイト「っ…てめえ…時空剣技を使えるようになったのか！」

イオド「いかにも。これぞ、俺流時空剣技。この剣技に死角はない…」

ばっ！

再びイオドの姿が消え、カイトだけがその場に残される。しかし、様子が違う。

カイト「気配が消えた…？」

イオド『受けよ…五月雨…！』

ズババババババツ…！！！！

カイト「ぐあああああつ…！！！」

また見えない斬撃がカイトを斬る。しかもさつきよりも多く発生した。

カイト（何だこれは…！？気配はないはずなのに、どこからこんな斬撃が！？）

ざすっ…！！！！

カイト「うぐあぁっ…!!!？」

考える暇は与えられず、後ろからカイトが突き刺された。

イオド「勝負あつたなカイト。もはや、お前など敵ではない」

カイト「がつ…ぐ…!!！」

体に力が入らないカイトと、どや顔でほくそ笑むイオド。これはまさに、今の状況をそのまま再現されてるかのようだった。

イオド「さて、後は今までの恨みを晴らすだけだな。俺にたてついたことをじっくり後悔させてから、時空の狭間へ追放してやるっ」

カイト「うぐっ…まだ、終わらねえ…ぞ…!!！」

イオド「頭が高いぞ」

ずうう、ずばっ!!!ざすう!!!

カイト「ぐうう…!!！」

剣を抜き、痛めつけるように切り刻んでくる。ダメージから立ち直れないカイトは、よけることもままならないまま斬られていく。

イオド「そういえば…お前には双子の彼女がいたようだな？ミリアといったか…あの娘もなかなかいい娘だった気がするな…お前のような奴にはもつたいないだろうな？」

カイト「てめえ…っ！ミリアに、手を出すんじゃないやねえ…!!！」

イオド「いつまでも口は減らないか…ならば、まずはその口から使えないものにならないようにするとしよう」

剣を振り上げ、狙いを定める。このまま、斬られ続けるのかと思っ

ていたその時……

『嫌あああああああああああああああつ！！！！！！！！』

カイト「！！？…ミリア…！？」

カイトの耳に、ミリアの悲鳴が入ってきた。イオドには一切聞こえず、しかしカイトには聞こえ…感じたのだ。ミリアに何かあったに違いないと、カイトの思考が瞬時に働く。

イオド「しゃべるな。もはや言葉を必要としな……」

がしっ（脚をつかむ）

カイト「邪魔だあああああああつ！！！！！！」

ずどがああああああつ！！！！！！

イオド「ぐおおおつ！！？」

突然、カイトは立ち上がりながらイオドを地面にたたきつけた。

どじっ、どじっどじっどじっ！！！！

イオド「ぐぼはあつ！！？き、貴様…がべあああつ！！！！？」

さらに、イオドが自分を追いかけて来ないようにしようと、何度もイオドを力強く踏みつける。踏みつける度に、雷が落ちて威力を倍増させる。ありったけ踏みつけた後、カイトはイオドの脚をつかんで遠くへ投げ捨て、ものすごい勢いで学内へ突っ走って行った。

カイト「ミリア…無事でいてくれ!!」

………

ミリアサイド

ミリアが悪夢の間を受けて精神崩壊したこの現状に、曉美ほむらが危機を救って参上した。ほむらはゾディアックを冷たい瞳で見つめている。

ゾディアック「…これはこれは……まさか、こんな所であの有名な魔法少女をお目にかかれるとは……」

対して、ゾディアックは余裕であることを見せるような態度で話す。

ゾディアック「意外な話です…確か、貴方はたった一人で戦い続けていると聞いていました」

…どういうおつもりですか？しかも、力と知恵のあまりの高さに自惚れてるこの学園にどうして……」

ほむら「自惚れてる人に、自惚れてるなんて言われたくないわ。私はただ、自分の道を進んでいるだけ」

ほむらは動じることなく、ゾディアックを見ている。

ゾディアック「自分の道…ですか。それは、やはり自らの力で欲しいものを全て手に入れることですか？それとも、そこに転がってる弱者のように綺麗振ることでいいですかね？」

ほむら「教えても無駄なこと。ここで倒れてる皆についても、貴方のような人間には一生理解することのできない道よ」

左手に付けている円盤らしき装備から拳銃を取り出し、銃口をゾディアックに向ける。

ほむら「それに…貴方は欲に溺れているもの。デニーに加担しているのも、全ては己の欲望のため…貴方の場合、4割が興味本位、そして6割は自分が全てを支配すること」

ゾディアック「！」

ほむら「力と知恵を第一に考える貴方は、恐らく最大の力を持つデニーに近づいて力を蓄えながら野望に加担し、いずれは己が全てを取って替わろうと目論んでいる…デニーよりも力のある存在に近づくために」

ほむらは、ゾディアックの様子をほぼ気にせず話続ける。

ほむら「その存在の力を得ることを足がかりに全てを手に入れ自分だけ都合のいい世界へと変える…わかりやすいわ。貴方は過去にも自分の故郷や家族・仲間を犠牲にして力を…そう、その魔導書『黄衣の王』を手に入れたように、今回もあらゆるものを犠牲にして力を手に入れようとしている。たとえ裏切りを繰り返してでも…ね」

ゾディアック「……………心外ですね。どこで私の情報を手に入れたのですか？プライバシーの侵害ですよ…しかも目的のことにまで口出ししてくるなど…」

ほむら「貴方が言える立場なのかしら？いずれにしても、貴方がやるうとしてることなんて欲深い人間の誰もが企むことなのよ。それを認めないで上から目線なんて…痛々しい人ね、貴方」

冷たい瞳で、冷たく言い放つほむら。ゾディアックは少し笑いながら、その言葉に返事をする。

ゾディアック「ほっほっほっほっ…つれない人ですね。自分の力量をわきまえずにそう堂々と言われては、どう答えてあげれば正しい答え方なのか悩みます」

ほむら「そっくりそのまま返すわ」

ゾディアック「…ふむ…これ以上話しても時間がなくなるだけです。貴方もここで死んでいただきます。貴方の能力も予習済みですよ？時を操るのが主力…なので私の時を止めることができないように対策をさせて頂きました。まず、貴方に勝ち目はありませんよ」

どや顔で言うゾディアック。しかし、ほむらはそれでも表情を崩さない。

ほむら「そう…なら、試してあげる」

ゾディアック「いいですよ。さあ、どこからでもよろしいですよ？私を止めることは不可能だということが、すぐに……」

きいいいいいん！！

ゾディアック（！！？な、何…？）

ゾディアックの言葉に甘えて、ほむらは円盤を起動させて時を止めた。すると、ゾディアックは自分の予測や計算が外れたことに驚いて、考える暇もなく時を止められた。それをしっかりと見たほむらは、ゾディアックに近づいて魔導書に拳銃を向ける。

ほむら「貴方には、本当にわからないようね…」

だあん！！だあん！！だあん！！

銃弾を撃ち込み、そして元の場所へ戻り…

かちっ…すぎゆうんっ！！！！

時は動き出し、ゾディアックの魔導書に3つの大穴が開いた。しかも、それはただの弾丸ではなかった。

ぼううううう！！！！

ゾディアック「な、黄衣の王が！！？」

ほむら「いくら力があっても、根元を断たればそれまで…貴方の場合、その本さえなくなってしまうえば、ただの魔導士になり下がる。今撃ち込んだ弾丸は、魔力を食べ、魔力を停止させ、魔力を燃料として蒸発させる3つの魔弾…それにより、魔導書にかけられた障壁を剥がし、さらに魔力の流れを一時的に止め、そして魔力が油となつて本を消滅させる」

ゾディアック「ば、馬鹿な！？こんなことが…くっ、うおおっ！！」

ごおおおおおおおお！！

激しく紫色に燃え盛り、ゾディアックは魔導書を手放した。それは暴発する暇もなく、灰も残さず消滅した。それによって、ゾディアックにかけられていた反転魔法陣も消滅した。

ほむら「本格的に動く前に、魔弾を学び用意しておいて正解だったわ。これなら、あの宇宙生物の息の根も確実に止めることができる」
ゾディアック「…おのれ…！！何故だ…何故、私の時が止められたのだ！？対策はしてあったはずなのに…」

ほむら「一歩足りなかったようね。対策するのは、貴方だけじゃないの。話すことはもうないけれど」

長い髪を手で後ろに払い直しながら、ゾディアックにそう言った。
ゾディアックが冷静さを崩して取り乱す中、他の動きも見えた。

フウ「ありがとう…これで、ようやく仕返しができるよ」
ゾディアック「!?!」

ゾディアックの後ろにフウとセレナ、ベルが立っていた。
彼女達からは、先ほどまで感じることもなかった魔力をびりびりと
ちらつかせている。

セレナ「…もう容赦しない…殺す…絶対に殺す…」
ベル「さんざんやってくれたわね…?」
フウ「保険入っても…無駄だよ」

フウが指を鳴らすと、ゾディアックの周りに幾つもの凶器が浮かぶ。
そして、すぐにそれらはゾディアックへと降り注いだ。セレナとベ
ルの最大級の属性魔法と共に。

ずががががががががああああああん!!!

ゾディアック「ぐぬおおおおおおお!!!?」

だっ!

こなた「爺さんには悪いけど…あばら骨、へし折らせてもらっよ!
!!!」

かがみ「絶対に許さない…地獄へ堕ちろ!!!」

次に、こなたとかがみが反撃に出た。

こなた「奥義、鬼炎斬！！！（剣に闘志を宿し、鬼炎のごとく斬りはなつ）」

かがみ「白虎天雷牙！！！（神の雷が白虎の牙を形作る）」

ずどばああああああん！！！！

ゾディアック「ぎゃあああああああ！！！！！」

怒涛の反撃をまともに受けて、ゾディアックは膝を突く。このままではやられると判断した彼は、懐からある黒い石を手にした。

ゾディアック「ぐうう…ま、まだ終わりはせんぞ！！デニー様、私にお力を！！！」

ばきいいいん！！（石を割る）

割れた石から黒い煙が噴出し、それはゾディアックの身体へと入りこんでいく。すると、彼から魔力があふれるように生まれてくる。やがて、ゾディアックは黒い魔力と共に立ち上がり、宙に浮いてオーラを全開して威圧をかける。

ゾディアック「ここまで追い詰められるとは予想外だ。だが、それももう終わりだ！！今の私には永久反転魔法陣が張られ、さらに黄衣の王なしでも魔術が使えるようになった！！今度は貴様達全員に悪夢を植え付けてくれるわあああああつ！！！！」

両手を上にあげ、どす黒い球弾を作り始めた。大きくなるそれで、全員を跡形もなく消し去るつもりでもあるのかもしれない。

最も…黙ってさせるわけなどないのだが。

ずどばあああつ！！！！！！

ゾディアック「ぐばあああつ！！！！？」

魔法陣など役に立たなかった。何かが働いて実力が変貌した圭一とレナの攻撃は、反転魔法陣の効果を一切無視してしまい、バットと鉞がゾディアックの身体に強打したのだ。魔法陣は砕け散り、さらに暗黒の球弾も魔力の集中が途切れて消え去った。

どざあつ！！（落下）

ゾディアック「ば、馬鹿なああ……！！！？ただの餓鬼共の攻撃ごときに、反転魔法陣が全て破られただとおおおお……！！！？」

こなた「覚悟を決めなよ。私、今すぐごく機嫌が悪いんだから」

ほむら「……ゾディアック・ランドルフ・カーター。貴方は怒らせてはいけない者達を怒らせてしまったわね……貴方にこの一言を送るわ。……消えなさい」

ゾディアック「ぐううう……おのれえええ……！！！！」

すでに全員の実力は未知数の状態。ゾディアックのパワーアップなど無意味であり、もはや勝ち目などない。

ひゅん！

その時、全身ボロボロの状態であるイオドが駆け付けてきた。

イオド「ゾディアック殿！！」

全員「！！」

セレナ「あいつは、まさか仲間！？」

ゾディアック「……イオドさん、ここは一時撤退する！！仕切り直し

だ！！」

イオド「了解！すぐに時空移動で脱出する！」

かがみ「逃がしやしないわよ！！！」

ベル「このまま帰さないって言ったはずよ！！！」

ゾディアック「黙れ！！この愚か者共め…この借りは、必ず返してくれようぞ！！！」

圭「待ちやがれええええええ！！！（フルパワーバスターショット）」

「おおおおおん！！（浮遊してよける）」

イオド「次はこうはいかんぞ！！次こそ、デニー様の礎に…」

「おおおおおおつ！！！」

イオド・ゾディアック「ぎゃああああああああ！！！」

「??」

しかし、何者かに殴られて二人は床へ叩きつけられた。すぐに起き上がって確かめると、その正体はすぐにわかった。

イオド「ぐうう…、！？き、貴様…！！？」

カイト「許さねえ……てめえら…絶対に許さねえつ！！！！！」

ミリアを…そして仲間を傷つけた二人への怒りによって変貌したカイトは、バスタードソードの刃に業火をまとい振り上げて落下した。

イオド「なっ、まだそれほどの力を隠していただと！！？」

ゾディアック「こんな…こんなはずではあああああああああ

あ！！！！！！！」

ついでるんだから」

カイト「うん…そうするよ…」

カイトは皆に休むように勧められ、言葉に甘えてミリアがいる部屋へ戻って行った。

ステラ「カイト君…すごく悲しそうだったね…」

言葉「無理もないですよ。大切な人が酷く傷ついてしまつてショックを受けてますし、あの人のことです…きっと自分を責めてるかもしれない…」

誠「…そうだな…」

ネプテューヌ「…ネプギア、後でカイト達の部屋に行つてあげようよ」

ネプギア「うん、私もお見舞いに行きたい」

他の仲間達も気分が暗い中、助けに来てくれた者への話も進める。

なのは「…それで、ほむらちゃんつて言つたっけ？後でいろいろ話をしたんだけど、いいかな？」

ほむら「はい、私も貴方達に話すべきことがありますから」

フェイト「うん、ありがとう…」

なのは「助けに来てくれて、本当にありがとうね。何てお礼を言え方がいいのか…」

ほむら「気にしないでください。私はただ、私のやるべきことをしただけです」

はやて「やるべきこと…か。それも、わけありのこととかかな？」

ほむら「…それについても、ちゃんと話します」

はやて「そっか。じゃあ後でゆっくり聞かせてくれな」

会話の後、一旦ほむらは外へ出る。

入口付近から夜空を見上げ、ほむらは想う。

ほむら（……私は決めた。貴方のためにも……私は彼らと共にいる。
そして……必ず……）

今日の星空は、綺麗だった。

ほむら（……まどか……）

27話「怒りが呼び起こすもの」(後書き)

というわけで、ほむらも入学させました。

まどかについても仲間に入れる予定ですが、まだ先になりますのでファンはしばらくお待ちください。

で、カイトとミリアはしばらく立ち直るのに時間かかるかもしれない。ですから、シリアスが1〜3話続く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2514x/>

超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

2011年11月1日02時25分発行